

ほんとうの豊かさと私たち

2011.2.17-2.28 アジアとの出会いと異文化体験 バングラデシュの生活文化とフィールドワーク I



フェリス女学院大学

目次



フェリス女学院大学「アジアとの出会いと異文化体験」2010 スタディーツアーの記録
 Bangladesh の生活文化とフィールドワーク I 東 宏乃 文学部コミュニケーション学科……………2

私と Bangladesh 葉師寺理子……………32

Bangladesh における経済格差是正と底上げ

グラミン銀行、NGO の活動、ショミティ活動を通して 渡辺早香……………35

NGO とグラミン銀行の役割の違い 前埜孝枝……………38

Bangladesh の子どもたち 阿部結花梨……………42

Bangladesh の子どもたち 風間美樹……………45

Bangladesh の子どもたち 齊藤 朋……………48

Bangladesh の子どもたち 長崎彩美……………51

Bangladesh の女性たちの今 杉本美紀……………54

Bangladesh の村の女性たち 信濃直美……………57

JOSSOR サティアントラ村の生活について 矢澤みづき……………60

共生 宮田晴菜……………63

Garment と女性の可能性 成松 咲……………65

旅のアルバムから……………68

2月17日(木)、18日(金) Bangladesh へ、サロワ・カミューズ購入……………72

2月19日(土)

コモラプール駅前の青空教室、オポロジェヨ・ Bangladesh を訪問

オールドダッカ、図書祭り、ダッカ大学……………73

2月20日(日)午前 アムラボ村へ……………74

2月20日(日)午後 PAPRI の本部ナラヤンプル、アムラボ村の少女グループ・PAPRI のゲストハウス……………75

2月21日(月・祝日) ベンガル語国語化運動記念日・WARIBOTESHO 遺跡……………76

2月22日(火)午前 縫製工場……………77

2月22日(火)午後 グラミン銀行訪問、スリナガル村宿泊……………78

2月23日(水) シズエ・モデル・ジュニア・ハイスクールなど……………79

2月24日(木)午前 ジョソール県 サティアントラ村……………80

2月24日(木)午前・午後 ジョソール県 サティアントラ村……………81

2月25日(金) ジョソール県レプトラ村へノクシカタを見に、そしてダッカへ……………82

2月26日(土)27日(日)28日(月) シェアリングのワークショップとお買いもの、そして帰国……………83



Bangladesh の生活文化とフィールドワーク I

東 宏乃 文学部コミュニケーション学科

1: はじめにー赤い服を着たインドの女の子

21歳の時、私の初めての海外旅行は、インドだった。ヒンドゥー教と仏教遺跡をめぐる贅沢な2週間の旅だったが、遺跡の思い出よりも、1人の小さな女の子のことが忘れられない旅となった。そこは、インド・デカン高原のど真ん中、バンガロールから貸し切りバスで2時間程奥地に入った乾燥した荒地で、遺跡を少し離れると、灌木と砂漠だけが広がっていた。

そこで、ぼつんと、1人の女の子に出会ったのである。遊牧民の家族が家財道具をロバに乗せて移動していた。その群れから少し離れて、女の子は、薪（まき）を拾いにこちらに近づき、現地の民族衣装を着た私に気づいた。目が合ったのである。黒く真丸い瞳。じーっとこちらを見ている。私のことを誰かとか何人かとか考えていたのかもしれない。

こちらも、言葉をかけたいけど、現地語がわからない。もちろん英語は通じない。

女の子は、白く一面に広がる砂地と褐色の風景が広がる中、赤いワンピースを着ておりとても印象的な存在だった。一枚の絵を見ているようだった。そして、ワンピースの裾が風になびく。しかし、服のところどころにほころびがあり、頭の上には、燃料にするのであろう拾った灌木が何本か載っていた。それらは、彼女の生活が苦

しいことを物語っていた。

遊牧民であるから耕作地を持たずに、いろいろな土地を転々とする生活だろう。もちろん学校には行っていないと考えられた。

私は、思った。彼女のような貧しい女の子が出ない世界をつくろうと。

そして、風景をただ眺めるような、現地の人々と交流のない観光旅行は2度とやめようと思ったのである。インドの首相になると言っているのではない。第三世界の貧困問題の解消に携わる活動をしようと思ったのである。

但し、専門性をもった関わりをしたかったので、その後、私は、学部で専攻した植物生態学から、大学院では生態人類学へ転向することになる。

その少女との一瞬の出会いが、国際NGOでの現場実践と地域研究とを続けるジグザグな私の人生の起点となったといっている。

2: 授業科目「アジアとの出会いと異文化体験」

2010年1月、現地と連絡を取り合いながら「アジアとの出会いと異文化体験ーBangladeshの生活文化とフィールドワークI」のシラバスを書き、2010年4月、海外短期研修のガイダンスでこの授業の案内をした。し

かし、そのガイダンスは私としては上手くいかなかった。フェリス女学院大学の女子学生のある種の美しさの前に私は戸惑ったのである。Bangladeshのもつ国の発展期としての荒々しさや、シャワーどころかポンプ井戸しかない農村でのフィールドワークの実際像と、長い美しい髪をもつ彼女たちのイズマイが上手くかみ合わない感じをもったからであった。

案の定、学生からの質問は、「カレーは辛いですか?」というような初歩的な質問に終始し、スタディーツアーのねらいにまで肉薄してくる学生はいなかった。後期に開講しても何人の学生が来るのか心配だった。しかしその心配は、実際に後期の9月になってみると若干和らいだ。

新しく12人もの履修者がいたのである。南アジアの未知の国、Bangladeshに10日間も行くツアーなのである。聞くと、コミュニケーション学科の学生は1人で、その他の履修生は国際交流学科が11人だった。木曾先生の授業で、Bangladeshの経済についてはすでに学んでいる学生もいたし、後からわかったのだが、高柳先生の授業でNGO論を勉強してきた学生もいた。

それでも、本当にこの子達はBangladeshに行くのであろうかと、半信半疑が続いた。しかし、レポートを課すと、みずみずしい答えが返ってくるし、授業態度

AZUMA HIRONO

も非常に真面目である。いい子達に出会ったと、徐々に私の気持ちも前向きになっていった。

しかし、月に1回、全5回の講義では、学生に向かい合うための時間は少なく、急ぎ足に講義は進む。本当は12人と少人数なので、お互いの考えをぶつけ合うゼミ方式で授業をしたいところだが、90分の授業では、オリジナル教材を使つてのワークでせいっぱいだった。机と椅子を動かすことは可能だったが、前後に他の講義もあり、時間的に丸く車座になることもできず、ワークショップ形式も十分にはできなかった。

それでも、農村の屋敷地を紹介する教材を使った「ソフィアさんちの家族マップ」の授業では、「バングラデシュの農村では知恵のある生活をしていて、少しうやましくなりました。」や「ある種の豊かさを感じました。」などと、「貧しい・きたない・かわいそう」といような南アジアに対するステレオタイプな印象とは全く違う像を持ち始めてくれた。

現地のJABAtourと密に連絡を取り、旅程を絞り込んでいった。農村は平和で心豊かなバングラデシュだが、moving countryといわれるように、今、経済発展の真ただ中にある国でもある。新しい動きを感じてもらうために、旅程には、Grameen銀行と縫製工場を付け加えた。そして、ゲスト講師のカムルズ・ザマン氏にベンガル語のミニ・レッスンもしてもらい、また、海外交流課の全

面的なバックアップも受け、12人そろって出発日を迎えることになった。

3: スタディーツアー前夜 (小さい事件)

しかし、今回のツアーには、小さい事件がいくつもあった。まず、Aさんの旅券の有効期限が6か月未満なので、タイに入国できないかもしれないというのである。日本側の旅行会社には海外交流課が何度も確認し、「大丈夫」との返答を得ていたが、出発日前日になって、入国できるかどうか怪しいことがわかった。タイの入国審査官の胸先三寸であるというのである。それでは困る。海外交流課の課長も対策を練って下さって、Aさんには、①シンガポール経由でダッカから入国する、②直行便でダッカに入る、③バンコクのトランジットホテルを利用してもらい、本隊は予定どおりバンコク市内のホテルに泊まるという、3つの選択肢が提示された。

短時間で判断を迫られた。私はひらめいて、4番目の選択肢を挙げた。

④全員揃ってバンコクの国際空港内にあるトランジット用のホテルに泊まり、翌日ダッカに予定どおりに入るというものである。

これは、参加学生にバンコク市内の土を踏ませない厳しい選択となったが、全員でツアーを始めるためには大

事なことだった。

私としては、バンコクで、最終スケジュールの説明と学生1人ひとりのフィールドワークのテーマの確認を行う予定だったので、この選択肢しかなかった。学生の中には不満もあったであろうが、元々、バンコクの市内観光は予定していなかったので、これは英断だったと今でも思っている。海外交流課が旅行会社に交渉してくださり、13人分のバンコク国際空港内のホテルの予約をとることができた。

私は、バングラデシュの地は何回も踏んだし、かつてはカンボジアに駐在していたので、バンコクは乗り換えてよく利用していたが、今回は、最近のタイ国の治安の問題もあり、実はバンコクでの滞在を一番心配していた。バングラデシュに行ってしまうえば、経験豊富なJABA tourのアラムさんが待っていてくれるし、若いスタッフ、ルベルもいる。それまでの、がんばりだ。

4: スタディーツアーの概要

ツアーの全行程は12日間、そのうちバングラデシュには10日間の滞在となる。

「アジアとの出会いと異文化体験ーバングラデシュの生活文化とフィールドワーク I」
 2011年2月 スタディーツアー実施スケジュール 20110301 AZUMA



PAPRIの事務所からアムラボ村ヘリキシャで移動

日時	内容	宿泊場所
2/17 (木)	成田 (TG641) (10:45 発) からバンコク (15:45) へ 夕食の前、オリエンテーションと自己紹介用のグループワークと歌の練習 夕食 国際空港内でタイ料理→自由見学	バンコク 国際空港内 ホテル泊
2/18 (金)	朝 TG321 でバンコク (10:55 発) からダッカ (12:30 着) へ 午後 16:00 までホテルで休息 夕方 NGO・BRAC が経営する ARONG と、芸術大学がプロデュースする JATRA で、若い女性の伝統的衣装 (サロワ・カミュズ) を買う。 夕食 ベンガル料理。Bさんの誕生日をケーキで祝う 夜 明日以降のオリエンテーション	Hotel de crystal crown
2/19 (土)	朝 10 時頃 バスの中で Cさんの気分が悪くなり、アラムさんの家へ寄る。 オボロジェヨ・バングラデシュが運営するストリート・チルドレン事業へ。 コモラプール駅前の青空教室を見学・交流し、その後、モティジュール地区のドロップインセンターを見学・交流。 昼食 ベンガル料理 午後 オールドダッカ (旧市街地) で、ヒンドゥー教が盛んだった時代の建物や、ダッカの領主の住居ピンクパレスを見て、足に怪我をし働くストリートチルドレンに会い、小舟に乗る。図書祭りとダッカ大学・カルジョンホールを見学する。 夜 高級中華料理店とふりかえり。	Hotel de crystal crown
2/20 (日)	早朝 7:30 ダッカから NGO・PAPRI へ車で移動 (ノルシンディー県ベラボー郡アムラボ村) 11:00 ~ 女性のマイクロクレジットグループを見学 「チョール・ベラボー・モヒラ・ショミティ」 13:00 ~ PAPRI の本部ナラヤンプルに移動して昼食 14:00 ~ 本部で少女グループの文化プログラムを見学、 16:00 ~ アムラボ村の少女グループ (キシュリ) と交流 18:30 ~ PAPRI 代表バセットさんとミーティング	PAPRI のゲ ストハウス



マドラサ（宗教学校）の男子学生と

	19:30 ~	ふりかえり Bさんが気分が悪くなり、先に休む	
	20:00 ~	PAPRIのゲストハウスで夕食（ベンガルカレー）	
2/21 (月・祝)	6:00 ~	言語運動の記念碑に献花（生徒や教師とともに）	Hotel de crystal crown
	8:00 ~	朝食（キチュリと玉子カレー）	
	9:20 ~ 10:00	希望者7人がルベルと散歩	
	10:00 ~	WARI BOTESHU 遺跡見学	
	13:00 ~	パプリのゲストハウスで昼食（ベンガルカレー）	
	14:40 ~	アムラボ村からダッカへ車で移動	
	夕食	高級中華料理店へ。そこで、前半のふりかえり。 日本の国際NGO・シャプラニールの小嶋氏と歓談	
	夜 11:00	ホテルのシャワーのお湯が出なくなり少し混乱する	
2/22 (火)	午前	朝、両替用のドルを集める。（夜スリナガルで現地通貨を渡す） ダッカ南西部アショリア地区	スリナガル の民家に 宿泊
	10:20分 ~	縫製工場 ANANTA の見学（従業員 8000 人）	
	12:00	GAP 担当の MR.JILLUR 氏、副工場長 Humayam 氏の対応を受ける。 説明と工場見学、記念撮影。	
	13:30 ~	KFC で急ぎ昼食	
	14:00 ~ 18:00	Grameen 銀行訪問&レクチャー Mrs. Jannat -E-Quanirre 女史 11階の資料室と1階のノーベル賞展示室を見学	
	18:00 ~ 18:30	Grameen check でサリーを買う	
	夜	スリナガル村（ロホジョング郡）に移動 蚊退治・水の補給。 車の中で「ふりかえり」で D さん E さんが泣く。	
	夜遅く	スリナガル村の伝統的民家に宿泊 シラスのカレー他 満天の星空の元、深夜2時半まで起きている2年生数人	
2/23 (水)	6:00 朝食	（前夜、寒くて F さんが寝られず）	ジョソール Mr.TUHIN Miss THITI の家
	7:00 出発	ガンジス河マワ橋付近の魚市場へ 紅茶屋さん	
	9:30 ~ 12:30	SIZUE 小学校 見学 & 交流	
	9:30 ~	校長先生と懇談 校庭で大縄跳び	
		5年生クラスの英語の授業を見学 20分~30分交流	



サティアントラ村の自然風景



ヘナ染めで模様を描く

昼食	先生方と懇談 (Fさんは気分が悪く別室で休憩) 伝統的クルーズ船で昼食 ガンジス河を遡上	
夕方	船着き場に着了いたら TV 番組の取材が乗り込んで来る 車で地方都市ジョソールへ移動	
夕食	夜遅く JOSSOR サティアントラ村に到着する TUHIN さんの家でいただく (ベンガル料理) 停電	
2/24 (木) 午前	サティアントラ村 TUHIN 家の周辺をフィールドワーク イスラム教とヒンドゥー教の村人が共存する村を訪ねる 池の周りで、グループワーク (村の良い点と午後のテーマ)	ジョソール TUHIN 家
14:00 頃	TITHI の家で昼食 (ベンガル料理) 井戸で髪を洗う	
15:00 ~ 16:00	サリーの着付け 村のバザール (木曜市場) へ出かける (村の調査ができずに終わる)	
夕食	東が喉の風邪をひく パパイヤのおやつが出る ベンガル料理 サラダが出る 東は先に就寝。学生は家族と交流を続ける	
2/25 (金) 早朝	サティアントラの村の池の周りで瞑想 ヒンドゥーの村では、ロクロによる陶器づくりを見学 イスラムの女性にはカタ (刺し子の布団) を見せてもらう	Hotel de crystal crown
9:00	TIHTI の家で朝食	
10:00	伝統的刺繍布ノクシカタを生産するレプトラ村へ出発	
11:30	レプトラ村到着 ノクシカタを見せてもらい購入もする	
13:00	昼食 THITI の一家とお別れ	
14:30	ジョソールからダッカへ車と船で移動	
18:15	伝統的な船 PANSH NAO 号の船上で民俗芸能バウルのミニ・コンサートと	
20:00 ~	夕食	
21:00	マワ橋付近に到着 ダッカ市内に向かう 渋滞	
23:00	ホテル着	
2/26 (土) 午前	ゆっくり起床	Hotel de crystal crown
10:15~10:45	仕立て屋さんによる服の採寸	
10:45~13:30	シェアリング (共有) のワークショップ	
昼食	KFC (グルシャン店)	



シェアリングの発表

ツアーの具体的な日程の内容については、各日程を担当した学生の報告をご参照されたい。

特徴は、最初はゆっくりバングラデシュに慣れ、徐々にきつくなるスケジュールになっている。3つ行く農村も、始めは、ゲストハウスに1泊、次に、2か所連続で民家に3泊とした。前半は、ストリートチルドレンのプロジェクトや NGO の農村開発、Grameen 銀行と縫製工場など、バングラデシュの今を知るための視察が中心になり、後半には、地方都市ジョソールに足を伸ばし拡大大家族のいる民家に泊まり、家族と交流するようになっていく。

1つ残念だったのは、ユヌス氏には会えなかったこと

午後	NGO・BRAC の手工芸品店 Aarong で買い物 クムデニで買い物 スーパーマーケットで買い物	
夜 19:00 前	高級インド・ベンガル料理店で アロムさんのイスラム教のお話 &ゲストの JILLUR 氏（縫製工場 GAP 担当）と懇談	
深夜 12:00	B さんの E チケットが見つからず。	
2/27 (日) 朝 7:00	B さんの E チケットの入った荷物を発見	機中泊
朝 10:40	ホテルを出発して空港へ向かう	
午前	ダッカ (TG322、発 13:40) からバンコクへ移動	
午後	バンコク (17:10 着) 国際空港内で アロムさんへのアンケート書きと自由行動 (食事と休息)	
夜	バンコク発 22:35 成田行き (TG640) へ乗る	
2/28 (月)	早朝 成田空港に到着 (6:15) → 成田で解散	

だ。2006 年のノーベル平和賞を受賞した Grameen 銀行の総裁、ユヌス博士に会うために、旅程の一部を変更して、ぎりぎりまで返事を待った。その甲斐があり、最初は、2月22日(土)午後にお会いできるとの返事をいただいた。が、出発直前、土壇場でダメになった。ユヌス氏が海外に出るというのである。私たちの帰国後、3月2日に総裁を解任されるという“政変”があり、後からだが、キャンセルの事情も十分に納得できた。2月後半、本当に微妙な時期だったのである。

さて、私は、なるべく学生の学びの変容について書くことにしよう。

10日間の滞在を経て、学生にとってのバングラデシュ



の印象が、どんどん変わっていったのである。なるべくその様子にフォーカスして報告を書いていきたい。

5：様々なストリートチルドレンとの出会い －「カメラを向ける自分」

空港に降り立つと、家族を迎える人や荷物持ちの仕事を得ようとするバングラデシュ人でごった返していることが多いが、今回はそれほどでもなかった。でも、その中に小さい男の子が何人かいた。空港の出口から車の駐車場まで荷物を運ぶ仕事を得ようとしている子達だ。彼らは、親がなく路上で暮らすいわゆるストリートチルドレンであることが多い。

フェリスの学生も何人かはその子達の存在に気がついたと思う。バスの車窓からもストリートチルドレンを見た学生もいる。国際クリケット大会が開催されるほど、豊かな国になったバングラデシュではあるが、まだまだ、



青空教室、シートの床に丸く円になって文字を書くストリートチルドレン

人々の経済的な格差はかなり大きい国だ。

さて、本番。ダッカに入った翌日に、地元 NGO オポロジェヨ・バングラデシュが運営している、ストリートチルドレンのための青空教室を訪問する。青空教室は、コモラプール駅の脇の空き地にあり、50人近い男の子が集まって、テキストの音読などをしていた。

そこへ、民族衣装に身を包んだ若い外国人の女子大生が12人も来訪。場は一気に盛り上がり、握手を求め、いくつもの手や嬌声の中、子ども達をぐるりととりまく位置に場所をみつけ、説明を受け交流を行った。

何人かが報告の中で書いているが、子ども相手とはいえ、最初は、ストリートチルドレンに会うのが怖かったという。しかし、駅の中心部にバスで着いた私たちを、人なつっこい2人の男の子が迎えにきてくれていて、



青空教室で、前に並ぶ学生たち。中央はアラムさん

それで、多少の不安がなくなったようだ。

まず、子ども達に、仕事について聞く。くずひろい、荷物運び、物を拾ってそれをリサイクルし小銭を手にする、新聞売り、ケーキ売り、果物売り、季節によって売るのが変わる場合があるという。

おそらく栄養が足りていないと思われるのだが、11歳12歳でも小さいからだと、仕事をしている彼らの姿に、学生は皆、日本の子どもの違いを強く意識する。

45人以上居る男の子に混じって1人だけ女の子が居た。12歳だという。繊維工場に勤めるお母さんの手伝いをしているとのことだが、将来は自分が繊維工場に勤めたいということだった。このように、ストリートチルドレンは男の子が多い。では、女の子はどこに行ったのかというと、首都の裕福な家で家事労働に従事していることが多く、その実態はよくわかっていない。日本の国際 NGO 「シャプラニール＝市民による海外協力の会」では、ストリートチルドレンへの支援で浮かび上がった次の問題として、家事労働をする女の子への支援を行っている。

次に将来の夢。

サラリーマンになりたい、お医者さんになりたいなど、夢は大きい。

その願いが叶うように、皆でお祈りをする。

最後に、1日に何食食べているかについて聞いた。

1回しか食べていない子どもが3分の1.

2回食べている子どもが3分の1.

3回食べている子どもが3分の1.であった。

だいたい、朝と夜だけ食べ、昼間は我慢しているようだ。また、列車が到着して荷物運びの仕事にありつた場合だけ、食べることができるのが実際のところらしい。誰も仕事をくれなかったから食べていない、という答えには、胸が詰まる思いがした。

日本人のお客さんが来るというので準備していたのだろう、歌の上手い男の子が歌を歌ってくれた。「私の胸の内を誰に話せばいいの」という曲と、お母さんを想う歌の2曲だった。フェリスの学生も歌を歌ってお礼を返した。曲はAKB48の「会いたかった」であったが、声が少し小さく、弾ける様な曲にはならなかった。それは、彼女たちのとまどいを反映していると思われた。

駅の青空教室を見学した後、MOTIJHELLにある、ストリートチルドレンのためのドロップインセンター(一時滞在所)を訪問した。

ここでは、子ども達が様々な遊びやカルチュラル・プログラムに参加していた。ある1室では、女の子達がおそろいの服に身を包んで、踊りの練習をしていたので、見学させてもらった。

ほとんどの学生が感じ取ったことだが、子どもたちはよくしつけられていた。私達外国人が入室しても、踊り



踊る女の子たち

は中断されることなく集中して続けられていたし、私達が持っているカメラの画面を覗き込む時にも礼儀正しかった。子ども達は、路上生活から、センターに移行する中で、大人を信用するようになり、自己肯定感も高まり、自分のところをコントロールすることができるようになってくるのだという。

学生達は、ここでも歌った。お礼の意味を込めて。こんどはkiroroの「Best Friend」という叙情的なメロディーの曲だった。場は静まりかえり、歌い終わると拍手が起こった。

その後は、いっしょに写真を撮ろうと、学生と子ども達は互いに身振り手振りで盛んに交流していた。自分が写った写真をデジカメの画面で確かめ、笑っている女の



見学のお礼に歌う学生達



歌に聞き入る少女達

子が多かった。こうして、テレビの画面でもなく、本の中でもないストリートチルドレンと直に交流が果たされ

た。ただ、写真を撮るだけの関係で終わったのはもったいなかったが。

その後、残念ながら子どもたちへの質問の時間はなく、地元 NGO オポロジェヨ・バングラデシュのチーフプログラムコーディネーター、Farida さんのレクチャーを聴いた。オポロジェヨ・バングラデシュの取組を聞く中で、大事だったのは、NGO の提言を受けて、2009 年に子どもの権利に関する法案が国会を通ったことと、県レベルで 64 もの子どもセンターができたことだった。しかし、話が終わると、学生からの質問は出なかった。ただ、G さんのレポートには、様々な施策に関して、政府というものは動くのが遅いという指摘があった。それは、日本でもバングラデシュでも同じことだという意見である。ごもつともである。子どもは地球のかけがえない大切な財産であるから、愛情を受けて育つべきであるというのも、彼女の結びの意見だった。

「子どもは国の宝」と書いていないところがおもしろい。「地球の財産である」と書かれた点で、最近の学生の認識にグローバル化が進んでいることが伝わってくる。

そう言えば、私も、まだ国連軍が駐在し地雷原がたくさんある危険な時期の 1991 年に、NGO の専従スタッフとしてカンボジアに赴任する時、両親から、「地球の子になったのね。」と、諦めとも覚悟ともつかないフレーズを聞いたのを印象深く覚えている。



旧領主の居城 ピンクパレス

東西冷戦が終わり、1989 年にベルリンの壁が崩壊した時から、人とモノのグローバル化が進んだといっているが、今回バングラデシュに行ったフェリスの学生は、まさに、壁崩壊直後に生まれた子達だ。その学生達を引率するのも何かのご縁かとも思った次第である。

ストリートチルドレンへの支援の取組を見た後、午後は、オールド・ダッカ（旧市街地）に出かけた。そこは、旧ダッカの領主が住んでいた御殿（「ピンクパレス」）や大きな船着場があるところで、多くのストリートチルドレンが、荷運びや物売りの仕事はないかとウロウロしている場所の 1 つだ。

やはり、1 人の男の子に出会った。肩に荷運び用の袋を担ぎ片方の手にも袋を持っている。そこは果物を売る



働くストリートチルドレン

一角であったから、果物を運んだ帰りだった可能性が高い。呼び止めると、恥ずかしそうに顔を下に向けた。学生達が一斉に写真を撮り始めたからかもしれない。よく見ると、素足の足の甲に大きな怪我をした深い傷跡が残っている。傷は完全に癒えていない。一歩間違えると感染症で足を片方無くさねばならないことになる。病

院になぜ行かないのと尋ねると、首を横に振るばかりであった。ガイドのアラムさんがそっと100タカ札を渡した。医者に行くようにと言い添えて。その頃は、学生達の写真撮影のラッシュも終わっていた。学生はみんな沈うつにしていた。午前中は、とても元気なストリートチルドレンに会ったばかりだ。その直後、今度は、保護されていない、いわば、本物のストリートチルドレンに出会ってしまったのである。

Gさんは、このストリートチルドレンが忘れられないとレポートに書いている。そして、写真を撮るのをあえて止め、自分の瞳でしっかりとストリートチルドレンを見ようとしたとも。そして、その男の子との出会いが、 Bangladesh の現実を受け入れるきっかけになったのだ、とも書いている。

そう、現実。スタディーツアーとは言え、本当に駆け足の旅だ。その時、その時、出会ったことについて、自分に問わないと、ただの風景として流れていってしまう。しかし、現実に出会い、そこで、立ち止まり、考えることができれば、その体験は本物の経験として身につく。だから、時間が許す限り、今回のツアーでは「ふりかえり」を大事にした。

一方、2年生のHさんは元気で明るい。チームリーダーとして今回活躍してくれた。彼女は、Bangladesh のニオイを感じたいと、Bangladesh に入国する前のバ



小舟でメグナ河へ

ンコクでのミーティングで宣言していた。

ニオイは、人に現実を突きつけてくる。惨劇に目を閉じ耳をを塞いだとしても、ニオイは防げない。そう、ニオイは人を現実にとどめ置くのだ。

オールドダッカでは、そんなニオイもたくさん味わった。腐った果物のニオイ、ゴミが路の脇に積みかさなったニオイ、お香のニオイ、ブリーダーニ（炊き込みご飯）屋さんから香ってくるスパイスのニオイ、そして何より、小舟（ノカ）で漕ぎ出したメグナ河支流の真っ黒に汚れた川面のニオイ。

この日一日で、学生達はBangladesh の街の洗礼を受けた。

さあ、明日からは、農村だ。



相互扶助グループ（ショミティ）

6:農村の少女グループ（キシュリ）との交流 - 「どんな大人になりたいか」

首都ダッカでストリートチルドレンの現実を見た翌日（2/10（月））は、首都近郊農村・ノルディンディー県ベラボー郡アムラボ村に行き、午前中に農村女性の相互扶助グループ・ショミティと、午後には少女グループ・キシュリと交流した。

少女グループは、元々、日本の国際NGO「シャラニール＝市民による海外協力の会」のCommunity Development Center（CDC）として発足した事務所が、1999年に地元NGOとして独立したのだが、そのNGO・PAPRI（パプリ）が支援し、村の少女達が組織



少女グループの中庭での活動

化され、グループを作って様々な活動をしている。PAPRI が独立した時の儀式には私も参列しているのだが、団体名の PAPRI はベンガル語で「花びら」という意味で、Poverty Alleviation through Participatory Rural Initiatives（参加型農村の取り組みを通じた貧困削減）という英語名の頭文字をとった名前でもある。NGO だから農村開発をするのだが、富める側から貧しい側への一方的な援助ではなく、参加型で農村の人々の主体性を大事にする点がミソというわけだ。

少女グループ（キシュリ）について、まず、ブリーフィングを受ける。

キシュリは、思春期に相当する 11 歳から 18 歳の少女達で構成されている。その年齢はちょうど、少女が女性



左から2番目がPAPRI代表のバセット氏。右端は、JABA tourのアラムさん

の体になっていく過程でもあり、精神的にも「ボヨショन्दカル」の時期と言われ、

- *体が重く大きくなる
- *心は外に出たくなる
- *携帯電話で話したくなる
- *いい友達がほしくなる
- などの変化が起き、この時期に注意することとして、
- *男の子に（言い寄られるなど）変な事をされたら、すぐに親に相談する
- *外出する時は、1人ではなく複数ででかけるのだそうだ。

11 歳～18 歳は、10 年昔であれば、早婚させられている年齢だ。しかし、国の近代化に伴い早婚は良くない

ものとされ、そのおかげで、農村女性の子ども期と大人期に間に「思春期」という時代が生じるようになった。その思春期の女の子のエネルギーを村の開発に生かそうというのが、PAPRI の狙いであり、少女グループ（キシュリ）の活動だ。

PAPRI の支援と国策とが相まって、「良いお母さん」になるために以下の研修が行われている。

- ① Gender Development Training (男女差別などジェンダー問題を学ぶ)
- ② コンピュータのトレーニング
- ③ 法律（早婚の禁止など）
- ④ Leadership management (グループ活動におけるリーダーシップ養成)
- ⑤ 女性と暴力 (DV 関係)
- ⑥ 収入向上

そして、キシュリは、月に 2 回活動していて、このキシュリでは、前回はエイズについて学び、今回は早婚について学んでいる。NGO・PAPRI のコミュニティー・オーガナイザーが先生役になり、早婚について女の子達が議論の様子を見学させてくれた。

バングラデシュでは、男性が 20 歳未満、女性が 18 歳未満で結婚することを早婚と定義されており、早婚の問題点が確認される。

- *母親は血液が不足する（貧血になる）

- *不自由な（障害のある）子どもが生まれる
- *離婚し、その後何回も結婚を繰り返すことになる
- *（女の子の場合）夫や義理のお母さんの気持ちがわからないなどである。

そして、早婚を防ぐ方法として、例えば、ナスマちゃんが結婚させられそうになったら、キシュリの仲間みんなで、ナスマちゃんの親のところに行き、「まだ、結婚させないで下さい。」と、説得をしに行ったりしたことがある、とのことだ。「20歳でおばあさん」という諺（ことわざ）もあり、これは早婚を繰り返すことを戒める意味があるそうだ。

質疑応答の時間になった。

日本側からまずIさんが質問した。

Q：「日本では、法律上、男性18歳、女性16歳で結婚できるが、どう思うか？」

A：「私たち（バングラデシュ）は、教育が遅れているので、2歳ぐらい上の設定の方がいいし、日本の場合は、実際に結婚するのはだいぶ遅いと、聞いている。」

としっかりした答えが返ってきた。

続けて、

Q(日本側)：「(男性から女性への)ナンパはあるのか？」

A(バングラ側)：「ある。が、しかし、もしやったら、

6カ月の禁固刑である。」

刑罰があると聞き、日本側が少しザワザワとする。

Q(日本側)：「結婚相手はどうやってみつけるのか？」

A(バングラ側)：「親の紹介。好きな人(男性)の親に相談。

仲人に相談。親戚に相談。」

Q(日本側)：「嫌いな人と結婚させられそうになったらどうするのか？」

A(バングラ側)：「仲の良い兄弟姉妹や、母親に(内緒で)「嫌だ。」と相談する。」

など、女性の地位が相対的に低いとされるイスラム教国で気になることを質問した。

こんどは、バングラデシュの側から日本の学生への質問である。

Q(バングラ側)：Social Work(社会貢献・社会福祉の



少女グループから鋭い質問が

ようなこと)はやっているか？ 私たちは、トイレのない家の人にトイレを作るように働きかけたり、学校に行けない子どもを学校に戻したりしている。また、教育のない人に、出生届を出すように教えてあげたりしている。

A(日本側)：……………(やっていない)。と答えるしかなかった。

この質問が来たことについては、何人かの学生のレポートでも言及されており、自分たちは経済的に豊かな国に暮らしているが、社会的には成熟していないことを自覚したようであった。

Q(バングラ側)：バングラデシュに来るための旅行費用はどうやって捻出したのか？

A(日本側)：親に全額出してもらった。(約2分の1)自分でアルバイトをして、全額、貯めた。(約4分の1)

親のお金と自分の貯金など半々。(約4分の1)と、正直に答えた。親に全額出してもらったという答えに、キシュリ側は一瞬どよめいた。

私が質問した。Q：「どんな大人になりたいか？」(アラムさんも、これはいい質問だと言ってくれた。)

(キシュリ側)：

*教育に理解のあるお母さん(3人)

*アイデアがあり子どもにきちんと教育を受けさせるお

母さん

*皆と一緒に良い態度ができるお母さん

*理解と気づきのあるお母さん

*子どもの気持ちを理解しながら育てることのできるお母さん

*子どもにやさしくて、いい教育をさせてくれる大人

*子ども達に良いふるまいををする大人

*正直でやる気のある、自分自身が教育のあるお母さん

*ナポレオンの有名な言葉にあるように「教育のある社会をつくる」お母さん

*自分の子どもに一番いい友達として接することのできるお母さん

小さい子は除いて、15～16歳以上の女の子が答えたのだが、教育熱心な母親像が求められていることがわかった。つまり彼女たちは、自分たちが受けているキシュリでの教育が良い教育だと自覚していることがわかる。

(日本側)

D：自立して食べていける人。誰か（不特定多数）のために生きて行ける人。

C：お母さんになったら、自分の子どもと対等になれる人。

G：社会や他者のために貢献できる人になりたい

B：子どもが信頼してくれる親になりたい

K：結婚したいけれども仕事もしたい。子どもに自由を許す親になりたい。

H：これまで結婚しなくてもいいし、子どももいなくていいと思っていたが、最近は子どもが欲しくなった。愛情いっぱい育てたい。バングラデシュが一番理想的に感じられる。この母親の子に生まれて来てよかったと言われるようなお母さんになりたい。

J：最近、家族を持ちたくなった。仕事と家庭を両立させたい。

I：自分が一人っ子なので、子どもがたくさん欲しい。子どもの成長をみて、自分も成長したい。

A：将来は世界の子どもたちのために働く仕事につきたいと思っている。子どもは2人で、幸せになりたい。

F：自分のお母さんのようになりたいので、自分の子どもにもそう考えてほしい。

L：仕事と家庭を両立させ、子どもとたくさんコミュニケーションできる親になりたい。

E：バングラデシュに来て、あらためて教養のあるお母さんになりたいと思った。であった。

総じて、日本側は、働くこと自立することと、親になることを両立させたいという気持ちが前に出ていたようだった。学生ひとり一人の答えは同じではなかったが、

総合して俯瞰してみると、現代日本の若い女性の希望が透けてみえるようであった。私は、仕事か結婚かと問われたら、仕事（自立）を選んだ世代だが、最近は、仕事と結婚を両立させる女性が多くなっていると思われる。とても希望のあることだと感じた。

このキシュリとの交流で、学生は自分たちをとりまく日本の社会というものを意識しただろうし、何より、自分の将来について考えさせられたと思う。

また、キシュリのグループから、何か Social Work に取り組んでいるか、と問われて、全く答えることができなかったことは、とても良い勉強になったのではないだろうか？

Dさんは、「(キシュリが Social Work をやっていることについて) 彼女たちの意識の高さと行動力を思い知らされるとともに、PAPRI が彼女達の持つ行動力を発揮させたのだと感じた。」とレポートに書き、「また、彼女達が母親になった時、子に伝えられる知識は膨大なものになるであろう。少女グループの活動はそのような未来への可能性を秘めた活動であり、PAPRI はこれからの未来を変えていくことも行っていることに気がつかされた。」と続けた。

キシュリの女の子達はともしっかりしていた。生活の中で農村コミュニティと接点を持っているからでもあるし、地域開発の担い手になっているからだと考えられ

る。

一方、日本の、都市部は特にコミュニティが崩壊してしまい、地域の中で考えたり、地域から学んだりすることが本当に少なくなった。教育が、学校教育の中だけで行われるようになって、教育が奥行きのないものになってしまっている。

今回のフィールドワークや、キシュリとの交流で、そのような事まで思い至った学生がいたらうれしいのだが。

7：地元 NGO・PAPRI の活動と、最貧困層・取り残される人々への支援

2月20日(月)、午前は、女性の相互扶助グループ「ショミティ」の活動を見学し、夜は、地元 NGO・PAPRI の代表、バセットさんに、現在、力を入れている6本の農村開発プロジェクトと、NGO が取り組むソフトローンという貸付事業について解説してもらった。(女性ショミティ活動については、学生のレポートを参照されたい。)

バセットさんの話は、とてもわかりやすく穏やかだが、30年近く農村開発を担ってきたという自負もあいまってとても説得力があり、学生にも好評であった。

PAPRI では、人生で大変な思いをしている人、しかし、

それを変えようと思わない人、または、変えようと思ってもそれが自力ではできない人を対象に活動をしている。具体的には、マイクロクレジットを借りられない程貧しい農民(土地なし農民であることが多い)、未亡人(女性なのでイスラム農村では働く場所がない)、塩酸を顔にかけられた女性・塩酸を顔にかけてしまった男性、小学校も耕作地もない中洲(チョール)で暮らす人々、身体障害者などだ。

バセットさんからは、Poorest Poor への支援と何度も表現された。

したがって、マイクロクレジット(小規模無償貸し付け事業)を始めることのできる農民、つまり、自分の力で伸ばすことができる農民を支援の対象にはしていない。

そのかわり、ハンディキャップを負っている人や、自分で自分をマネージメントできない人、最貧困層や、中洲で暮らす人達を対象に活動をしている。その場合、マイクロクレジットではなく、ソフトローンと呼ぶ、きわめて利子の低いローンを組んで、受益者のキャパシティを上げる支援をしているようだ。

ソフトローンの資金は、PAPRI の産みの親である、日本の国際 NGO 「シャプラニール = 市民による海外協力の会」の独自資金から移譲されたお金と、在バングラデシュ日本大使館が裁量権をもつ「草の根無償資金援助」



PAPRI の会議室でブリーフィング

からのお金と、2本立てで行われており、このソフトローン事業は、バングラデシュで最大の NGO である BRAC も、Grameen 銀行も行っていない、PAPRI 独自の事業だということだった。

また、バセットさんは、ソフトローンを「より人間的なローン」という言い方もしていた。つまり、力のある人がより力をつけるためのいわば競争にのっかるためのローンではなく、力のない人に力をつけるローンだからそのように言うのだと、私は理解した。

思春期にある少女グループへの支援も、自分たちの問題は自分たちで解決してほしいと、バセットさんは言っていた。早婚や持参金という悪しき慣習を少女達が自分達でなくすためにも、まず、当事者が自覚しなくてはな

らないということなのだ。

私は質問した。「このような、Poorest Poor への支援のニーズはどうやって把握するのか? 最貧困層は社会の影に隠れているだろうし、悲惨な問題程、隠されやすいはずだ。」。バセットさんは答える。「ニーズは、村人が教えてくれる。我々はそういう信頼関係を築いてきた。やりやすいプロジェクトではなく、必要なプロジェクトをやる。」と。

この点については、Aさんがレポートに取り上げてくれている。

また、このニーズに関して、Iが「今、ニーズがあって、しかし、できていないことは何か?」と、質問した。バセットさんの答えは、「老人のサポートである。昔は農村コミュニティの中でいい意味で乞食をして生きていくことができたが、今は、できない風潮になってきたし、乞食をしに老人が船着き場や長距離バスセンターや都市に出でいかななくてはならないという問題がある。」

いい質問だった。学生の皆が、よく訊いていてくれていることがわかって、私はうれしくなった。

翌日 2月 21日(火)は、言語運動記念日(国の祝日)で、早朝、村の小学生といっしょに記念碑に献花をし、昼前は、村で発掘が行われている、2500 年前の WARI BOTESHUO 遺跡に行った。遅い昼食を摂り、午後は首都ダッカのホテルに戻る。

ベラボー郡アムラボ村から首都ダッカに戻るには、通常なら 2 時間半か 3 時間で帰れるところを、バスのギアの不具合で、5 時間はかかった (小さい事件 2 つめ)。それでも、JABA tour が代車を手配してくれて、何とか、夜 7 時過ぎには、ダッカの高級中華料理店に入ることができた。

そこで、アムラボ村での 2 日間の「ふりかえり」を簡単に行った。

K: 言語運動の記念碑に献花をすることで、村人とふれあうことができた。PAPRI のゲストハウスに来てくれた子ども達とベンガル語でコミュニケーションをとることができ、うれしかった。

B: 体調を崩して少し心細かった。でも、村は癒される。遺跡めぐりでは、もしかしたら年代が 3500 年前の可能性があると聞いて、すごいなと思いました。

G: PAPRI のバセットさんの話は貴重だった。今後も応援していきたい。村の子どもとふれあうことができた。

L: 言語運動の記念碑に献花するまでに、村を一周して歩いた感じ。集落によって雰囲気がちがうので、シヨミティ活動も違いがあるのか気になった。

E: 地域化。村の人とコミュニケーションをとれてうれしかった。みんなで生きて行こうという共生と自立。

地域の人の温かさに触れた。

D: 手を振るだけで通じるものがある一方で、言葉ってコミュニケーションにとって大事だと痛感した。2500 年前に村があったというのは、日本より古く尊敬できる。地元 NGO・PAPRI の話には感動したので、考えを深めていきたい。

C: アムラボ村、日本と違って時間の流れ方がとてもゆっくりしていた。周囲の人がとても優しくかった。

I: 言語運動で亡くなった人に敬意を払うために、とてもおごそかな儀式があり、びっくりした。原爆の記念碑を思い出した。明日のグラミン銀行訪問が楽しみだ。

A: バセットさんの話が印象的だった。PAPRI だからできるソフトローンという支援なのと思った。グラミン銀行のマイクロクレジットと比較したい。

F: 授業の教材でやった牛のエサの山が実際にあって驚いた。(これから行くイスラム教とヒンズー教が) 共存している村の中を調べたくなった。

H: 村の子ども達の笑顔が本当に素敵だった。女性の自立とマイクロクレジットの可能性について考えた。

J: 子どもと散歩をして、本当にやさしいと思った。村の小さい市場に行ってそこの人と話しベンガル語を少し覚えた。

学生は、だいたいバングラデシュに慣れてきた様子が伺える。帰りのバンコクの空港で書いた感想文に、「もっとアムラボ村に居たかった」と多くの学生が書いた。スタディーツアーを企画した私の側からすれば、私自身アムラボ村がすごく好きなのでそう言ってもらえるのはうれしいのだが、ゲストハウスには、シャワーがなくトイレもきれいではないので、2泊は厳しいだろうと思っていたのである。が、そうではなかった。住環境が劣悪でも、人々の優しさに触れて、喜んだり癒されたりする部分があったのだ。しかし、それは、フェリスの学生と実際に来てみないとわからなかった。

さて、「ふりかえり」をしている最中に、PAPRIの産みの親である、日本の国際 NGO「シャプラニール=市民による海外協力の会」の小嶋氏（当時・海外事業担当、現・ダッカ事務所長）が友人としてレストランに来て下さった。12名の学生を見渡し、開口一番「皆さん、お元気そうで、何よりです。安心しました。」と言って下さった。シャプラニールもいろいろなスタディーツアーを受け入れるが、だいたい NGO に興味のある人を前提としたツアーが多いので、今回のように、お嬢様達がどこまでバングラデシュに耐えられるかは、未知数だったので、そのような発言になったと思われる。

Iを筆頭に、学生は小嶋氏に、「どうして NGO の職員になったのか」や、「バングラデシュが一番つらいこ



日本の国際 NGO シャプラニールの小嶋氏と

とは何か」、など、率直にいろいろ質問していた。特に、Aさんは、将来、世界の子ども達のために働きたいそうなので、熱心に聞き入っていた。

ゆっくり食事を摂ったので、ホテルに戻るのが遅くなった。そして、3つめの小さい事件が起こった。夜 11 時過ぎ、ホテルのお湯が出なくなったのである。早い話が、私たち日本から来た女性がホテル中のお湯を使ってしまったのだ。最初ホテルではボイラーの故障かと思ったようであったが、予想以上にお湯が消費されたが故のことだったと最終的にはわかった。時間がたってから、再びお湯は出て、事なきを得た。が、学生からのお湯が出ないという SOS を次々に受けた私はヘトヘトだった。

8：縫製工場と Grameen 銀行 —バングラデシュの近代化とユヌス博士

2月22日（火）午前中は、縫製工場を見学した。写真にあるように、地上 10 階建て以上の超近代的な建物で、床も壁もピカピカだった。40 ラインが稼働し、1日に 8000 人が働いており、8000 人の内 70% が女性とのことだった。

日本でも人気の H&M や GAP のボトムスを作っている工場で、副工場長も GAP の担当者である JILLUR さんも、カッコイイ男性で、2 人とも G パンを履いているのが印象的だった。

工場内の写真撮影は禁止とのことだったが、型紙のデザインから、布の裁断、縫製、クリーニング、検針、箱詰めと一連の工程を全部見せてくれた。

強調されたのは、「コンプライアンス（法令遵守）」だ。労働者の、権利・賃金・健康管理・労働条件が国際基準に合っていないと、世界有数のブランドからの注文を受けることはできない。

パイヤーの心をつかむにはコンプライアンスをしっかりとやることだというのだ。

そのとおり、トイレには石鹸が常備されていたし、防火対策や非常時の避難路の確保もしっかりやっていた。最低賃金は、3000～5000 タカ/月で、保育所も社員



ANANTA 社の近代的なビル

食堂もあった。

授業では、縫製工場働く女の子のドキュメンタリー作品で、労働争議の様子も撮った「Garment Girls – バングラデシュの衣料工場働く若い女工たち」（タンヴィール・モカメル監督）を見ていたが、それとは異なる



ストリートチルドレン

る超モデル的な工場の見学となった。

アムラボ村から帰ってきた私たちとしては、ちょっと面喰った感じだった。しかし、NGOの援助や国際機関に頼らず、自力で世界経済ののっかっていくような近代化を必要とする主張としては、学生の報告を読んでいた

だきたい。

この日は近代化一色で、昼食は、時間がなかったので、ダッカにできたばかりのケンタッキーフライドチキン（KFC）に行くことになった。学生は、KFCで、衛生上の心配がないために何の躊躇もなくコールド・ドリンクが飲めるので、とても喜んでいて。

さて、午後は、待ちに待った Grameen 銀行訪問だ。ユヌス総裁にはお会いできないということだったが、NO2. の Jannat-E.-Quanine 女史が対応してくれる予定で、彼女にお会いすることになった。

ユヌス博士は、欧州から不正経理のことで、責められている最中だった。したがって、Q 女史の話の中でも、Grameen 銀行のスタッフがいったい不正を働いてはいない、という点が強調された。

「まず、経験を共有したい」と、切り出された。

ユヌス博士は、経済学部教授だった 1976 年に、ある村で、アクションリサーチを始めた。それは 1975 年に大きな飢饉があり、その時の人々の空腹のひどさと貧しさにショックをうけて、始めたという。

「なぜ、人はこんなに貧しいのか？」というのが出発点となる問いであったという。普通の人の貧しさにもスポットを当てたが、その中でも、特に、女性は、家庭の仕事をして仕事とは認められない（家事はシャドー・ワークである）ことがわかった。最初は何人かの女性と

始め、1979年に1つのExperimental Projectを立ち上げ、それが1つの銀行として1983年にデビューした。最初は、40人の女性に総額27US\$を貸すことから始めた。現在では、2565の銀行（支店）が、バングラデシュの全土に相当する83000村に広がり、8.6million人がグラミン銀行からお金を借りるまでに広がっている。ベンガル語で村はグラムという。したがって、グラミン銀行は村の銀行という意味になる。グラミン銀行の特徴は、銀行のオーナーは村人である点であり、個人には貸さずにグループに貸す。したがって、もしローンでお金を借りたい人がいたら、グループを通じてボトムアップで経営陣に承認をとることになる。このローンのおかげで、貧しい家の子どもでも、母親に収入があるので、学校に行ったり医者になったりすることができるようになった。新しい世代が育ち、新しい希望が生まれている。そして、グラミン銀行のモデルは、バングラデシュの外にも波及し、今や、南アジア、アフリカ、中東、バーレーン、イタリア、など、経済的に成功した国にも広がり、その数は100カ国を超えた。どの国にもそれなりに問題はあり、貧しさから抜け出すために、グラミン銀行のシステムが役にたっている。

そこで、Hさんから質問があった。「イスラム教の国でも、女性は上の椅子に座れるようになるのでしょうか？」と。とても率直な意見だった。Q女史は、次のよ

うに答えた。

信頼性・正直さ・ハードワークがあれば、女性にも昇進の道は開かれていると。

そして、Q女史は、まず、社員のモチベーションを訓練し、必ず社員はGrameen銀行の支店に寝泊まりし、実地から学ぶようにさせ、村人と苦楽を共にするようなシステムになっていて、Grameen Groupには、汚職も不正も起こるようなシステムにはなっていないことを強調した。

以上で、Q女史の話は終わり、残った広報担当の男性オフィサーが資料をもとに、さらに説明を加えてくれた。ここでは紙面の都合上割愛するが、精緻で巨大なピラミッドのようなシステムで銀行が成り立っているのがよくわかった。また、Grameen Phone（携帯電話事業）やダノンヨーグルトと提携した事業など、Grameen Groupにも言及し、すでに、Grameen銀行はこの国で、貧しい人やその社会のために責任のあるソーシャル・ビジネスになり、公共性を帯びた存在になっていることに私は気がついた。

しかし、質問が飛ぶ。「Grameen銀行は、本当に貧しい人には、お金を貸さないではないですか？」と。

それに対して、オフィサーは、Grameenの基準では、この国の68%～70%の人々を対象にしている。それ以外の人には、他のローン（つまり、乞食用のローン）



Grameen銀行のJ. E. Quanine女史と

もある。利子はなく、返済期限も無期限であり、よりNGO的で福祉的なローンがあるというのだ。また、教育ローンもあり、高学歴教育用で、これを借りるのはメンバーの1%以下だという。これも福祉的なローンといえる、と。

ここで、話は尽きた。後は、ユヌス博士の11階の博物館と1階のノーベル賞受賞をお祝いする展示を見て帰ることになった。しかし11階の展示を見ながら、アラムさんが1つの静かな説明を始めたのだ。

わかり易く言うと、今まで長い間、ユヌス博士は、Grameenの事業はあくまで貧しい人を対象としているが、銀行業務だと言ってきた。しかし、最近になり、これは貧困撲滅による社会変革の1つのモデルだと主張

しだしたのだという。その主張にアラムさんは共感しているが、社会変革と言われて黙っていないのが、バングラデシュの政府であり、弱者から搾取している多国籍企業など、富める北の国々の政治家や経済人達なのであった。そんなこともあり、ユヌス博士は、Grameen 銀行の総裁の椅子から追われることになったのである。

そして、さらに、アラムさんは、その時、言う。「(フェリス女学院大学の学生である) あなた方は、北の国の富める社会から来た方たちです。将来、貧しい人々を助ける側の人になりますか？ それとも、貧しい人をさらに痛めつける側の人になりますか？ 今でなくてもいいので、考えてみてください。」と。

大きな宿題をもらってしまった。アラムさんは人間的にとってもよくできた人だし、本当に優しい。

そのアラムさんが、教育的な意味だと思うが、やわらかく、大きな問いを投げかけてきたのである。

それに対して、学生の皆は沈鬱にしていた。ユヌス博士が、多国籍企業からは敵視されていること、もしかしたら命まで狙われているかもしれないことを聞いて、学生は静かに唸っていた。

さて、午後6時前、時間も押してきていたので、Grameen 銀行本部ビルを辞した。しかし、ビルの1階の出口の脇にある、「Grameen Check」というショップに入ってみることにした。そこは、バングラデシュに

特有の格子柄 (check) の生地で作った服や小物を売るお店だったが、学生の目は、マネキンが着ているサリーの布 (「ジャムダニ織」) に釘づけになってしまった。さらに値段を見て、サロワ・カミューズよりも安いので、買うことになった。一人が買えば、もう一人もという感じで、結局、私は、全員分のサリーを見立てることになった。少し興奮した。30分で12人分のサリーを買い、店を出ると外はとっぷりと暮れかかっていた。

9:「涙のふりかえり」と私たちをとりまく現実

2月22日(火)夜の「ふりかえり」は、移動中のバスの中で行った。前日と前々日はアムラボ村で少女達と交流し、その日は、午前中に近代的な縫製工場に行き、午後は先程まで Grameen 銀行訪問だったのだが、その日の終わり、次の村スリナガルに移動する途中の車中の「ふりかえり」だった。

幹線道路で渋滞に巻き込まれた。外はもう夕闇の迫る時間帯。車は止まっているのも同然のノロノロ運転なので、その車に対して、ストリートチルドレンが水やバナナを売りに、窓ガラスをノックしに来た。学生が戸惑っていたので、私は「カーテンを閉めましょう。」と指示した。ストリートチルドレンから水を買ってやりたいのはやまやまだが、彼らの手は衛生的ではない。そのよう

な水を短期間しか滞在しない旅行者が口にするのは安全ではないので、私はその時、彼らを見捨てるしかなかった。そして、渋滞が解消される見込みがなく、スリナガルの村に到着するのは夜中になりそうだったので、バスの中で「ふりかえり」の時間を持つことした。

アメリカのブランド GAP の服を縫う工場と、地上11階建ての自社ビルをもつ Grameen 銀行とを後にした私たちは、バングラデシュの近代化とその功罪について考えさせられていた。特に、アラムさんが、Grameen 銀行の博物館で、ユヌス博士が、貧しい農民のために小規模無償貸し付け (マイクロクレジット) を初め、それを成功させ、ノーベル平和賞も受賞し、その事業で世界を変えると言い、その結果、こんどはバングラデシュ政府から疎まれる存在となってしまっていたことを強調していたからでもあるが、学生は、国家が発展することに伴う軋みを感じていた。

そして、さらにアラムさんが言った。「皆さんは、どちら側の世界に身をおきますか？ 貧しい農民の側に居て、搾取されながらも努力して這い上がりますか？ それとも、搾取する側に居て貧しい人たちのことを考えてくださいますか。どちら側でも結構です。」と。そう言われて、学生達は皆、考え込んでしまったのである。

そこで「ふりかえり」が言葉にならなかった学生が3名いた。Dさん、Aさん、Eさんだ。Dさんはバスの

カーテンに隠れて号泣していた。Eさんは涙ぐみながら、ストリートチルドレンからなぜ品物を買えないのか、私に詰問してきた。私は衛生面のことを答えたが、水のボトルをアルコールティッシュで十二分に拭けばなんとかいけるかもしれないわけだから、本当のところそれは答えにはなっていなかった。ストリートチルドレンを保護するNGOを訪問した一方で、誰にも保護されていない、必死で稼ごうとしているストリートチルドレンを、私は見捨てたのであるから。

日誌によると、Iさんも悲しくて泣いたらしい。「たった数円の物を買ってくれと、バスの窓を叩いて必死に訴える少年がいた。私たちはカーテンを閉めて拒むことしかできなかつた。」とある。

Dさんは、号泣していた理由を後から話してくれた。搾取する側に居る自分に腹が立ったのだという。それについて、後で、「改めて考えた」のだという。

おおいに自分に腹を立て、そして考えるといい。他国に身を置くと、自分を外側からよくよく見ることになる。存在が逆照射されるのだ。

これがスタディーツアーの学びとしてのいい点である。泣いてしまった学生のことを、泣いていない学生がいさめているシーンもあった。言葉にならない思いを、泣きじゃくりながら訴えてくる学生の声を、みんなで静かに待っていた時間でもあった。

フェリスの学生は派手だと一般には思われている。しかし、そこに居たのは、とても純粋な乙女たちであった。多感な年代でもある。19～20歳の時の私なら正義感が強いので、自分からバスの窓をあけ、ストリートチルドレンから品物を買っていただろうが。

残念ながらこの時の「ふりかえり」の記録は無い。しかし、12人プラス私とアロムさんと、問い問われながら、本当にいい時だったと今でも記憶に残っている。きっと、学生にとってもいい時間だったはずだ。(次回のツアーの時はレコーダーを持っていくべきだと、反省した。)

ひとしきり「ふりかえり」を行った後は、室内は静かになった。思い思いに余韻にひたり、また、心にもやもやが残った学生もいただろう。ロホジョング郡スリナガルの村まで、長い旅になった。

10：スリナガル村と、SHIZUE・モデル・ジュニアハイスクール、ジョソールへの道

スリナガル村のミトウさんの伝統的な木造の2階家に着いたのは、夜11時ぐらいであつたらうか？

ガンジス川のほとりにある村なので魚が豊富ということで、シラスのような小魚のカレーと、イリシュマースという国魚のカレーをいただいた。



左が国魚イリシュマースの切り身

本当ならご家族の方と交流したかったが、着いたのがあまりに遅かった。1階に1年生、2階に2年生と、分かれて眠ることになった。布団はこのツアーのために新調された特製のものであった。ただ、2年生3人が深夜2時ぐらいまで、この家の同年代の女の子と一緒に外で星を見ていたらしい。また、1階に寝た1年生のFさんの掛け布団が誰かにひっぱられて無くなり、寒い思いをしたそうだ。

2月23日(水)、朝は6時過ぎに起きて、ガンジス川に架かる予定のマワ橋の近くの魚市場に行った。ここでは、イリシュマースからマナズの仲間、鯉の仲間まで、たくさん新鮮な魚が売られていた。海老が少ないのは季節的なものだったのかもしれない。市場に居る人、売



紅茶屋さんで御馳走になる

り手も買い手も99%は男性である。そこへ、若い外国人の女性が12名も現れたので、周囲は少しざわついた。仕方がないので、屋台の紅茶屋さんに寄ったところ、御馳走してもらった。外国人が飲みに来てくれて、名誉なことだというのがその理由だ。

ミトウさんの家に戻り、朝食をいただき、私立のSHIUZE・モデル・ジュニアハイスクールを訪問した。まず、校長先生からこの学校についてブリーフィングをしていただく。

この学校の設立者は、実は、アラムさんなのである。アラムさんが日本から帰国した当時、この地域に良い学校がなかったので、アラムさんが地域の知識人に相談して、1994年に設立することになった。アラムさんが持



SHIZUE 小学校の校長室で

ち帰った240万円を元手に、まず沼地だったところに盛り土をして、80人の生徒と8人の先生から始めたそう。それから学校は大きくなり、地域でNO1.の人気を誇る学校となった。この学校の良さを示す出来事が2つあるそう。

1つ目は、2009年、政府の奨学金のテストに応募したところ、この市からは30人の生徒が奨学金をもらえるが、30人のうち8人をこの学校の生徒が占めてしまったそう。2010年は、9人の生徒が奨学金をもらえた。2つ目は、小学校卒業の統一試験での成績だ。2009年は、この試験に25人が参加したが、全員A+の成績をもらえた。2010年は、A+が36人、Aが1人の成績で、Cや落第はいなかったそう。



SIZUE 小学校の低学年生

奨学金をもらえる優秀な生徒を9人も輩出したので、ムンシゴンジ県の県会議員さんや、ロホジョング郡の郡長さんに認められる結果となった。

現在の生徒数は500人以上、先生は25人になった。生徒500人の中に、25人だけだが、授業料(月300タカ)を免除される生徒を受け入れており、今後もその割合を増やしていきたいそう。開講している教科は、算数・英語・国語・宗教で、体育や美術・音楽は授業の一部に入れているそう。

今後は、体育を充実させたいので、日本から良い教材を送ってほしいと学生に要請があった。

良い学校にする秘訣は、

①各教科をできるようにする。毎日何かをさせたり、宿



SHIZUE 小学校の生徒

- 題を出したりする。
- ②賞を与える。皆勤賞でもいいし、クラスの1位、2位、3位、には賞品を出す。
 - ③1つの単元が終わると試験をする。1～2週間おきにテストがあることになる。
 - ④2か月ごとに試験があり、この結果は学年末の試験に加味される。
 - ⑤時々アラムさんが学校に来て、アドバイスをしていく。
 - ⑥ゲストスピーカーを呼んでいい影響を得る。これは、私立学校を対象にした、研修らしい研修はまだないために、そうしている。
 - ⑦新人の先生は、ベテランの先生の授業を見学して、実践的に教授法について勉強する。



大縄跳びに挑戦する生徒

などである。

学生の皆は、少し圧倒された様子であった。私は、昨夜寒くて眠れなかったため、気分が悪くなったFさんが休んでいる部屋に行ったり来たりしていたので、落ち着いて話を聞くことができなかったが。

低学年の授業を見学する。学生の皆は、きちんと制服を着ているこの学校の生徒たちと、バングラデシュに来た翌日に会ったストリートチルドレンとの違いに、ちょっと戸惑っている様子であった。ちょうど授業が終わったのか、生徒が教室から出てきた。学生がカメラで撮影したりしていると、縄跳びを持っている子が居り、Hさんが、縄跳びの二重跳びを披露し始めた。そうすると多くの生徒が集まって来たので、2本の縄を結んで、



5年生の英語のクラスで

即席で、学生が大縄跳びを演示した。そうすると、こんどは、生徒の中で勇気のある男の子が、大縄跳びに挑戦してきて、上手く跳ぶことができた。その後も何人かの生徒が挑戦したが、リズムが合わなくて跳べない生徒も居た。時間になったので、縄跳びは止め、2つのグループに分かれて、5年生2クラスの英語の授業を見学することになった。

日本の小学校の英語より内容は高度であった。ちょうど、時計の時間を読む練習をしていた。授業の最後の20分は、私たち日本人に開放され、片言の英語で、自己紹介をしたり、日本を紹介する品物を示して日本を紹介したり、最後は、折り紙大会となった。

昼近くになったので、学校を辞し、ガンジス河のほと



クルーズ船の上で昼食

りで待ってる伝統的な帆船「PANSI NAO号」に乗り込み、北西へ遡上した。昼食は、船の上でいただき、ちょっとしたリゾート気分を味わった。

船の上からは、岸に立つ煉瓦工場が見えたり、中洲で稲作をする人々をみかけたり、小舟で漁をする男達を見ることができた。

ガンジス河の対岸に着くと、なぜか、国营テレビの取材班が乗り込んで来て、下船しないまま、私はインタビューを受けた。取材のポイントは、外国人からみた Bangladesh の発展がどうかという内容であった。国際クリケットの試合を開催する程、国際社会の仲間入りしてお目出度いということを書いてほしそだったの、そのように英語で答えた。また、学生が並んで、片



ルベルさんもイケメンの1人

言のベンガル語で Bangladesh 万歳というような言葉を言っている様子も撮影された。放映されたかどうかかわからないが、1つの事件だった。つまり、国としては、その発展を祝っている時期だったと言ってよかった。

さて、ここから、ジョソール県のサティアントラ村までの長いバスの旅が続く。昨日よりバスは、大型1台ではなく、2台のマイクロバスに分乗する形になっていた。サティアントラ村に、大型バスが入らない為である。行きは、1台はアラムさんと2年生が先導し、もう1台は東ルベルが1年生と一緒にしたが、車中で、なぜか私は、ルベルに英語でヒアリングをするはめになった。

テーマは、 Bangladesh の若者男女事情である。アラムさんに日本語で質問すればいいのに、学生たちはど



人気があった小学校の先生

うも聞けないらしい。帰りも、2年生と東ルベルが一緒だったが、なんと、ここでも、イスラム教の国における男女関係が質問された。つまり、レポートには書かれていないが、学生の興味関心は、男女問題にもあったのである。そう言えば、初日や2日目に、車ですれ違う群衆の中で、誰がカッコイイかその基準を学生達は議論していた。それから、アムラボ村を散策する時、英語が多少話せる小学校の若い男の先生にも付き添ってもらっていたのだが、彼もカッコイイと話題になっていた。

後から、彼が妻帯者で子どももいると聞いて、がっかりしていた学生もいた。

まず、1年生のIさんとDさんの興味は、イスラム教では、肌の露出はどこまで許されるのか、とか、お見

合いで本当に好きになれるのであるかなどであった。ルベルは、本来はタブーとされている問題に、一生懸命答えた。おもしろかったのは、どんなに美人であっても人前で肌の露出が多い女性は受け入れることはできないということだった。また、印象的だったのは、どんなに好きな女性が居ても、男性側である自分の母親が認めなければ結婚できないということであった。

帰りの車中、2年生のHさんとJさんの関心は、男子学生に好きな女性ができないのかどうかであった。M君の場合、学生だった2年前まで好きな女性がいたそうだが、今はいないということだった。彼女が別の男性を好きになり別れたそうだ。お見合結婚が慣習というタテマエだが、大学生の間では恋愛も成り立つようだ。しかし、先にも書いたように、結婚となると別で、親の承認が絶対に必要となるとのこと。そして、話は際どい所に入っていく。つまり、婚前交渉の有無だ。結論は「なし」である。しかし、最近、高学歴の女性で結婚前に男性に身をまかせ事例があり、そんなことがあるとは信じられないし、イスラム教ではあってはならない悩ましい事態だとルベルは頭を抱えた。

さらに話は進む。売春街の有無である。ルベルの英語の辞書にはプロスティチュートという単語はなかった。かみくだいて具体的に聞くと「そういう事はこの国にはない。」と答える。そして、先生を交えてこんな話は普



農村に沈む美しい夕日

通できないと、最後には本当に頭を抱えてしまった。しかし、この通訳をしたことで、私も1つのベンガル語「タンダ」(クールガイの意味?)を覚えることができた。私の辞書にはなかった単語だ。

さて、小さい事件がもう1つあった。夕日が美しかったので、その写真を撮ろうと、街道で一時停車した時の事だ。東に続いて下車したDさんが、道路を渡ろうとして車に轢かれそうになったのである。一瞬の出来事だった。それを後ろから直視したルベルは本当に真っ青になっていたが、Dさんが前後の車列の確認を怠ったのだ。あと10cmで危ういところだった。アラムさんは、東の神様が守って下さったのだと言った。神様にお礼を言うようにとも、たしなめて来た。このあたりは、アッ

ラーの神と言ってこないところがおもしろい。しかし、アラムさん自身、イスラムの神を本当に強く信じているし、私に信心の心得があることも知ったうえで、語気も荒く言って来た。もし、誰かが傷つくようなことがあれば、このツアーは中止になる、とアラムさんは強く繰り返した。私は、もしそんなことがあればこの講座が無くなるだけでは済まないことは十分に承知している、と返した。が、アラムさんは、2人でこのツアーをやっているのだからお互いもっと注意しようと、再度確認してきた。

天の神様に感謝。

夜遅くに、ジョソール県に到着した。しかし、闇夜である。サティアントラ村まで道案内できる人を捜して来て、狭い車の助手席に無理やり乗せて、TUHINさんの家に、ようやくたどり着いた。

TUHINさんの家の姪子のTHITIとは、半年振りの再会であった。しかし、停電していたことと、あまりにも夜遅く着いたので、THITIとは抱き合う感じではなかった。でも、こんどは、12人もの女子学生を伴って来たので、You are great personと言って来た。

11: ジョソール県のサティアントラ村で —「共生」と「スローライフ」

TUHINさんは拡大家族だ。



TUHIN さん一家

おばあさん (SAKINA BEGUM) を要に 3 組の夫婦が一緒に暮らしているが、長男であった THITI の父親は昔事故で死んでしまっていた。だから、長男の嫁、つまり THITI の母親に、二男夫婦に、三男夫婦という大人が居て、それぞれ、2 人ずつ子どもがいる格好になる。

THITI は 19 歳。その妹 ONIKU は 14 歳。二男の長男 SHONAN は 19 歳、長女 SHINPA17 歳。そして、三男 TUHIN さんの、長女 ARIN は 9 歳、次女 ATHISA は 4 歳である。

なぜ、三男の TUHIN さんの名前がこの拡大家族の冠名になっているのかはわからないが、彼は貿易商を営んでいるとのことだ。夫を亡くした兄嫁と、父親をなくした THITI と ONIKU のめんどうもみている。



夜中に着いて、夕食をいただく

TUHIN さん一家は、彼のお父さんの時代に、バングラデシュの独立前の 1966 年からこの地に住み、TUHIN さんのお父さんは、独立戦争の戦士だったそうだ。この戦士だった TUHIN さんのお父さんと、アロムさんのお父さんが大昔に知り合いだったらしい。そのご縁で、私たちはジョソールまで足を伸ばしてきてくれたわけだ。

ジョソール県はインドとの国境も近く陸路での交易が盛んな場所の 1 つである。そして、サティアントラ村のおもしろいところは、イスラム教の家とヒンズー教の家とが、村の中で混在している点にある。そして、イスラム教の家は、1200 年前と同じ暮らし方をしているそうだ。その美しい土の家は、明日、訪ねることになる。



イスラム教の村で、ヒンドゥー教の豚飼いに会う

到着して、まず 12 人と私が泊まる部屋をつくるのが、大仕事だった。背の低い 3 人に SHINPA の部屋のキングサイズのベッドに寝てもらい、体調の悪い F さんと私は、SHOHAN の部屋に、そして、残りの 8 人は空き部屋になっていた角の大きな部屋に、JABA tour がダッカで新調してきた布団を床に敷き詰めて寝てもらった。雑魚寝だ。お嬢様たちには申し訳ないが、地方都市ジョソールの安宿よりは、きれいで安全である。そして、THITI も SHOHAN も同年代だし、何より、家族みんなと交流ができる。

寝る場所を確保したところで、遅い夕飯になった。中庭に面したベランダで、1 列になりながら、チキンカレーをいただく。学生皆は疲れているはずなのに、良く食べ

た。いい傾向である。

翌日は、メモ帳とカメラだけもって、村のフィールドワークを行った。TUHIN さんに、THITI や SHOHAN、SHINPA も一緒に来てくれた。びっくりしたのは、村の中を歩いていると、豚の群れを追う男性に出会ったことだ。

イスラム教では豚は食べないので、彼はヒンドゥー教だ。これまで、私は、カンボジア、タイ、ラオス、ベトナムに行ったが、どの村でも豚をみかけるのが普通だったので、バングラデシュに来るようになってからは農村風景から豚が消えてしまって、なんだか物足りない思いをしてきたので、12年ぶりに村で豚を見て、少し狂喜してしまった。彼は、近くに住んで、豚を商っているという。学生は敏感で、普段どちらかといえばおしゃべりではな



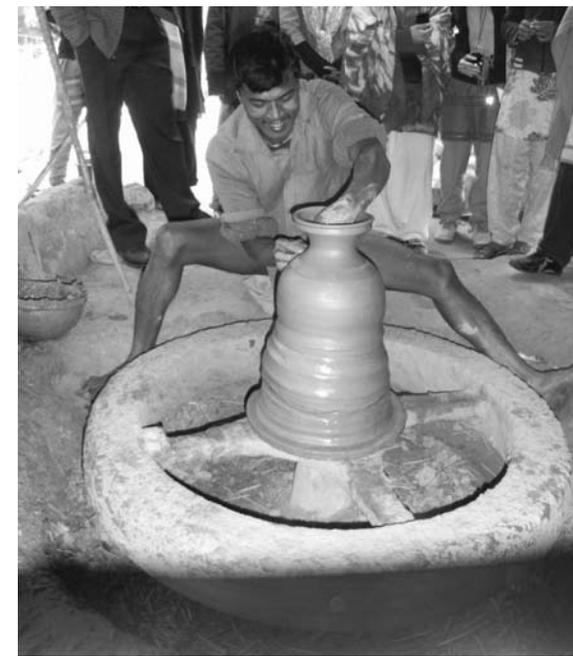
フィールドワーク：SHOHAN と歓談する C さん



かまどの灰が鍋洗いに役立つ

い静かな私が、狂喜したので、察知した。イスラム教徒が90%以上を占めるこの国にあっては、豚はめずらしいのだということ。

それから、中庭と土の家が美しいイスラム教の集落に入った。そこでは、生活上のいろいろな工夫がされていることが、アラムさんから説明され、住人である各家の主婦からも話を聞くことができた。



ロクロを回すヒンドゥー教徒の男性

特に、牛は、フンが燃料や虫よけ剤、土壁の補修にも使えること、牛は毎日のミルクを提供してくれるばかりではなく、耕運機やトラクターにも変身すること、といったように、牛をめぐる1つの利用のサイクルができていたことがわかった。カマドの灰についても、歯磨きや鍋洗いに使えることを、村の女性が演示してくれた。

具体的な様子については、2月24日（木）の報告や、



静寂が美しい早朝の池

村についての学生レポートを参照されたい。
さらに、少し歩くと、土の素焼の壺を作って生業として
いる、ヒンドゥー教の家を訪ねた。

そこには、ものすごく高齢のお爺さんが住んでいた。
独立戦争の時に40歳台だったというから、今は80歳
をゆうに超えている。素焼の壺は大小あり、米や豆類、
野菜の種を保存するためのものだ。仕事は引退してし
まったが、村の長老として生き抜いている様子が伝わっ
てきた。長生きの秘訣はなんですか、と聞くと、仕事を
すること、家族を愛すること、飽食しないことだという
知恵が返ってきた。

村を一巡してから、池のほとりに行き、そこで屋外に設
えた机を囲んで、模造紙とポストイットを使って、村の良



フィールドワークのまとめをする

い点と、午後にもっと煮詰めたいテーマがあれば絞り込
んでフィールドワークをする予定で、知見を整理した。

学生の皆は、イスラム教の村の生活の知恵や、ヒン
ドゥー教の家がイスラム教の家のすぐ隣に建っているこ
とに、にびっくりしたようであったが、小学生と交流し
たいという希望もでた。(が、今日の午後からと明日は
バングラデシュの休日の金曜日なので、公立小学校は休
みであり、取材はできなかった。)

おもしろかったのは、村をざっと見て回っただけで、
ポストイットに「スローライフ」と「共生」というキー
ワードが出てきたことだった。

村の暮らしの知恵だけではなく、村のたたずまいとそれ
を支える哲学を、学生の皆は感じてくれたようであった。

特に、Eさんは、この村でのフィールドワークをもと
に「共生」というテーマでレポートを書いてきた。「私
は今回のスタディーツアーで、バングラデシュの人々は
共に支え合い、協力しあって生きていることを学んだ。
先進国で育った私にとって今まで感じたことのない人々
の暖かさが嬉しくもあり、また、不思議な感覚のもの
もあった。現地の方々が私に見せてくれた屈託のない笑
顔はどこからくるのであろうか。また、本当の豊かさ
とは何であるかを考察したい。」と「はじめに」に、書い
たのである。

「本当の豊かさとは何であるか？」とある。

このフレーズが出てきたことに、私はとても感慨深い
ものを感じた。なぜなら、これこそが、この「アジア
との出会いと異文化体験ーバングラデシュの生活文化
とフィールドワーク I」という授業で狙っていた大きな
テーマだったからだ。

バングラデシュは、確かに貧しい国だ。それは、
GNP や GDP という指標や、識字率、平均余命、安全
な水にアクセスできる人口比率などをメルクマールとす
れば、南アジアの中でも最貧国となる。

しかし、人々、特に安定的に農業ができる地域では、
人々の自己肯定感が高いと思われる。

UNDP かどこかの調査にあったのだが、「自分は幸せで
すか？」という質問に対して、バングラデシュは「YES」

と答えた人数が多い国の1つになっているということなのである。

反対に、日本は近代文明的・物質経済的には発展してきた国だが、人々の自己肯定感は高くないといってよい。最近は特に、自殺やうつ病、ひきこもり、子どもの貧困の問題も抱えている。

それに対して、バングラデシュのジョソールの村はなんとこのびやかであったことか。

バングラデシュの北には、ブータンという国がある。観光立国をめざしているが、国の発展の方針は、GDPやGNPを上げるのではなく、国民総幸福度（Gross National Happiness = GNH）を上げることである。バングラデシュは、ブータンを見習ったらどうかというのが、私の個人的意見である。

Moving Countryとして、今まさにソーシャル・ビジネスの花が大きく咲こうとしているが、農村部のことを考えると、国としての経済的発展は、国内においてはさらなる経済格差の拡大を助長することになるので、それでは、貧困の問題は解決しないと考えるからだ。貧しい人、底辺にある人は救われなくてはならないが、富める層だけが一層富めるようになることには、懐疑的でありたい。

Kさんは、「初めて会う日本人の私たちを、娘や姉妹と呼んで家族のように可愛がってくれた村の人々の優し



ジャムダニ織のサリーを着て

さを一生忘れないだろう。時計を気にせず、時間がゆっくりと流れている村の生活がとても気に入った。日本の生活に比べたらずっと不便なことばかりだけど、この村に住みたいと思うことができたのは、人々の温かさや穏やかさやゆとりのおかげだと感じた。」とレポートの最後にまとめてくれている。

この村に住みたい、と言った学生はKさんだけではなく、トイレとシャワーの設備さえ整えてくれれば、お嫁に來たいと何度も訴えていたのはCさんだ。また、何人もの学生が、民族衣装のサリーを着て、村の木曜市場（バザール）に繰り出した時、とてもゆったりと誇らしげに歩いていた様は、私にも忘れられない。単に美しい衣装をまとっただけではなく、その土地の人間に



TUHIN さん一家とお別れ

なった心持ちだったにちがいない。

TUHIN さんの家族と別れる時、学生皆は泣いていた。たった2泊3日だったのに、本当にお世話になった。毎日おいしい食事を出して下さり、サリーを着つける時は、TUHIN 家の主婦が総出てあったし、THITI は素早く学生の手へハナ染めで模様を描いてくれていた。2日目の夜は、（喉の風邪をひいた私は先に就寝したが）、雑魚寝の部屋で、THITI も SHINPA も学生と一緒に寝たようだった。それほど、仲良くなっていたのだ。ダッカに戻ってきた翌日、2月26日（土）の午前中は、ホテルの7階のフロアで、まとめのワークショップを行った。

皆と共有し確認したい事項と、帰国してから書く各自



フィールドの情報をシェアする

のレポートのテーマ出しをしたのであった。テーマ別に、班は、「子ども」と「村の暮らし」の2つに分かれた。私としては、「女性」をテーマにするグループが1つできるかと思ったのに、意外であった。「村の暮らし」を振り返る班は、とても和やかに、情報や意見交換をしていたのを、私はよく覚えている。

そして、何人かの学生も個人レポートで言及しているが、とうとう、お金の価値について質問してきた。

今回は短期滞在であるし、学生は値札のついた高級店でしか買い物をしていないので、事前に、現地通貨タカについてはレクチャーをしなかった。ただ、200ドル～300ドルのお小遣いを持って来るように指示していただけだった。そのお小遣いの価値について聞いてき

た。私は答えた。日本とバングラデシュの物価は10倍～20倍違うと。屋台の紅茶が5タカと安くても、それは、日本円に換算すると約18円。

物価を10倍とすると、18円は180円の価値に相当する。つまり屋台で180円の紅茶を飲んだのである。そう考えると、300ドルは、レートを1ドル85円として、約25万円相当分のお小遣いを持って来たことになる。贅沢にいろいろ買うことができたわけである。しかも、300ドルは、バングラデシュの平均年収600ドル～800ドルの半分に相当する。それを聞いて、皆はびっくりしていた。

Dさんなどは、自分が持ってきた高額のおこずかいに対して、それは誇れることなく、逆に恥ずかしいとも感じたようであった。ぜひ、その感覚を忘れないでほしい。

12: スタディーツアー

—イスラムの元気な女性に出会ったこと

バングラデシュの女性をテーマに書いた学生のレポートにもあるように、ほとんどの学生は、イスラム教では、女性は家の外に出られないから窮屈な思いをしているに違いないと、あるバイアスをもってこのスタディーツアーに参加してきた。しかし、実際は違ったのである。

ダッカの図書祭りでは、若い女の子も年取った女性も、実に多くの女性達が訪れていた様子に触れたし、地元NGOでストリートチルドレンのためにバリバリ働く女性、Faridaさんにも出会った。PAPRIの女性スタッフも、ショミティやキシユリの運営を自信を持って行っていた。そして、Grameen銀行のJ. E. Quanine女史は、まったくもって迫力のあるキャリアウーマンだった。そして、何より、TUHINさんの家のおばさんS.Begumさんは、ユーモアとある種の威厳があった。

今回のスタディーツアーはかなり駆け足だったが、どんな女性に出会ったのか、この報告書を読みなおし、参加学生の皆さんも、イスラムの元気な女性から生きるパワーをもらってほしいと思う。そう、それはイスラム教だからではない。生活に裏打ちされた実人生を生き抜いている女性だから美しいのだ。それも感じとっていただければ、私はうれしい。

スタディーツアーの醍醐味はそんなところにある、と私は思っている。

また、古い分け方だが、学問には、実験科学・書齋科学・野外科学があり、生態人類学は野外科学に属する。フィールドで仮説をたて、その仮説をフィールドから得られるデータで検証していく学問の1つだ。

今回の旅であれば、「バングラデシュは本当に貧しいのか？」という仮説をたてることができるだろう。

それに答えをだすには、まだまだ、早い、仮説を立てる段階では、ふと、フィールドで自分が感じた違和感やもやもやを大事にしてほしいとも思う。

水を買ってほしいとバスの窓をたたいたストリートチルドレンに、私たちはどう接してしまったのか？ また、地元NGO・PAPRIのバセットさんは、いったいどうやって、村人と信頼関係をむすび、やりやすいプロジェクトではなく、必要なプロジェクトこそをやることのできるのか？

どうみても1日2ドル以下で暮らしていると思われるサティアン村は、どうしてあんなに穏やかで平和な雰囲気包まれていたのか？

参加学生のレポートの1つ1つが、学びの大事な入口になっているように思う。もっと知見を深めたい、もっと勉強したい、と書いてくれた学生もいた。5年後10年後も、この体験を忘れないようにしたいと、大事な心情を吐露してくれた学生もいた。私にも、勉強になった。

アラムさんから伝言がある。「フェリス女学院大学の皆さんは、とても良い学生でした。感性が豊かで優しくて。最初はお金持ちのお嬢様だということで、人情の機微や人々の小さい悲しみはわからないだろうと考えていましたが、本当に繊細な気持ちをもって来て、わかりあえた気がします。大変楽しい10日間でした。このような新しい世代と世代とが、バングラデシュと日本とで

つながっていい関係をぜひ築いて行ってほしいと思います。」

さて、最後に、今回のスタディーツアーでは、本当にいろいろな方にお世話になった。お礼を述べたいが、残念ながら紙面に限りがある。

また、梅本直人先生と海外交流課には、私が初めてフェリス女学院大学でスタディーツアーを実施するにあたり、何から何まで、本当にお世話になった。

ここに簡単ながら、お礼を述べる次第である。

そして、このツアーを見守って下さったすべての方々に感謝します。ありがとうございました。

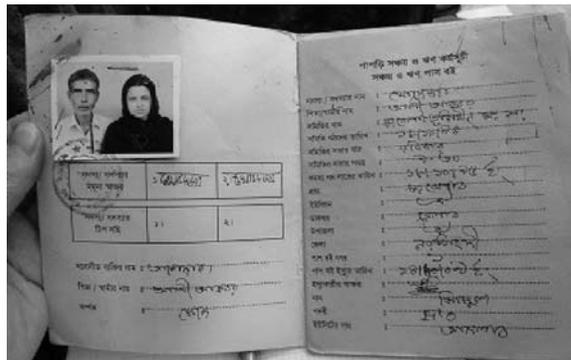
追記：3月11日に東日本震災に伴う福島原発震災がありその情報収集に追われた3カ月であった。また、私が勤めるもう1つの大学の仕事も忙しく、報告書の発行が遅れた。ここにお詫びしたい。最後に、一緒に苦楽をともにした皆さん、写真を提供してくれた学生にもお礼を言いたい。みなさん、ありがとう。

পাথী 私と Bangladesh

薬師寺理子

ひしめき合うように建てられたビル、目がチカチカするほどの広告看板、片手に携帯電話を持ち道を行き交う人々。このような街中の風景を見ても分かるように Bangladesh は確かに発展していた。しかし、この発展の影には様々な努力があると私は考えている。私は PAPRI という NGO の活動を通してそのことを痛感した。

私はまず、PAPRI が支援する「チョール・ベラボー・モヒラ・ショミティ」という女性のマイクロクレジットグループを見学した。マイクロクレジットとは、信用力がなく、銀行からお金を借りる事ができない途上国の貧困層に無担保で融資するという制度である。グラミン銀行のムハマド・ユヌス氏が生み出した融資制度であるが、PAPRI のマイクロクレジットはソフトローンというもので、より安い利子で貸し出している。



左の写真が、通帳である。この通帳はショミティの参加者全員が持っている。また、女性しか借りる事ができないため、家庭での女性の地位が向上し、また二人で相談する事で絆が生まれるという。夫と一緒に写っている写真を貼っているのは、彼もまたお金を使うから責任者であるということの意味しているという。

私がこのマイクロクレジットグループを見学して感じたことは、借りる額がとても大きいという事である。ある人は、田んぼを広げるために土地を買う目的で借りたという。このことから、このマイクロクレジットがどれほど経済的自立を促したかということが分かった。また、ある人は子どもの教育費にあてると述べていた。ショミティでは、マイクロクレジットの活動以外にも、衛生教育や、教育の重要性などを伝えることもしている。私は、子どもの教育費のために借金をするという事を知り、ショミティの活動の成果と重要性を改めて感じる事ができた。

次に PAPRI の支援するアムラボ村の少女グループとの交流する事ができた。少女グループは家の中庭のようなところにシートを引いて、ミーティングを行っていた。このようなミーティングは月に2回ほど行うようで、PAPRI から派遣された女性の先生がテーマを出して話し合う。前回のテーマはエイズであつたらしく、エイズに関する基礎知識のおさらいをしていた。また、今回の



テーマは早婚についてであり、早婚とはどういうことか、結婚とは何かなど話し合っていた。彼女達は大変知識が豊富で、全員が意見を出しあっていた。

私達は、彼女達にいくつか質問する事ができたが、そのうえで気づいた事がいくつかある。まず、私達は、彼女たちが少女グループの活動についてどう思っているか聞く事ができた。彼女達は、勉強ができる、権利について学べる、一人で外に出る自信がついたなどと述べていた。次に、親はこのような活動についてどのように思っているか聞いてみると、最初は反対していたが、今では積極的に賛成していると述べていた。

自分の身を守るための知識を学ぶ事ができるこの活動が、彼女達にとって大変意味のある事であり、子から親に知識を伝える事によって様々な問題を解決する事がで

YAKUSHIJI RIKO

きるということを意味していると思う。

そして、彼女達はトイレのない人の為に作ってあげたり、教育のない人に出生届についておしえてあげるなど、知識を得るのみならず社会貢献も行っているという。彼女達の意識の高さと行動力を思い知らされるとともに、PAPRI が彼女達の持つ行動力を発揮させたのだと感じた。

また、彼女達が母親になった時、子に伝えられる知識は膨大なものになるであろう。少女グループの活動はそのような未来への可能性を秘めた活動であり、PAPRI はこれからの未来を変えていくことも行っているということに気づかされた。

そして、彼女達は私達にも質問し返してきた。まず、社会貢献活動をしているかと聞いてきた。私達は大変答えに困った。自分の生活を見直してみれば、人のために何かしたいと思いつつも、周りに困っている人がいても助けていなかったように思える。

また、どんな大人になりたいかと聞かれたときに、私は、仕事をしたい。人の役に立って人生を全うしたいと答えた。今まで私はその考えは別に悪くないと思っていた。誰にも迷惑をかけないからと。しかし、彼女達の子どもに知識を伝える事のできる母親になりたいという夢を聞いて、考え方が変わった。自分の子どもに何かを伝えるという事は自分に与えられた一つの使命なのかもしれ

れないと。また、日本の女性は仕事か結婚かどちらかを迫られるという現実を改めて確認する事となった。

PAPRI は 1999 年に結成されたが、日本の NGO シャプラニールが支援してきた団体が独立したものである。シャプラニールは、ストリートチルドレンや出稼ぎに行く子どもたち、寡婦や老人、障害者など社会的・経済的に「取り残された人々」の支援活動をおこなっている。その活動は何かをしてあげる援助というものではなく、自立の手助けをするという共生を基本としている。海外協力はこの共生を基本にしなければならないのではないかと思う。

私はジョソールのサティアントラ村を訪れた時、様々な事を学ぶ事ができた。牛を育てると肥料になる。その肥料で作られた野菜を私達は食べる。また、牛の糞は乾かすと燃料になる。灰は歯磨きになり、洗剤にもなる。着ていた物は全てまたリサイクルする。人間が本来営むべきであろう循環された生活がそこにはあった。また、宗教が違うが、お互いを尊重しあって生き、地域のつながりを大切に生きていく人々がいた。このように豊かな自然と知恵のある人々から学ぶことはたくさんあり、またそこに先進国のやり方を押し付け、開発を突き進める事は間違っているのではないかと思う。

私はバングラデシュの人々とたくさん握手をした。みんな喜んで握手をしてくれた。だけれど、私はその手を



ウェットティッシュで拭かなければならなかった。衛生上仕方ない事だと分かっていたものの、いつも胸が痛んだ。また、ダッカの街を歩いている時一人のストリートチルドレンに出会った。彼は足を怪我していた。病院に行くために 100 タカ（日本円で 100 円位）を渡した。100 タカは彼にとって何日か働かないと得られないお金。私は、100 円稼ぐのにどれくらい努力するだろう。多分努力もせずに親に頼むだろう。スーパーマーケットで 800 タカの買い物をした。2 袋分の大量の紅茶とお菓子が買った。外に出るとストリートチルドレンが近づいてきて手を差し出した。「何もないよ。」とは言えなかった。現にたくさん買うお金を持っているから。私はバングラデシュで 300 ドル使ったが、バングラデシュの平均年収は 600 ドル～ 800 ドルだという。私はそのことが決し

て誇らしいことだとは思わない。自分の生活は弱者を押し付けて成り立っているものだと感じたからである。

ムハマド・ユヌス氏は、経済学が貧しい人の役に立つ学問にしたいと望み、マイクロクレジットを生み出した。そして、最も貧しい人たちが自らの手で発展をもたらすことができるということを証明したうえで貧困は人間が作り出したものだから変えることができると述べた。ユヌス氏は3月2日にグラミン銀行総裁の強制解任通知を受けた。この背景にどんなことがあるのか、政治的に様々な問題があるのか、本当に不正を行ったのか、今の私には考えても調べても分からないのが現実だ。けれども私は、彼の言った言葉だけは信じたい。今の搾取する側の人々が自分達の生活を見直して、搾取される側の人たちのことを考えるようになれば、今の世の中はきっと変わるであろうと。経済学が弱者を無視しない学問になればきっと多くの人が助かるであろうと。

「改めて考える」という言葉は良く使うものだが、今回のスタディーツアーで私は、その「改めて考える」ということが本当にできたように思える。自分のこと日本のことを見直し、なんらかの答えを出したいと思うようになったからである。今の自分の生活は搾取する側に加担していて、そのような生活はこのスタディーツアーで感じたことを忘れさせてしまうものなのかもしれない。しかし、私は決して忘れたくないと思う。今感じたこと

を胸に刻み、この経験を本当に意味のあるものにする事ができる日まで絶対に忘れずにいようと思う。



Bangladeshにおける経済格差是正と底上げ

グラミン銀行、NGOの活動、ショミティ活動を通して

渡辺早香

今や世界のどこへ行っても目にするマクドナルド。どの国へ行っても同じ味を味わえるため旅先で安心を覚えた経験は誰しもあるだろう。世界118カ国にあるマクドナルドだが Bangladesh にはまだ存在しない。マクドナルドの有無や数はその国の経済状況を示すバロメーターとされており、 Bangladesh は依然として貧しい国であると考察できる。

実際、 Bangladesh は最貧国の一つとされており、毎日1ドル以下で生活する人は人口の約36パーセント、2ドル以下で生活する人は人口の約83パーセントと言われている。首都ダッカ市内には3000以上のスラムがあり、町へひとたび出ると、お金をくれと手を出して物乞いをする子どもに出会う。貧困という過酷な現状がこの国には残存している。

このような現状の一方、 Bangladesh は現在、目覚ましいスピードで経済発展を遂げている。経済成長率は年

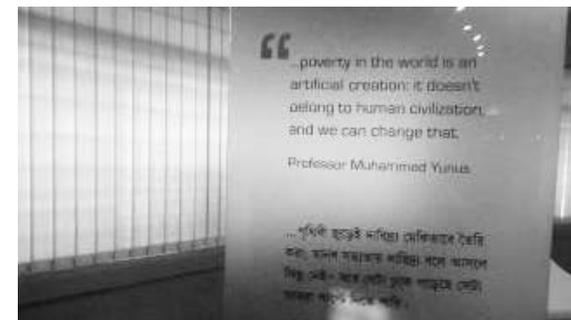


5.74パーセント(2009年、外務省)、人々の生活水準は向上し自動車や携帯電話が普及し始めた。ダッカ市内には看板が増え、ピザハットやケンタッキーフライドチキンができ、GAPやH&M、そして日本のユニクロの工場をも進出しているのである。今年はワールドカップクリケットが開催され、世界において Bangladesh の経済成長が認知されつつある。

このような経済成長は、女性や貧困層のような経済的弱者の成長による Bangladesh 経済全体の底上げがなされた結果であると言えよう。経済的に役割がなく時間をもてあましていた女性に対し、繊維工場での仕事を与えることにより女性の自立を促したのである。女性は子どもの教育や健康に重要な役割を果たすとして、現在 Bangladesh においては女性への教育制度の充実や支援がなされている。女性と同様に、貧困層が成長していることも経済発展の要因であろう。マイクロクレジットと

呼ばれる無担保融資が普及し、貧しい人々でも融資を受けられるようになったのである。

マイクロクレジットの代表的な例としてグラミン銀行が挙げられる。2006年ノーベル平和賞を受賞したムハマド・ユヌス氏が総裁を務め、低所得者を対象とした融資システムを展開している。融資対象となるのは、所有する面積が0.2ヘクタール未満で資産の合計が0.4ヘクタール相当未満の人々とされ、融資対象を低所得者に限定していることが一般銀行と異なる点と言えよう。貸し付けに際しては、血縁関係がなく経済・社会的背景が似通っていて信頼しあえる5人のグループを作り、各グループ内において相互に監視しあいながら融資を受ける。返済できない人がいると他のメンバーが融資を受けられなくなるため、全員一致で融資を受ける人物と金額を決定するのである。返済期間は約1年、実質金利は約10パーセントとなっており、返済率は約98パーセ



ント。グラミン銀行は今やおおよそ 860 万人の借手を抱え、その活動はバングラデシュ内の全ての村、8 万 3 千村に行き届いている。

全国各地に普及し広範囲での底上げが可能になったものの、グラミン銀行は土地がない人々にはローンを貸すことが出来ないという現状がある。グラミン銀行のシステムは、バングラデシュ全体の約 60～70 パーセントの人々に適用するものの、土地を持たない最貧困層には対応できていない。

このようにグラミン銀行において融資対象外となってしまう土地のない最貧困層の人々に対しては、ローカルな NGO が融資を行っている。PAPRI という NGO においては、グラミン銀行や BRAC が行っている一般的な融資方法のみならず、ソフトローンと呼ばれる最貧困層向けの貸し付け形態を実施している。一般的なローンより低金利での融資を行っており、お金の貸し借りのみならず研修プログラムを用意し技術や教育を施すことにより人々の自立を促しているのである。一生懸命やっても変わらないと希望を捨てかけている人に対して、開発され得る範囲に入っていけるように手助けをしているのだ。村という狭い単位で活動することができる NGO だからこそ、地域の人々とのふれあひの中からニーズを見出し、政府やグラミン銀行の手が届かない人々に対して支援が出来るのだと言えよう。



村においては NGO のソフトローンの他に、ショミティと呼ばれる女性の相互扶助グループが存在する。ショミティは土地のない貧しい女性が集まってグループを作り、メンバー各人が一定額の積み立てを行い貯蓄したお金を順番に借りていくというシステムである。

毎週のミーティングにおいて、誰が最もお金が必要なのか、本当に返済できるのかなど話し合いを重ねている。自分たちの貯蓄したお金を貸し借りしあうため、話し合いにも熱が入り、妥当な人物に対し妥当な金額の貸し付けが可能となっていると言えよう。ショミティにおいてはお金の貸し借りのみならず、子どもへの教育・衛生・健康・保健などに関する講習も行われており、地域において相互に助け合うことで生活しているのである。

グラミン銀行、NGO、ショミティのシステムは全て“信頼”をもとに行われている。私は、これらのシステムは鎌倉時代から共済的金融として利用されていた日本



古来の「結」や「無尽・頼母子（むじん・たのもし）」に似ていると感じた。かつての日本においては、貧困者救済や事業振興を目的に相互扶助団体の「講」を組織し、お金を積み立てて緊急時に融資が受けられるようにしていたのである。現在このような風習は一部の地域においてのみしか見られない。たとえば、沖縄県や鹿児島県奄美諸島には、個人や法人がグループを組織して積み立てを行い、順番に融資を受けられるようにした「模合」という金融システムが存在している。沖縄県は失業率が全国でも最も高い地域であるものの、「モアイあっていこう（伊豆七島の新島の方言で、助け合っていこうという意味の言葉）」を合言葉に、互いに助け合って生きている。しかし、このような風習は例外的なものであり、現代日本においては、経済発展とともに人間関係は希薄化し相互扶助の概念は失われつつあるように思われる。

私は、バングラデシュという国に、以前の日本を、日

WATANABE HAYAKA

本人が忘れ去ってしまった相互扶助の心を見た気がする。今後バングラデシュは大きな発展をとげ、第二の中国となり得るかもしれない。しかし、経済発展と引き換えに、人々の他人を思いやるあたたかい気持ちを、人と人との深いつなかりを、相互扶助の精神を失ってほしくない。

数十年後、あるいは数年後、経済成長によって豊かになった町や人と、変わらない人々のあたたかさがバングラデシュにあることを祈っている。



●参考文献

- ・ 渡辺龍也『「南」からの国際協力』（1997年出版 岩波ブックレット）
- ・ 松井範惇・池本幸生『アジアの開発と貧困』（2006年 明石書房）第7章利用
- ・ 外務省ホームページ
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bangladesh/data.html>

সূর্য NGOとグラミン銀行の役割の違い

前埜孝枝

私は以前から NGO の活動や世界で貧困が原因で生じている問題について興味があり大学でもそれに関連する講義を受講してきた。初め、このスタディーツアーに参加して世界で最も貧しいと言われるバングラデシュに実際に行き、現地のストリート・チルドレンや農村に住む子どもたちなど、様々な状況に置かれる子どもの様子や生き方を見たいと考えていた。しかし、バングラデシュで学んで行くうちに NGO の在り方について自分なりに見えてくるものがありとても関心を持った。したがってこのレポートではバングラデシュの NGO である PAPRI の活動とグラミン銀行の活動を比較しながら考えを深めてみようと思う。

まず、NGO の PAPRI とは国際 NGO のシャプラニールから独立した団体である。私たちは PAPRI の代表であるバセットさんにお話を伺うことができた。PAPRI



が目的とすることは「人生は変わらない」と考え、変えようとしていない人々をいかに開発するか、努力することである。その方法の1つとしてマイクロクレジットがある。マイクロクレジットとはグラミン銀行がやり始めたときとされる小額無担保融資のことである。PAPRI のマイクロクレジットには2種類のものがある。1つはお金を借りる人の技術を活かす、グラミン銀行や BRAC が行っているマイクロクレジットと同じ方法である。もう1つは「ソフトローン」と呼ばれるマイクロクレジットである。これはグラミン銀行のような所からお金を借りることのできない最貧困層の人々やハンディキャップを負っている人々のためのものである。グラミン銀行や BRAC はお金を返せる力のない人には貸さないのである。しかし PAPRI のソフトローンは普通のローンと金額は同じだが、お金を返せる力のない人に職業訓練を受けさせ、どうしたら最貧困層の人々がスキルアップを図ることができ、お金を返せるかを考えている。また PAPRI ではマイクロクレジットの他にもたくさんの活動をしている。まず、衛生、健康、水の供給についてである。これはユニセフやバングラデシュ政府の役割であるが、大きな団体では国の小さな農村などにまで手が及ばない。そこで NGO の PAPRI が代わりに役割を果たしているのである。資金はある団体から他の団体へ受け渡された資金を最終的に PAPRI が受け取り実際には PAPRI が農村の



少女グループ (キシュリ)

人々に教えているのである。

PAPRI の活動には衛生・健康、村の女性、教育、思春期の女の子、ハンディキャップを負う人々へのものなどがあるので紹介したい。バングラデシュでは水の問題としてヒ素が挙げられる。またバングラデシュは洪水の多い国である。洪水のときにトイレが流されてしまうと病気が広がってしまう恐れがあるので、流れないようにする対策を教えている。次に、村の未亡人や子どものいない女性たちは仕事がない。そういった人々に村の道路をつくる仕事を与えている。しかしこのような仕事は、2、3年しか続かないから将来的に彼女たちが働けるように研修を行っている。この活動の資金は UNDP からもらっている。他にバングラデシュでは男性が女性の顔へ

MAENO TAKAE

塩酸をかけるという事件が起こっている。この理由には失恋やけんかが挙げられる。時には親から子どもにかけてしまうケースもあるという。PAPRI ではこのようなことをやらないように教えている。しかし、もうすでにそうってしまった人への治療も行っている。それから CEP というプログラムがある。バングラデシュの川には中州のある地域があり、そこに住む子どもは周りが水ばかりで学校へ行くのが難しい。そういった子どもたちへの教育プログラムである。また、中州の地域を対象に最貧困層の人々への職業訓練を受けさせるプログラムもある。思春期の女の子のためのプログラムでは知識を高めて、早婚、持参金のような悪い習慣を彼女たち自身でなくしていくことを目的としている。このプログラムでは村の年齢と地域の同じ女の子が集まった少女グループへ PAPRI の現地スタッフが行き、グループで勉強をしている。ハンディキャップを負う人々への活動では精神障害以外の障害を持つ人々を対象としている。PAPRI には精神障害の人々を扱う知識や教育がまだないためケアすることができない。この活動ではリハビリや職業訓練を行っている。また治る障害であるならば病院の紹介も行っている。

PAPRI の活動は現地により近付いたものであり、活動をする前から現地でワークショップをして誰が 1 番困っているのか、政府の支援が届いていない地域はどこ

なのかを探している。政府の支援はやりやすい所を中心としているが、PAPRI はやりやすい所よりもやる必要のある所を選んでいる。

次に、グラミン銀行について。私たちは Mrs. Jannat-E-Quanine にお話を伺うことができた。グラミン銀行は 1983 年 Professor Muhammad Yunus が設立。1983 年から銀行としての活動を開始した。グラミン銀行は今では 2565 の銀行がバングラデシュのすべての村に所属している。グラミン銀行は貧しい人々のための銀行であり、銀行の利益、利子は貧しい人々へ行く仕組みとなっている。しかし、グラミン銀行は銀行であって NGO ではないので最貧困層の人々へはお金を貸すことができない。グラミン銀行からお金を借りるメンバーに誰がなれるのかという一定の目安を設けて、例えば土地を 100 坪以下しか持っていない人ならなれるけれど、101 坪持っている人はなれないというような制限を設けている。銀行のオーナーたちはグラミン銀行のメンバーであり、どうやって運営していくのかもこのオーナーたちが決めている。また、全体的な理事会の 13 人のうち 9 人は村の女性である。

グラミン銀行は訓練とモチベーションを大切にしている。他の銀行と同じようにお金のやり取りだけでなく職業訓練も行っている。最初に村に銀行の新人を行かせて、その人がお金を貸してその村で困っていることを調べて



ノーベル平和賞受賞時の Professor Muhammad Yunus

解決していくと村の人々の笑顔をシェアできて自然と教育できる。

Dr. ユヌスの弟子たちは絶対に不正をせず、責任を持っている。グラミン銀行には信用がありメインは銀行であるが、系列会社は 22 に上る。その会社は個々が独立した会社であるから、グラミン銀行が会社の方針を押しつけることはせず、その会社の将来はその会社毎に決めている。このツアーをガイドしてくれたアラムさんの

言葉を借りると、このような系列会社はグラミンという名の木から生えた枝と言える。系列会社は責任を持っているからその枝には福祉という名の実がなっている。まず PAPRI の活動について聞いたとき私は最も貧しい最貧困層の人々にグラミン銀行はお金を貸してくれないから NGO の活動の方がグラミン銀行の活動よりもいいものだと思いに思いついていた。しかし、グラミン銀行についても知ることによって活動と役割の違いがあるということがわかった。私は、農村や地域にとっても密着した存在が NGO であると考え。NGO は限られた地域に関しては衛生・健康について、教育についてなどを直接村の人々に教えたり、マイクロクレジットを行ったり、直に触れ合って話し合っ問題解決して行くことができる。だから、NGO には政府やグラミン銀行のような大きな団体では手の届かない所で代わりに役割を果たしていると考え。一方、グラミン銀行のような大手が大々的にマイクロクレジットを行ったから今のようにマイクロクレジットを広めることができた。また、グラミン銀行には信用があるから系列会社がたくさんあり、不正をしない会社が福祉的な働きをできると考える。それから、NGO のマイクロクレジットとグラミン銀行のマイクロクレジットには大きな違いが2つあると考える。まず1つ目は利益、利子が最終的に誰のもとへ入っていくかである。NGO のマイクロクレジットでは資金

はすべて NGO へと入っていき、グラミン銀行のマイクロクレジットでは銀行のオーナーである貧しい人々へ資金が入る。NGO のマイクロクレジットでは村人には利益はなく、グラミン銀行のマイクロクレジットでは村人に利益があると言える。2つ目は NGO のマイクロクレジットは最貧困層の人々へもお金を貸せるが、グラミン銀行のマイクロクレジットでは貸せない点である。

NGO のマイクロクレジットは NGO の設営のためにも例えばある村人が NGO から 10000 タカお金を借りて完済できたら次は 15000 タカ借りてもらおうことが目的となってしまっている。これではマイクロクレジットに村人が依存してしまう可能性もあり、自立につながるのかという点が疑問である。大学の講義でも教わったように貧困を撲滅するには1つの方法に頼らずにあらゆる面からたくさんの方で解決に導いて行くことが必要だと改めて感じた。

グラミン銀行の博物館でガイドのアラムさんに現在 Dr. ユヌスが政治的に叩かれているという状況であるという話を聞いたときにとっても考えさせられたことがある。Dr. ユヌスは今の経済システムでは第3世界に住む貧しい人々が搾取され貧困をなくすことはできないから経済システムを変えようとする動きを見せたという。そのとき私はその動きをとってもいいことだと思ひ、どんどん進めてほしいと思った。しかしそれを阻もうとし

Dr. ユヌスを消そうとしている人々がいるという。それは日本などの多国籍企業である。多国籍企業は第3世界の人々の搾取の上に成り立っているからそのような人々が富を持つようになると経営が成り立たなくなってしまうから今の経済システムを維持しようとしているのである。ではそんな多国籍企業側に住む日本人である私には何ができるのか。私たちはファミリーレストランへ行ってたくさん料理を注文してお腹がいっぱいになったら残したり、嫌いなものは食べなかったりする。バングラデシュの人々の年取の平均は人それぞれだがだいたい 600US\$ くらいだと聞いた。このツアーに私が持って行ったお金は 300US\$ である。バングラデシュ人の年取の半分を持って行って、「かわいい、安い」と言いながらお土産をたくさん買う私たち。でもそれは搾取の上に成り立っていることで地球の反対側では食べるものもなくて飢えに苦しんでいる人々がたくさんいる。改めて考えると本当に残酷なことをしていると思う。日本人ゆえのエゴであってはならないがやっぱり私はそういう人々のために何かできることがあるのではないかと思う。今はバングラデシュに行って日も浅くスタディーツアーのすべてが記憶に濃く残っているが、日本で生活して5年、10年経ったときに今の気持ちを忘れてしまわないかととても心配で、忘れて行ってしまう自分がとても嫌だと思う。世界で厳しい状況に置かれている人々のた



SHIZUE 小学校の5年生と

めに何ができるのかはっきりとした答えは見つからないけれど、大学生の間に世界で起こっていること、どうしたら貧困をなくすことにより近付けるのかをよく勉強したいと改めて思う。

পপৌে বাংলাদেশの子どもたち

阿部結花梨

1. 青空教室

2011年2月19日、私はダッカに24ヶ所ある青空教室のうちのKAMOLAPURという駅へ向かった。そこに着くまで、私は車の窓からダッカの様子を見ていた。バスや車、人力車、はたまた歩行者などがダッカの道路にギュッと集まって通行している。横入りなんて当たり前、交通ルールなんてないように思えた。こんな状況だったら事故も頻繁に起こってしまうのだろうと感じた。

日本では考えられない異様な光景に私は興奮気味で撮影していると、市場の近くでごみさらいをしている子どもを見かけた。車の移動だったため、その子どもをほんの数秒間見ただけだったが、ごみさらいをしている子どもの姿が目には焼きついた。今までテレビ越しで見ていた路上で生活している子ども、ストリートチルドレンを私は初めて自身の瞳から見た瞬間だった。

それでも、車の窓から見たという事もあって、私たちが乗っている車内と外は別世界なんじゃないかと錯覚が起るくらい一歩後ろから見ているような、未だに遠い世界の映像を観ているような感覚でいた。また、短時間のうちにいっぺんに日本との生活の差を見ている気がして、頭がくらくらした。1つ1つの光景が驚異で開いた口が塞がらないとは正にこの事だ。

そういった事を思っているうちにKAMOLAPURに

着いて青空教室へ向かった。青空教室にはどんな子がいるのか、私たちが快く迎え入れてくれるのか、青空教室の子どもたちに会うのが不安だった。しかし、道案内をしてくれた青空教室に通う2人の男の子は笑顔で迎えてくれた。その笑顔を見て不安が吹き飛んで気が楽になった。また、青空教室に着くと沢山の子どもたちが笑顔で思いっきり手を私たちに振ってくれた。とても元気いっぱいでも倒されるくらいだった。

青空教室の様子は、勉強をしている時には先生を囲む円の形になって鉛筆や定規、ノートを持って勉強に取り組んでいた。壁などにはイラストに描いてある名前の上ステッカーをぶら下げている。また、私たちの話を聞いている時は前には小さい子、そして順々に大きい子へ並んで座っていた。このように見てみると青空教室は学校と何ら変わりのないように思った。特に印象深かったのが、ふざけている子がいたら近くにいる別の子が注意していた事だ。

1人でもふざけている子がいると、一緒になってふざけてしまう子が出てしまう。やんちゃ盛りの年頃の子どもたちが集まっている場所なら尚更そうだろう。けれど青空教室の子どもたちは一緒になってふざけてしまう子は一切いなかった。むしろ殆どの子が注意をする側に立っていた。注意する子は、今は話を聞く時、ふざける時ではない、と自覚しそれを注意という形でふざけてい



青空教室で勉強している子どもたち

る仲間に教えていた。社会から切り離され、劣悪な路上で生活している子どもたちを、その時その時に合わせて自分がすべき態度は何なのか意識させるところまで持っていくには容易ではなかっただろう。青空教室の子どもたちと先生との心と心のキャッチボールが出来ているからこそ、子どもたちの心の成長へと繋がっているのではないだろうか。

2. ドロップ・イン・センター

青空教室の次はMOTIJHEELにある、Boys and Girls of MOTIJHEELというドロップ・イン・センターへ向かった。そこで12年間働いているチーフプログラムコーディネーターのFarida Yeasmeenさんのお話を聞

ABE YUKARI

く事が出来た。ドロップ・イン・センターを運営しているオポロジェヨ・バングラデシュは1995年からバングラデシュ独自のNGOであり、年間8万人の子どものサポートしている。その対象となる子どもは、ストリートチルドレンを始め、スラムに住んでいる子どもや、売春地域で働いている子どもたちだ。また、オポロジェヨ・バングラデシュの目的は子どもたちが社会に関する地域や技術を身につけ、社会の財産として生きていく子どもを目指すこと、夢をなくしている子どもに信用、希望を取り戻すことをあげていた。

オポロジェヨ・バングラデシュは法律を変えた形跡がある。1971年に子どもの権利を批准した条約が出来たが、この子どもの権利についてオポロジェヨ・バングラデシュを中心にネットワークをつくって政府に相談した結果、2009年に子どもの権利に対する新しい法律が生まれた。

また政府もストリートチルドレンに対する政策の重要性を認識しはじめ、ドロップ・イン・センターとパートナーを組み、県64に子どものセンターを設けた。

こじきに対する具体的な法律は、国が責任をとってこじき達にとって何が良いか考えてゆく、最終的にはこじき達を一般の学校に転入、または就職先の研修などをさせ、輪を広げていくことで社会に戻していきことだ。これは国の責任であると同時に地域の責任であるという認識

を持たせていくことも大切だ。

私はドロップ・イン・センターに着いて勉強している子どもたちを見た時、青空教室にいた子どもたちより大分落ち着いていて驚いた。私たちが入ってきても真剣に勉強やダンスに取り組む子が殆どだった。むしろ青空教室の子どもたちのようにふざけて注意を受けている子は1人も見当たらなかった。このように1歩ずつステップアップしていくことで社会での適応能力、自立した生活を送ることが出来てゆくのだろうと感じた。

私はFarida Yeasmeenさんの話を聞いて、バングラデシュであれ日本であれ政府はいつも動くのが遅いと感じる。政府がもっと早く子どもを守る政策を考えていかなければ傷ついていく子どもが増えるばかりだ。子どもは地球という星のかけがえのない大切な財産であり、愛情を受けて育っていくもの。それほどこの国でも共通に言



Boys and Girls of MOTIJHEEL のフロア案内
3階がオフィス、4階が女子、5階が男子となっている

えることではないだろうか。

3. シズエ・モデル・ジュニア・ハイスクール

2011年2月23日に、アラムさんが理事長を務めるシズエ・モデル・ジュニア・ハイスクールへ訪れた。ここでは、この学校の校長先生であるAbdul Latif Miahさんとお話することが出来た。この学校は1994年に設立した。当時、この地域には子どもたちが良い教育を受けられる所はなかった。始めは生徒80人、先生8人だったのが現在生徒500人、先生25人にもなっており、この地域では一番大きな学校である。また、この学校は女性の先生が多く、イスラム教、ヒンドゥー教と先生たちが崇拝している宗教も混合である。

バングラデシュでは6000人の生徒の中で30人奨学金を貰える、そのうちの9人がシズエ・モデル・ジュニア・ハイスクールからという教育レベルの高い実績がある。

校長先生のお話を聞いた後、5年生の英語の授業の様子を見た。1クラス25人ほどで、私が見たクラスは若干女の子の人数が多かった。英語の授業の内容は教科書に描かれた時計のイラストが何時を指しているか答えたりするもの。私は中学校に入ってから英語を勉強し始めたが、この学校は小学校のうちから英語を勉強していて私が中学校の時話せた会話をこの子たちは小学校で話せ



シズエ・モデル・ジュニア・ハイスクールの校庭に集まる生徒たち

ているのかと思うと、英語を推進している環境が羨ましいと感じた。

私も英語を推進している学校に行けば良かったとも思ったくらい、生徒全員が積極的に英語で私たちと会話をしようと試みていた。

4. まとめ

私が考えていたバングラデシュの子どもたちの印象は、笑顔はあるけれどどこか暗い、陰のあるかんじだと思っていたが実際は違った。バングラデシュの子どもたちの笑顔はキラキラと輝いていた。私はこのスタディツアーを通して純粋で無垢な子どもたちの笑顔に癒された。そして、その子どもたちの笑顔を奪う権利は誰にも

ないのだと強く思った。私利私欲のままに子どもを利用することは絶対にあってはならない。

私は、オールダッカの町散策で偶然出会ったストリートチルドレンの男の子が忘れられない。最初見た時はデジカメでその男の子を撮っていたが男の子のうつむく姿をみて撮るのを止め、カメラ越しではなく自分の目で見ようと思った。なんでそうしたのか自分でもよくわからないが、そこで初めて私はバングラデシュに来ているのだと実感できた。今この子の近くに私がいるんだ、テレビを通じて見ているのではないんだと感じた。その子は足を怪我していて痛々しかった。ずっとうつむいていて表情をあまり見る事ができなかったが、いつか思いっきり顔の筋肉が緩んでしまうくらい笑顔になる時が来ると良いと思う。その第一段階が青空教室でありドロップ・イン・センターであり、最終的には一般の学校へ社会に溶け込んでいける事に繋がると思う。ダッカ中心だけで25万人～100万人のストリートチルドレンがいる。やはり、NGOのサポートを受けていない子どもも数多く存在するだろう。それでもNGOの活動は今後も続けていくべきである。そして政府もドロップ・イン・センターとより深く手を結ぶなどをして子どもたちを劣悪な環境から守ってほしいと切実に思う。

この先も子どもたちの笑顔が絶えない、そんなバングラデシュでありつづけてほしい。

কলা বাংলাদেশの子どもたち

風間美樹

10日間 Bangladesh に滞在してたくさんの人々に出会った。オポロジェヨ・Bangladesh でドロップインセンターのファリダさん、女性のマイクロクレジットグループの方々、キシユリの女の子たち、PAPRI 代表のバセットさん、シャプラニールの小嶋さん、繊維工場の副工場長 Humayam さん Gap 担当の Jillur さん、グラミン銀行の方々、SIZUE 小学校の校長 Abdul Latif Miah さんから貴重なお話を聞いた。また、青空教室、オポロジェヨ・Bangladesh の子どもたち、アムラボ村の子どもたち、スリナガル村の一家、SIZUE 小学校の生徒達、TUHIN さん一家、他にもマドラサに通っている少年2人、ガソリンスタンドに集まった人たち、車や船の周りに集まった人たち、本当にたくさんの人たちと触れ合った。私は、この10日間で一番触れ合ったのは子どもたちだと感じる。なので Bangladesh で出会った子どもたちについて書こうと思った。

KAMALAPOOR 駅前の青空教室の子どもたちとは Bangladesh に着いて最初に触れ合った。ダッカには24もの青空学校があり、他にもチッタゴンやクルナにもある。私たちがこの青空教室の近くに行くとみんな笑顔で、名札を見て声に出して呼んでくれたりした。私はこのとき正直文字が読めることに驚いた。そして近くにいる子も遠くにいる子も自分をデジカメで撮って！とせがんできた。私の側にいた男の子は、耳の聞こえない男

の子の名前を覚えてくれたりとても優しく、みんなすごく笑顔。そこにいた2、3人の男の子が歌を披露してくれた。少し照れていたけど、すごい自信を持って歌っていて、すごく輝いていた。この子どもたちがストリートチルドレンだとは思えなかった。なぜなら、私はもつと闇の部分を持った子ども達が多いと思っていたから。話を聞くとみんなそれぞれ仕事を持っていて、新聞を配っている子や荷物を運んでいる様々な仕事をしている。そこで私が気になったことは、女の子が1人しかいなかったこと。私たちが行った青空教室にいた女の子は今母親が働いている繊維工場と一緒に働いていて、いつか正社員になれたらと言っていた。青空教室への参加は自由と聞いていたので私たちが行った日が少なかつただけなのか少し気になった。

次にドロップインセンターのオポロジェヨ・Bangladesh の子どもたち。この施設に来る前にアラムさんが言っていた「青空教室にいる子どもたちは、自分自身をコントロールすることができないが、ドロップインセンターにいる子ども達は自分自身をコントロールすることができるようになる」という意味が行ってすぐにはわかった。青空教室にいた子どもたちの様子はまるで動物園のようだったが、この施設にいた子ども達は断然落ち着いていて、私たちが教室に行っても騒ぐことなく、手を控えめに振る程度で授業に集中していた。ここでは5、6



KAMALAPOOR 駅で行われている青空教室の様子

人で1つのグループになり、1グループにつき1人の先生が付いていた。他の教室に行くと、女の子たちが数人で踊っていた。すごく上手で、見た目も大人っぽくて、色気があった。あとで何歳か尋ねると多分13歳か14歳と言われて驚いた。1つは13、14歳位であんなにも色気があるのだということに驚いたのと、もう1つは「多分」という言葉に驚いた。日本にいて、何歳？と聞いて「多分」と返されることはほとんどない。私は生まれて初めて「多分」で返された。でも、ここにいた子ども達も暗い過去があったなんてわからないくらい笑顔がいっぱいあったし、輝いていた。写真撮ろうとジェスチャーで伝えると、みんな自ら近付いて来てくれて嬉しかった。でも、こういったドロップインセンターにいて、大人に守ってもらっている子どもはまだまだ少ないのかなと考えるととても複雑な気持ちになった。こんなに多くの子ども



ダンスのレッスンをしていた女の子達

達の責任はやはり親や国が責任を取るべきだし、一刻も早い改善策を練るべきだと思う。子ども達が早く大人への信用や夢を取り戻せたらいいなと改めて感じた。

アムラボ村の少女グループキシュリとも交流した。ここでは、PAPRI から派遣される女性講師から少女達が学校ではなかなか教えてもらえないことや、親にも聞けないことをこの女性講師から教わっていた。講師が話しているとき、少女達は真剣に話を聞きながらも意見を交換し合っていた。今回の内容は早期結婚についてだった。話を聞いていると早期結婚の問題点は日本でも同じような気がした。子どもの出産において血液が足りないことや、再婚を繰り返してしまう、経済的に困難なことが多いことなど日本における早期結婚も同じ問題点があると感じた。この少女達に「日本では女性は16歳から、男性は18歳から結婚は許されているのですがこれについ

てどのように思いますか？」と言ったこちら側からの質問に対して、彼女たちは「宗教上の違いもあるが、日本では、こういった教育も早い頃から受けている。しかし、自分達は日本よりも遅れているため自分たちには日本よりも2年は必要」と言っていたことが強く印象に残っている。どうしてこのことが強く印象に残っているかは全然わからないけれど、こういった教育を学校で受けることができた日本人よりも、日本よりもだいぶ遅れてこういった教育を受けているバングラデシュの少女達の方がすごく真剣にこの問題と向き合っていて、日本人は早期結婚について安易な考えを持ちすぎているのではと感じたからかもしれない。また彼女たちは、昔はあまり1人で外に出ることは許されず、学ぶこともできなかったと言っていたためか、彼女たちは学ぶことを本当に喜んでいるように私には見えた。また、このショミティのおかげで1人で外に出られると言っていて、女性の社会進出に向かってみんなで進もうとしているのだなと感じた。また、それと同時に改めて宗教の違いや環境の違いを実感した。

このキシュリの目標は、少女達に良い知識を与え、良いお母さん作りであった。キシュリの少女達と私達12人の将来どんな大人になりたいかという意見交換をしたが、キシュリの少女達は「良い母親になって子どもに良い教育を受けさせたい」といった意見が目立った。私た



少女グループのキシュリ

ちの中には「仕事と家庭を両立させて、良い母親になりたい」という意見が多く、良い母親になりたいということは両方とも共通していて感動した。ここで質問できなくて心残りだったのは、彼女たちはお見合い結婚を望むのか、それとも恋愛結婚をしてみたいと思うのか。私は、お見合い結婚も良いと思う。なぜなら相手のことや家族のことがすぐわかるから。でも彼女たちにとってはお見合い結婚などはどのように見えているのかが後になって気になったので、次回はぜひ聞いてみようと思う。

他にも SIZUE 小学校の生徒達とも触れ合った。ここでは最初生徒達があまり懐いてくれなかったが、少しするとみんな懐いてきてくれた。みんなで縄跳びをして遊んだりしたあとに、授業に参加したが、小学生とは思えない英語の授業に驚いた。さすがトップレベルの学校。日本だったらあの英語の授業は中学一年生レベルなのに、

KAZAMA MIKI

みんな綺麗に英語を読んで、英語で質問してくるし、自分で発展問題まで作っていた。先生にも積極的で、日本との学力の違いにとっても驚いた。最後はノートを破って折り紙を始めてしまったけれど、彼らの頭の良さは存分に伝わりました。ここでも心残りなのは、日本の文化をそれぞれ伝えることができなかったこと。もっと、日本の文化を知ってもらって世界を広げてもらいたかった。

最後に、バングラデシュの子どもたちについてレポートして共通して見えたことは、みんな明るくて、笑顔が素敵で、優しく、自信を持っていて、暗い表情をしている人は10日間の内一人として見かけなかった。これは、子どもだけじゃなくてバングラデシュ国民みんなに共通することだと思う。

私たち日本人は、パソコンを持ち、デジカメも持ち、停電になる心配もせずに深夜まで電力を消費する。私は今までこういった環境にいることが恵まれていると感じていた。しかし、バングラデシュに行ってこれらが恵まれていると感じなくなった。みんなパソコンがなくてもデジカメがなくても幸せに見えたり、笑顔が素敵で、優しく、自信を持っていてというような自然と持ち合わせている精神的な部分もバングラデシュの人々の方がよっぽど恵まれていると思う。バングラデシュに世界的な企業が入り込んで開発することが本当に良いことなのか

疑問を感じる。都市部には近代的な建物が増えたとして、ストリートチルドレンの数が減ったとしても、こういった人々の精神的な部分は無くして欲しくないし、地方は変わらず、私たちが見たままの自然であってほしい。そのために、私たちがすべきことは何なのか全然わからないけれど、あと2年残っている大学生活の中で見つけていけたらと思う。

また私は今までイスラム教の地域に住む女性に対して間違った見方をしていた。私にとってイスラム世界に住む女性は、肌を隠し、家に籠もり、とても暗いイメージだったが、今回のスタディーツアーで女性達がビジネスを行っていたり、グラミン銀行でお話を聞いた方が女性だったり、アラムさんのイスラムのお話のなかで母親が一番尊敬する人といったことを聞いてイスラム世界に住む女性のイメージがだいぶ変わった。今回のスタディーツアーで日本にはわからなかったことがたくさんわかったし、この旅が私の中でお世話になった何十人もの人にまた会いに行きたいと思える旅行になって本当に嬉しく思う。東先生、アラムさん、本当にありがとうございました。

ডাল বাংলাদেশの子どもたち

齊藤 朋

今回自分の足で直接 Bangladesh に行って見て、先生のお話や本、そして映像だけではあまり良く分からなかったことなどを、実際に自分の目を通して見ることによって、とてもよく理解することができました。日本にただでは分からない、気が付かなかったようなことを目の当たりにして、すごくいろいろなことを考えさせられる良い機会になったと思います。実際に Bangladesh に行けたことは、すごく貴重なことだと日本に帰ってきて改めて思いました。Bangladesh で生活してみて、いままで自分が当たり前だと思って過ごしてきた毎日は決して当たり前ではないのだ、ということがとてもよく分かりました。自分はすごく恵まれているということ思い知らされたし、たくさんのことを考えることができました。

Bangladesh で生活した中で私が一番印象に残ったのは Bangladesh の子どもたちなので、今回はそのことについて書こうと思います。

Bangladesh に着いて最初に出会ったのはストリートチルドレンで、私たちは青空教室を見学しました。子どもたちは気が向いたときに青空教室へ勉強しに来るといってお話でした。つまり日によって来る子どもの数が違うのです。すごく小さい子から大きい子まで、たくさん子どもたちが一緒に勉強していました。女の子は1人しかなくて、少し驚きました。ここにいる子どもたちは、

青空教室に来れば友達と会える、と考えている部分が大きいようでした。先生が何かを聞くと、手を挙げる子どもたちが多いことにびっくりしました。日本の子どもたちはもっとシャイで、青空教室にいる子どもたちほどフレンドリーではないような気がしました。彼らは働いたりもしていて、懸命に毎日を生きているのだと実感しました。先生は子どもたちをまとめるのがたいへんそうだな、と思ってしまいました。次に訪れたドロップインセンターでは、子どもたちは大人しく、先生の言うことをきちんと聞いているという印象でした。ドロップインセンターはダッカに6か所、国内には12か所あるということでした。青空教室とは違い、少し自由が制限されているという印象を受けました。踊りを踊っている子もいて、自分の才能を最大限に生かしているのだということ



がとても良く分かりました。ドロップインセンターの子どもたちは、青空教室の子どもたちと比べると、落ち着きなどが違いましたが、目の輝きは同じでした。みんなきらきらしていて、見ていて優しい気持ちになりました。

そして少女グループ、キシュリとの交流もとても印象に残っています。PAPRI から派遣されたソーシャルワーカーが月に2回無料で学校では学ばないようにすることを女同士で学ぶ、ということでした。私たちは「早婚」についてのたくさんの意見を聞くことができました。これまで私は、Bangladesh の人たちは早婚が主流なのだと思っていました。しかし話を聞くと、女性は18歳未満、男性は20歳未満で結婚することを早婚といい、このことについてみんなが良い印象を持っていないということが分かりました。日本では女性が16歳、男性が18歳



SAITO TOMO

で結婚できますが、実際にその年で結婚する人はほとんどいません。バングラデシュも同じなのだということが改めてわかりました。早婚のデメリットはたくさんあります。不自由な子どもが生まれるかもしれない、結婚に関する知識があまりない、義理の父母や夫の気持ちもきちんと理解することができない、経済的・社会的に上手くいかないということでした。少女たちは親に結婚させられそうになっても、頑張って説得すると言っているのを聞いて、私はびっくりしました。私はもう20歳ですが、結婚させられそうになったことはないし、結婚の心配もされたことはありません。一生独身でいてもなんの問題ありません。しかし彼女たちは、早婚は嫌だけど結婚することは当たり前だと言っていました。結婚しないことなどありえない、というようなことでした。現在日本では結婚の平均年齢は高くなってきているし、結婚しない女性も増えてきています。実際私も結婚願望はあまり高い方ではありません。しかし彼女たちの話を聞いていると、将来は教養のあるお母さんになりたい、理解のあるお母さんになりたい、子どもの気持ちをきちんと理解できるお母さんになりたい、やさしいお母さんになりたい、などいろいろな理想の母親像を聞くことができました。その話を聞いていると、私もお母さんになってもいいかも、と思いました。アラムさんも結婚して子どもは産むべきだと強く言っていたのがとても印象に残ってい



ます。ただ自分自身が自由でいたいから、なにかに縛られたくないから、という理由で結婚しないのはただの自分勝手だと言っていて、その言葉が胸に刺さりました。このキシュリでは、直に同じくらいの歳の女性と触れ合うことができるとも良い勉強になったと思います。私はいままで、将来どんなお母さんになりたいかなど考えたこともありませんでした。しかし今回のこの交流で、結婚についていろいろ考える機会ができてとても良かったと思います。

SIZUE 小学校では、みんなが制服を着ていたことにびっくりしました。小学生なのにきちんと英語を話されていて、日本の小学生との違いに衝撃を受けました。生徒は500人だということで、意外に多いなあ、という印象を受けました。小学生と直に触れあって、物をくれる



子どもたちもいたり、日本語で挨拶をしてくれる子どもたちもいたりして、とても可愛かったです。最初は、小学生の英語についていけなかったらどうしよう、と思っていましたが、なんとかなって良かったです。しかしもつと英語を勉強しなきゃ、と心から思いました。

他にバングラデシュでとても印象に残った子どもたちは、物を売っている子どもたちです。バスに乗っていて途中止まったりすると、外から私たちに売り物を持って見せてくるのが印象的でした。このことについて私はいろいろ考えさせられたし、とても悲しくなりました。買ってあげたいけど買えない自分の無力さにも悲しくなったし、なにより子どもたちはどう考え、何を思って売っているのだろう、と考えるととてもつらくて悲しかったで



す。私は体調が悪くなってしまい、物乞いの子どもたちを直にみることはできませんでしたが、考えただけでもとても悲しい気持ちになります。物やお金をあげるのは簡単だけど、できることなら子どもたちが物乞いしたり、働いたりしなくても、安心して楽しく暮らしていけるような社会になってほしいと思います。そうすれば子どもたちが働く必要もなくなり、もっと豊かで安全な社会になると思います。この点で、日本とは違うという印象を強く受けました。日本では物乞いの子どもたちや、ストリートチルドレンを見ることなどなかったので、バングラデシュでこのような子どもたちを見たときは戸惑いしかありませんでした。この先、このような子どもたちが少しでも減ることを心から祈っています。バングラデシュはだんだん変わってきているそうなので、バングラデ



シュのこれからの未来にとっても期待しています。

バングラデシュでの生活を振り返ってみて、日本にいるときと違ってとてもゆっくり時間が流れているように感じました。特に村での生活はゲームをやっているようにスローライフで、心が癒されたし、ずっとここにいたいと心から思いました。瞑想の時間に聴いた自然だけの音は一生忘れることはないと思います。日本に帰ってきてバングラデシュのことを思い出すと、すごくいい旅だったと思うし、長いようでとても短く、一日一日とても濃くすばらしい毎日だったと思います。ホームシックにもならず、行ってよかったと心から思うし、また是非行きたいと思います。体調を悪くしてみんなに迷惑をかけてしまいましたが、すばらしく貴重な体験ができたことを心から感謝しています。すごく楽しかったです。

বায়ু বাংলাদেশの子どもたち

長崎彩美



この研修で私たちはさまざまな子どもたちに会ってきました。その場所・豊かさ・土地の差などの違いで子どもの印象もとても違っていたように感じます。その一つ一つの子どもの印象と実際の現状をまとめていきたいと思います。まずバングラデッシュの中でも豊かな教育を受けている SIZUE 小学校の生徒たち。全体的に日本の小学生とはかわりませんが先生たちに聞くと時々日本人が訪れるので日本人にはなれている。はじめて日本人がこの学校に訪れた時はみんな遠くから見つめるしかなかった。といていた。しかし私たちが来たときは一緒に縄跳びをして遊んだりあめをくれたりとても人懐っこい子に見えました。SIZUE model junior high school は 1994 年に当時その地域にはよい小学校がなかつ

たので小学校をつくらうという思いから建設された。当初は 80 人の生徒と 8 人の教師で始めた学校である。今ではこの地域最大の学校となり、生徒数 500 人以上教師数 25 人の大きな学校へと成長した。学費は一ヶ月 300TK ただし奨学金制度があり 25 人は学費免除である。2009 年には統一試験において全員がよい成績で合格また学校奨学金という国の援助を受けれる子 30 人中 8 人がこの学校の子どもでした。また、教師は女性の数が男性の数より圧倒的に多く〔20 対 4〕宗教もイスラム教・ヒンドゥー教の方々がいてまちまち、女性の社会進出・宗教の共存がうまくできていると思いました。私たちは小学 5 年生の英語の授業を見学させていただきました。この子達が習う授業は国語・英語・数学・科学・社会〔自然地理〕・宗教であり、日本の小学校にある図工や保健体育などはありませんでした。教室を見学したとき最初生徒は興奮気味でしたが先生が授業を始めるとまじめに教科書を開き授業をしていました。英語の内容は日常で使えるもの〔このときは時計の読み方〕日本の中学 1 年生の後半に習うようなものをしていました。教室を観察してみると、壁は薄く上部は隣の教室とつながっており隣の教室から声が聞こえてきました。また座席は女子・男子と別れており右側に女子・左側に男子となっており、これは宗教的なものと伺えました。

次にパプリの村の小学生と交流した時のことを書きた



いと思います。この日はちょうど言語運動の日であり、子どもたちは裸足で掛け声をかけながら行進しました。みんな裸足だったけど元気に 2 キロの道を歩きました。集会の後子どもたちは私たちは市場へ向かったのですが、子どもたちもついてきました。カメラをむけるとしきりにポーズをかまえ、また自分のとった写真を見たいとせがみ、見せると、今度はカメラを奪って写真を撮ろうとしました。カメラをあまり見ることがないのかとても物珍しそうに見てました。パプリは日本人のボランティアもたくさんいたと聞いていたので現地の子は日本人に慣れているのかと思ったが、やはり物珍しいのか私たちの泊っている宿舎の中に入ってこようとした。パプリの支部があるナラヤンプルでは少女グループのショミティーに参加させていただきました。このショミティー

は11歳～18歳までの女の子の集まりで入会は任意形式だそうです。ここで話す内容は主にジェンダー・コンピューター関係・法律・女性に関する暴力・リーダーシップ・収入向上の6点である。パプリのソーシャルワーカーを月に2回派遣しており“よりよい女性を育て、子どもを教育できるようにする”ことを目標にしています。またソーシャルワーカーも女性なので男性が女性ではなく女性が女性に教える形式をとっている。

今回ショミティーで話した内容は前回の復習(エイズのこと)を少し復習し、今回のお題である「早婚について」話しました。内容としては・18歳以下の結婚はよくない・障害児の生まれる確率が高い・家族をどう養えるかわからない(子どもが子どもを育てるようなもの)その結果家族中が悪くなる。などなど…エイズの知識にしるこの事にしる学校ではこのようなことを教えてくれません。しかしこのようなことが起こると経済的にも悪影響なことばかり起こるのでそれをなくすためにショミティーで教えています。少女グループに所属している子にこのショミティーに参加することを親はどのように思ったかインタビューしてみると、“少女グループのような活動に対して親は最初反対であったがショミティーで話したことを親に話すとだんだん賛成してくれた。”と親もいまは賛成してくれているケースが多かったです。またショミティーにはいり女の子たちの意識も変

わってきました。いくつかの例を出すと、“ショミティーに入る前は1人で外へ出るのが怖かったが今ではショミティーに一人で来ている。”また今までは悩みや相談があれば1番に相談するのは母親・または家族であったが、今はショミティーのおかげでコミュニティーができて友人もできたので相談する。という意見もありました。実際ショミティーにはいてよかったかと聞くと、“たくさん勉強ができる”“役に立つし楽しい”という意見とともに全員一致で手を挙げました。最後に私たちは“将来どんな大人になりたいか?”を少女グループの子と意見交換しました。彼女たちの意見と私たちの意見はとても似ていて“子どもの気持ちを理解しながら理解があり教育できるお母さん”というものでした。

次にストリートチルドレンについて話したいと思います。私はこのフィールドワークを通して3種類のストリートチルドレンに出会いました。1つはセンターに住んでいる子どもたち2つ目に青空教室に通って言う子どもたち3つ目にそのどちらもなく何の支援も受けていない子ども。3つのタイプのストリートチルドレンに会った時のことを書こうと思います。まず3つ目のタイプのストリートチルドレン、私たちがオールドダッカを歩いているときに見かけてインタビューしました。まさに本で読んだ通りでまた私の思っていたストリートチルドレンと同じで大人を信用しておらず、警戒心を強



く感じました。また足にできた傷が化膿していたことやアラムさんが食事のことを聞くと“今日は何も食べていない”とこたえておりストリートチルドレンの生活環境の劣悪さが伝わってきました。次に2つ目の青空教室で会ったストリートチルドレンたちについて話したいと思います。青空教室に初めて行ってまず驚いたのが子どもの数の多さ、そして熱気私たちが来て興奮していたのもありますが、とにかく私たちが前に立ち子どもたち

NAGASAKI AYAMI



が列をなして座るのには時間がかかりました。やはり SIZUE 小学校の生徒とは違うなと感じ“この子供たちは制御すること・何が悪いかわからない（親から教育されていない）”というアラムさんの言葉を思い出し納得しました。また一見全員素直に挙手し質問に答えているかと思えば、矛盾した回答などにもすべてに手を挙げ自分に注目を求める子どもたちも大勢いました。子どもたちが何か悪いことをしても声でしかることはあってもぶつことはしない。ストリートチルドレンに対してまずやらなければいけないことは“大人への信用を取り戻すこと”だとセンターの人は言っていました。青空教室のあとオポロジェというストリートチルドレンの保護に取り組んでいるもう一つのセンターに行くと、ダン



スを踊ったり、授業をしていたり、まるで普通の家庭の子どもと間違えるような子どもばかりで驚きました。また、センターの職員に対して警戒心が感じられずむしろ好いているように感じました。そして、私が何より青空教室の子どもと違いを感じたのが一緒に写真を撮った際私に手を回してきたことでした。青空教室の子どもたちはしきりに握手を求めてきましたがそれ以上のことはしようとしませんでした。やはり、センターのスタッフたちが地道に子どもたちの心のリハビリをしているんだと感じることができました。現在約8万人ものストリートチルドレンが支援を受けていますが、その何十倍である25万～100万人ものストリートチルドレンがいるのも事実です。国もその重要さに気づき近年様々な取組が

なされていますがまだ十分とは言えません。一刻も早く子どもたちの笑顔が取り戻されることを私は願っています。

ঢাল বাংলাদেশの女性たちの今

杉本美紀

はじめに

Bangladeshを訪れるまえにシャプラニールのブックレット「 Bangladeshの女性たちは今」を読んで、女性たちの就学率、識字率の高さやショミティでの活潑な様子は感じられたが、実際の女性たちはどのように生活をしていて、彼女らがどのような考えを持っているのか興味を持ったのでこのテーマをあげた。

1. 青空教室の少女

1 番初めに訪れたストリートチルドレンが集まる KAMALAPOOL 駅の青空教室には 1 人だけ女の子がいた。ストリートチルドレンは親に捨てられたり、家を飛



び出してしまった子どもたちが大半であり、大勢の男の子に混ざって女の子がいたことに驚いたが、彼女も男の子と同じように勉強していた。彼女は繊維工場で働きたいと言っていたが、繊維工場ではまだまだ雇用人数が多くない。ストリートチルドレンの少女も働けるような社会が早く作られれば良いと思った。青空教室やドロップインセンターで活躍している FARIDA YEASMEEN さんは子どもからとても信頼されている方だった。

2. チョール・ベラボー・モヒラ・ショミティの女性たち

ショミティは女性たちだけの相互扶助グループだが、通帳には旦那と一緒に写っている 2 人の写真を貼っていた。これは、責任は 2 人にあることを表し、2 人で相



談してお金を借りることで家族仲が良くなり、女性にお金を借りる権限があることで女性の地位向上ができるのだ。お金を借りること以外にも衛生教育・識字学級として機能しているため、子どもの教育もしっかりできるようになり、女性の果たす役割が大きくなっていると感じられた。

3. キシュリ (少女グループ)

訪れた少女グループでは 11 歳～ 18 歳の少女たちが学んでいた。彼女たちは学んだことで起きた変化を「自分の権利について学ぶことができた」「1 人で外に出ることができるようになった」「自分に自信がついた」と語っていた。キシュリの少女たちに様々な教育をしてい



SUGIMOTO MIKI

たのも女性のソーシャルワーカーの方だった。

特徴的であったのが、「どんな大人になりたいか」「将来の夢は何か」という質問だった。私たち日本人は「仕事と家庭を両立したい」「人の役に立てるような仕事がしたい」と言っていたのに対し、キシユリの少女たちは「子どもに対して理解のある大人になりたい」「子どもに良い振る舞いができる大人」「子どもに優しく、気持ちがわかってあげられる大人」など、多くが子どもを基準に考えている意見であった。

日本では仕事の場面でも男女平等が当たり前となっている今、家事・子育てを自分の夢・生きがいにする人は少なくなっている。少子化が問題になっているが、このような考えの違いが原因の一部になっているのではないだろうかと思った。

そしてもうひとつ感じたことは、勉強や自分たちの仕事のほかに彼女たちの多くがボランティア活動をしていることである。学校に通うことのできない子どもの所へ行って勉強を教えたり、幼い子どもの面倒を見たりしているそうだ。彼女たちの話を聞いて、日本にもボランティア活動はあるが、バングラデシュのボランティア活動のほうが身近に感じる気がした。バングラデシュの人々は、家族だけでなく周りの人々との結びつきが強いため、ボランティアとして活動しているのではなく、助け合っている印象だった。



4. グラミン銀行 General Manager Jannat E Quanine さん

ユヌスさんと共に仕事をしてきた彼女は今の地位に就くまでに苦労はしたが、男女関係なく、信頼やサービス・勉強すれば上の人たちが誰でも認めてくれる、自分に見合ったイスを与えてくれるとおっしゃっていた。グラミン銀行や仕事について語る彼女はとても力強く、自信に満ちていた。バングラデシュの女性は社会的にもまだ認められておらず、格差があるという偏見を持っていたが、男性よりも上の地位に立ち、社会的にも認められる仕事に就いて活躍している女性もいることに驚いた。彼女だけでなく、ユヌスさんと共に働いている女性は他にも多くいた。

5. シズエ小学校の教師

シズエ小学校で働く教師の大半は女性であり、とても若い方ばかりであった。副校長先生も女性で、教師の方々からとても信頼されている方だった。女性が大学を出て就職する先も繊維工場だけでなく、このような教育の現場でも活躍出来ていることがわかった。

6. THITI らバングラデシュで出会った 女子学生たち

バングラデシュの女性は外へあまり出ることがないと思っていたが、若い少女たちは活動的で勉強に対する意欲に満ちていた。本のお祭りで出会った少女たちは自分たちの書いた本を売って NGO の活動資金にしていると語っていた。バングラデシュの中でも NGO に協力する学生が出てきたことは大変いい傾向だと思った。他にも制服を着た女子学生の集団にであったり、本屋の前にもたくさんの女の子たちが集まっていた。これは女性の識字率や進学率の向上の現れであると思った。

THITI たち家族をはじめとして、町で出会う少女の数は英語を話すこともできていた。シズエ小学校でも子どもたちは英語を学んでいたが、男女関係なく勉強することのできる環境がバングラデシュにも出来ているこ



とにとてもうれしく思った。

最後に

ブックレットで読んだ時に感じたバングラデシュの女性たちは男女差がまだある中で頑張っているという印象だったが、実際に女性たちに会って、現在のバングラデシュには女性は社会的に必要とされている存在になっていると思った。繊維工場が拡大され彼女たちの活躍する場が広がりつつある中、世界にもバングラデシュの女性たちが進出するのも遠い先のことではないと思った。5年後、10年後バングラデシュが発展するのに女性の力が不可欠なのではないだろうか。

পানি বাংলাদেশの村の女性たち

信濃直美



私は Bangladesh の村の女性たちをテーマに Bangladesh で体験をレポートする。私がこのテーマにした理由は、村の女性は村から出ることができないと聞きそのことについて村の女性は村の中で何をしているのか、ショミティとはどのようなものなのかなど興味を持ったからである。

私はスタディーツアーで Bangladesh へ行ってきた。Bangladesh のことはテレビや授業で渡された資料や見た映像でしか知らず、イメージとしては洪水が多く貧しいというものしかなかった。実際ダッカについてバスに乗り景色を見渡してみると海外のブランドの看板が道路の脇に立ち並び人力車と車とバスが交通規制があるのかないのか分からないくらい危険な状態で通っ

ていた。黒い排気ガスや砂埃に咳き込み空気の悪さに吐き気がした。初日ダッカでのサロワ・カミューズの買い物で私の友達が選んで手に持っていたのを女のお客さんが譲ってくれないかとばかりにじろじろ見てきてつかまれたと聞いたときには日本では考えられないと思ひ驚いた。住宅地には女の人もたくさん見かけ、ジーパンをはいた女の子も見た。最初の Bangladesh、ダッカの印象はこんな感じであった。

Bangladesh での3日目、村へ移動した。この日から3日間は村での生活である。村に着いて始めに見学したのは女性のマイクロクレジットグループ「チョール・ベラボー・モヒラ・ショミティ」である。このショミティは12年行われていて人数は30人ほどである。このグループが始まった当時は旦那さんの反対もあったようだが女性の収入が子どもの教育費など家庭を支える収入の中心となっているため今は賛成しているという。このショミティで扱っているマイクロクレジットはグラミン銀行が考えた見えないお金であり担保のない人には貸してくれない。女性が小さい商いを始めるためにショミティ内でお金を出し合いグラミン銀行からお金を借りている。この通帳には夫婦二人の写真が載っていた。奥さんが旦那さんにお金を貸すためである。これは女性の地位向上にも役立っている。このショミティ参加者のある人は農業のために、始め22500タカ借りて毎週500

タカづつ返して45回で返済が終わったという。同時に毎週20タカづつ貯金もしていて、この貯金をすることも義務であるという。2回目は27000タカ借りて毎週600タカづつ返済したという。1回返済が終わると、きちんと返済も貯金もしてきた人は2回目、より大きなお金が借りられる。貯金もはじめは3252タカだったものが2回目返し終わったときには15600タカにまでたまったという。こうして事業が拡大するとともに貯金も増えていくという仕組みである。そのおかげで貯金もたまり女性の地位向上にも役立っている。Bangladesh では男性より、女性のほうが家族の生活向上を考える傾向が強いそうである。なのでグラミン銀行は女性への融資のほうが貧困の解決に効果的だと考え、借り手の97%は女性が占めているという。村の女性は村の中で家事や子育てをしているだけでなく経済活動にも関わり日々努力していることが分かった。日本で誰かと協力してお金を借りるなどというグループはあまり聞いたことがなく、日本も今経済状況が良くないので見習うべき部分もあるのではないかと。貧しい中で懸命に努力している彼女たちに生きる強さを感じた。

次にキシユリの私たちと同年代の女の子たちと交流してきた。キシユリは月に2回ミーティングをしていてエイズや早婚など家族には聞けないことまで勉強しているという。PAPRI から知識のある人が教えに来るそう

だ。この先生は、彼女たちにとって何でも聞けるお姉さんのような存在であるという。キシユリの子たちは早婚について私も分からないことまで知っていた。これはバングラデシュが日本より早婚が問題になっているということが理由であると思う。キシユリの女の子たちが言うには、大人になると体が大きくなり、しゃべりたくなり、踊りたくなるそうだ。キシユリの子たちも踊りや演劇を全然恥ずかしがらずに披露してくれた。この日、本部で少女グループの文化プログラムでも踊りを見せてくれたが、ここの女性は踊ることが大好きなようだ。文化プログラムでは少女から大人の女性までステージに立っていた。アラムさんの話では、村の女性は村から出られない分村の中で活躍する場を作っているという。キシユリの子たちの話を聞いて日本の若い女性と違った考え方や行動についても学べた。キシユリの女の子たちは男性と話すときは気をつけ、外へは1人で出ないそうである。そして男性から変なことを言われたら親に相談するという。結婚相手はほとんど親や親戚の紹介で、相手の選択肢を最近では持てるようになってきたらしいが無理やり結婚させられることもあるという。結婚相手以外に好きな人を作ることは許されず、もしいても人には言わないという。私はこれを聞いたときに男女関係がとても不自由で嫌にならないのかと思った。他人に紹介された結婚相手を好きになれるとは限らない。日本ではナンパはよく

あることだし今は中学生でも彼氏彼女がいてもおかしくない。私は若いときにたくさん恋愛することはいいことだと思っている。しかし今の日本の状況を見てみると本当にこの自由さが良いとは言い切れない。バングラデシュにも日本にも良い一面と悪い一面が存在しているように感じた。キシユリの女の子へ、「日本では結婚が認められる年齢がバングラデシュより2歳若いがそれについてどう思うか」という質問に対し「日本人は自分たちより知識があるから大丈夫であり、私たちには結婚までの期間に余裕がなくてはいけない」という答えが返ってきて、それは本当かもしれないと思った。私たち日本人は実際に早く結婚できるとしても早く結婚しない。逆に晩婚化の問題まであがっている。教育や経済が進んでもそれに対してまた問題が出てくる。高度経済発展国と発展途上国にはそれぞれに解決すべき問題があると思った。話を戻すが、キシユリには希望すれば入れるという。始め親は反対していたがミーティング内容をシェアしたら今ではちゃんと参加しろといわれるほどになったようだ。彼女たちのなりたい理想の大人は、理解・教養のある大人、アイデアのある大人、正直でやる気のある大人、子どもにとって信頼できる大人など、日本人の私たちも理想とする大人であった。

村の女性たちの話を聞き日本人との考え方の違いを知ることができ、村の女性の経済的な活動や恋愛事情、活



動的な部分や不自由な部分の両方を見ることができた。そして今まで映像でしか見たことのなかった彼女たちの活動を間近で見れて、参加させてもらえたことに感動した。ショミティの雰囲気はもっと女性同士が喧嘩をしているように言い合うものだと思っていたので、この楽しそうに話し合いをしている姿は見てみないと分からないと感じた。

サティアントラ村 TUHIN 家の生活。私とゆかりとともに、シンパの部屋に寝泊りさせてもらった。部屋には化粧品や壁飾りがあり、おしゃれ好きな子だと思った。食事の時にはお母さん、おばあちゃんが料理や水を用意してくれ、おかわりまでよそってくれた。バングラデシュの人々は優しくて温かくもてなしてくれると感じた。朝

SHINANO NAOMI



起きてトイレへ出ると、もう大人の女性たちは食事の準備をするために起きていた。私たちがいないときでも彼女たちの起床時間は早いらしい。しかし後から聞くと私たちが泊めて忙しすぎてお祈りの時間までさいていたらしい。私たちはティティにヘナをしてもらった。ヘナは肌を染めて描き数分おくと着色されるものである。お母さんたちがご飯を取り分けてくれるとき、なぜ指が赤いのだろうと不思議に思ったがこのとき分かった。きっと村の女性はみんなヘナをするのであろう。バングラデシュの女性のおしゃれなのだろうと思った。私はここではじめて知ったが、これは日本でも売られているようだ。ティティはヘナで私の手にほんの数分で細かい絵を書いてしまった。とても器用だと思った。私もバングラデシュの

スーパーでヘナを大量買いし、日本に帰ってから試してみたのだが綺麗に書くことは難しい。次の日にノクシカタを見せてもらったがとてもきれいで刺繍が細かく多く入ったものばかりであった。ベッドカバーなど大きいものまで刺繍が細かく驚いた。これは家事など仕事の合間に趣味でつくったものだと聞いて感心した。縫い方を見せてもらったが本当に手縫いであった。細かい手作業が延々と続くので私なら頭や肩が痛くなりそうだと思う。しかし機械を使わず手と布と針と糸だけであれほど素晴らしいものが作れてしまうことにバングラデシュの女性はすごいなと思った。日本人は機械やパソコンなどに頼りすぎて自分の体の機能が衰えてしまっているように感じた。昔は日本人ももっと手先が器用で右脳が発達していたんじゃないかなと思ってしまった。

バングラデシュの村の女性と交流して彼女たちの自立心と温かさを直接感じられた。みなとてもフレンドリーで明るくアイデアも豊富で感性が日本人よりも豊かだと思った。ティティの家族はみんな家族のように接してくれた。バングラデシュの村の女性たちからバングラデシュについて学ぶことができた。彼女たちから見習うこともあったし尊敬することもたくさんあった。それとともに日本について考え、今まで気づかなかった日本や日本人の良さにも気付いた。毎日の振り返りの時間もみんなと意見や考えを共有できて自分も少し成長した気がす

る。反省点は忘れ物が多かったことである。周りに迷惑をかけないで行動できるようになりたい。一緒にツアーをしたみんなと先生とアラムさんとルベルさんに謝罪と感謝している。本当に今回のバングラデシュスタディーツアーは為になり行ってよかったですと心から思う。またJABA ツアーでバングラデシュを訪れたい。そして今回お世話になった家族にもまたいつか再開したい。ありがとうございました。

बाडी JOSSOR サティアントラ村の生活について

矢澤みづき

はじめに

私は今回のフィールドワークで村での生活が一番印象に残っている。とくに一番長くホームステイさせて頂いた JOSSOR の村の家族と過ごした3日間は一番の思い出だ。この3日間のうちのとくにアラムさんの説明を交えたフィールドワークで学んだ暮らしの工夫を中心に、村の様子についてまとめてみたい。

リサイクルとアイディアの国

アラムさんが村人の工夫についてリサイクルとアイディアの国とおっしゃっていたけれど本当にその言葉がぴったりだった。村人の古くからの知恵によって資源を少しも無駄にせず、使える物は何度も使い続けるアイディアに溢れた国だった。

I 牛の活用法

i 食用

生きている牛を村で沢山見かけたので少し残酷だが、とても美味しいカレーで私たちも頂いた。豪華な食事のため、お祝い事の時に出来ることが多い。村の人々の大切な食糧になっている。



資料1 燃料用の糞が干されている様子

ii 牛の糞の活用

①燃料

牛糞を集めて固めて窯で焼いて水分を飛ばし、乾かしてから燃料にする。棒に刺さって外で乾かしている様子を村のあちこちで見かけた。また動物の糞はアニマルドロップと呼ばれている。

②虫よけ

庭の土を見ていると少し色が違う部分が見られた。これは糞を土に敷くことで虫よけの効果になるためである。人間のためだけではなく、動物の小屋の近くにも土の色が違う部分があったので動物のためにも敷かれている。

iii 牛の餌の活用

授業のパズルでも登場した牛の餌は単につまれている

だけでなく、風よけの役割も果たしている。

II 牛に関すること

i 値段

子牛 約3,000 タカ (約4,000 円)

大人の牛 約15,000 タカ (約20,000 円)

ii 飼育

牛の世話は女性の仕事であり、牛に餌を与えて太らせた、牛の糞を集めるなどの役割を担っている。

iii 餌

牛の餌は稗の他にも、米の炊き水も餌になる。

III 医療について

i 原始的治療法

木や草を使った治療。沢山の葉や漢方を使用して病気や怪我を治す。近代医療に潰されつつあったが、近年また復活している。

ii 近代医療

イギリスを中心としたヨーロッパから導入された治療

YAZAWA MIZUKI

法。歴史をさかのぼると元はドイツの治療が広まっていたが、第二次世界大戦後、イギリスの治療に潰されてしまった。

iii ホメオパシー

自己治癒力を活性化させる自然治療法。約 200 年前からドイツで始まり、その後世界各地、特に欧州、インド、中近東、ラテンアメリカなどに広まった。

IV 食文化について

主食は米カルティ(ナンに似た物)。カレーは魚介類や鶏肉やダル豆や野菜がそれぞれ入ったシンプルな物が多い。味付けは様々なスパイスを組み合わせでされる。



資料2 スパイス

バングラデシュの4大スパイス

- ・ターメリック
- ・コリアンダー
- ・トウガラシ
- ・クミン

デザートはどれも砂糖がたくさん入った激甘のものばかり。バングラデシュの国民飲料であるチャは喫茶店やレストラン、一般家庭でも飲むことができる。



資料3 市場で飲んだチャ



資料4, 5 TUHIN さん家の美味しいご飯

V 行事について

ヒンドゥー教の家では月に約1回のペースで、年に13回行事が行われている。プージャと呼ばれる神との合一を目的とした伝統的な儀式もある。ちょうど私たちがアムラボ村を訪れている間に迎えた2月21日の言語運動記念日には、村の人々と一緒に式に参加し、とても神秘的な気持ちになった。他の村に行ってもあちこちに記念日のシンボルが祭られていたので、国が一丸となってこの日を迎えているのだと感じた。言語運動では約300万人もの人の命が犠牲になっている。式に向かう途中では“ずっと生き残れるように”と掛け声がかけられていた。

VI 星空

私がバングラデシュのツアーの中で一番思い出に残っていることのひとつが星空である。星を見るのは好きだけれど知識がなかった私はどれが何座かわかなかつたため、ちょうど見えていたであろう2月の星座について調べてみた。オリオン座を目印に、冬の大三角形、冬のダイヤモンドが広がっている。



資料6 2月の星座

VIIまとめ／感想

村の生活はまさにリサイクルとアイデアに溢れていて感心させられてばかりだった。ここにも紹介しきれないまだまだ沢山の生活の工夫を利用しながら村の人は生活している。どこの村に行ってもみんな微笑みかけてくれてとても穏やかな表情をしていた。アラムさんの話の中の、この国は沢山の果物と自然に恵まれているため争い事が起きず、平和が保たれているという話にとっても納得がいった。文明に頼らず、独自の文化の中で生活している村の人々は本当に穏やかで、村の人すべてが今の生活で満たされているのだと思った。初めて会う日本人の私たちを、娘や姉妹と呼んで家族のように可愛がってくれた村の人々の優しさを一生忘れないだろう。時計を気

にせず、時間がゆっくり流れている村の生活がとても気に入った。日本の生活に比べたらずっと不便なことばかりだけど、この村に住みたいと思うことができたのは、人々の温かさや穏やかさやゆとりのお陰だと感じた。そしてこのツアーに参加できたことに沢山のの人に感謝したい。この授業を企画し1年前から準備をし、ツアー中もツアー後もずっと面倒を見て下さった東先生や、この授業や東先生と私たちのパイプになってくれた海外交流課の方々や旅行会社の方、現地ガイドのアラムさんやルベルさんに、村や現地でお世話になった方、それにこのツアーに参加させてくれた家族と一緒にツアーに参加した皆、すべての人にとっても感謝している。

VIII参考文献

Bangladeshの食文化について

<http://www.s-b-i.net/syoku.html>

2月の星座

<http://kazubo-uchu.typepad.jp/blog/2009/02/index.html>

হরফ 共生

宮田晴菜



ジョソール村の自然

はじめに

私が今回バングラディッシュでのスタディーツアーにおいてバングラディッシュの人々は共に支え合い、協力し合って生きていることを学んだ。先進国で育った私にとって今まで感じたことのない人々の暖かさが嬉しくもあり、また不思議な感覚のものでもあった。現地の方々が私に見せてくれた屈託のない笑顔はどこからくるのだろうか。また本当の豊かさとは何であるかを考察したい。

私が現地で共生であると感じたことに大きく分類して自然、地域、宗教の3つが挙げられる。まず自然である。ジョソール村に行った時に最初に感じたことは、空気がおいしいということだ。今まで空気がおいしいなどと感じたことはなかったが、村での空気はとても澄んでいて深呼吸をするだけで浄化され気持ちが落ち着いた。道を歩いている時にも川のせせらぎや鳥のさえずりが自然と

耳に入ってきて自然が豊かであるということを目を瞑っていても感じることができた。牛や鶏や山羊などの動物たちも同じ空間で過ごし、共存していた。自然との共存で一番強く感じたのは、現地の人々の自然の恵みを有効に使おうとする生活の知恵である。牛を例にしてみると、乳を絞って牛乳を摂ること以外に牛フンを固めてかまどで焼いてトタンの屋根で干すことで燃料や肥料にしたり、虫よけを作ったりする。また、牛のエサは藁と米のとぎ汁の残飯で女性が牛を太らせる役割を担う。箒は、ヤシの葉の芯を再利用して作る。灰を使って歯を磨いたり、服を洗濯していた。最初に灰で歯を磨くと知った時は、逆に汚れてしまうのではないかと懸念したが、消毒効果があり、かなり白くなっている所をみて、実験で科学的に証明されていなくとも生活する上で効果に気付き、それが伝承して今でも使われていることに感服させられた。バングラディッシュはリサイクルとアイデアの国であると思う。日本にいる間は掃除機や洗濯機などの電化製品を当たり前のように使用してきた私にとってバングラディッシュの村での生活はまさにエコであり、自然のサイクルを乱さず、それを上手く利用して自然と共生していくことがバングラディッシュの良さであり、また自然豊かなバングラディッシュの特徴であるといえる。

次に挙げられるのは、地域である。私は地域の開放的で明るい様子がバングラディッシュの人々の暖かきの根源

ではないかと考える。家の囲いが無い故、隣人同士が自由に家と家を簡単に行き来することができる。プライバシーはないのかと思うところだが、村の人々はプライバシーよりもお互いさまの精神を大切にしているように感じた。困った時や何か手伝ってほしい時などにはいつでも隣人を頼ってよい。その中で自然と信頼関係が育まれていき、仲がよくなる。その仲が村全体に広がる。言葉ですると簡単のように聞こえるかもしれないが、とてつもなく困難なことであるように思う。地域の結束力が強いと、外部からきたよそ者を信用せず邪嫌に扱うのではないかと思っただが、引越してきてくれる人もいるらしくすぐにその地域の生活に溶け込むようだ。子どもにおいても村の人々がみんなで育てるという考えを持ち、悪いことをした子どもにはわが子のように叱ると聞いて、現在日本で問題視されている子育て問題の解決策はバングラディッシュにあるのではないかと思っただ。村の子どもたちは、皆いきいきして活発でもちゃんと分別ができていくところに感心した。ジョソール村で感動したことの一つに家族の伝統がある。これは、リサイクルをして物を大切にしていることにも大きく関わってくるのだが、サリーやノクシカタが古くなってもう使えなくなるときは、布団のカバーに継ぎ足しをして代々重ねていくことだ。思い出や母の形見が布団となり、それがどんどん重なっていくことで伝承を感じ、大事さも増すこ

MIYATA HARUNA

とだろう。「これはいくらで買えますか？」と聞いた時に「この布団はいくらお金を出されたとしても売れるものではありません。」と答えた時の女性の誇らしげな顔が今でも忘れられない。こういうものがお金で買えない価値があるものなのだと改めて実感した。

最後に、宗教の共生についてである。バングラディッシュでは、イスラーム教とヒンズー教が共存している。イスラーム教が作られた物に対して敬意を払うのに対し、ヒンズー教は作られる前の物に対して敬意を払う。ヒンズー教は偶像崇拝をすることにに対し、イスラーム教ではしないなど少し挙げただけでも違いは歴然としている。私は、2つの宗教が共存しているといっても村を半分に分けたようにぱくぱくと二分割されているだろうと想像した。が実際は、違っていた。私がそこで見たものは、イスラーム教を崇拝する人の家の隣にヒンズー教を崇拝する人の家があり、コーランによる他の宗教に迷惑をかけるなという教えの通り、2



ノクシ・カタを再利用する女性

つの宗教が争うことなく共生している姿であった。宗教の行事は違うけれど、冠婚葬祭には必ずお互い助け合うそう。他国では宗教の違いにより内戦や戦争が起こっている世の中で自分が思い描いていた以上の共生をしていることに感激したし、むしろなぜ上手くやっけていけるのか疑問に思ってしまった。そこには他人に迷惑をかけて自分の宗教を貫き通そうとする精神がなく、お互いの宗教を認め合うことで“戦争”そのものの概念がなく、平和に暮らしているという意識が感じられた。だからこそ宗教の違いを越えて共存出来ていることがわかった。

おわりに

戦後の日本は目先の便利さや開発に心を委ね過ぎてしまって本当の豊かさを忘れてしまったのではないだろうか。バングラディッシュでは、トイレも不憫だし、生活していくには何かと困ることがたくさんある。しかし、私はバングラディッシュに行って発展していくことは良いことであるとは限らないと考えが変わった。他の人が聞けば、発達が良いことであり、生活がより便利で快適に過ごせるようになった方が良いと言うだろう。だけれど、ノクシカタを再利用して後生大事に使う姿勢や、子どもたちをわが子のように育てる地域の取り組み、自然のサイクルを利用して採れる果物やお米、宗教の壁を越えた



牛フンを干し、燃料や虫除けに使う。

共存、そして何よりゆっくり時が流れる中で自分たちは幸せだと感じ、その生活を当たり前だと思わずに一つ一つのことに感謝し自然と共に生活していくこと。そのことこそ共生であり、本当の豊かさであるのではないかと思う。現在バングラディッシュは moving country と呼ばれるように著しく経済発展を遂げている。今回のスタディーツアーで学んだ縫製工場の拡大化や女性の社会進出、マイクロ・クレジットやショミティの活動はもっと活発化してほしいと思うし、バングラディッシュという国が発展していく上で必要不可欠なことであると思う。しかしながらその一方で、目まぐるしく変わる経済発展の中でバングラディッシュの人々が今まで生活していく中で築き上げてきた生活の知恵や伝統、人々の対しての優しい眼差しである“本当の豊かさ”を忘れてしまって便利さや利益だけを求めるようになってほしくないと思う。

গন Garment と女性の可能性

成松 咲

2月22日ダッカ市内にある「ananta 工場」という繊維工場を見学した。入場するのにいくつかの門を抜ける必要があった。その厳重なセキュリティチェックに少し今までとは違う緊張感を覚えた。入場してみるとまず私たちが今までバングラデシュで見たことがないほどの近代的な外観に驚きその様は日本の私立高校のようだと感じた。



ananta 工場の外観

まず初めに全体的、基礎的な説明をしていただくために談話室に通されたのだが、白い壁白い床、透明で汚れ1つないガラス、冷房の聞いた空間、日本のオフィスと似ている匂いなど全てが先進的でバングラデシュで数日過ごした私にはどこか未来にタイムスリップしたような感覚さえ覚えた。説明は GAP の社員でありこの工場の他残り二つを管理監察している A.K.M Jillar Rhaman 氏とこの工場の副工場長の HumayunAhued 氏が担当して下さった。この工場は 1989 年にダッカの中心地からスタートし、2004 年に二つにグループに分かれ今の形態を取っている。工場内に 40 ラインを設けており従業員数は現在 8000 人に上る。内 70% 以上が女性、20% 以上が男性である。一日に作られる製品は 4 万個でありその 100% が輸出製品である。ズボンが主となる製品であり談話室にも数えきれないほどの色、厚さ、種類のジーンズの生地が見本として管理されていた。現在は世界のブランド会社から受注をしておりそのブランドとは日本でもよく知られている「GAP」「H&M」「Wal-Mart」アメリカの「ロブルス」などである。使用しているマシンなどの機械は全て日本製の新品であり見学に戻った際目に入るのはどれも「JUKI」と記されたマシンであった。見学に戻ったのはまず sample 製作部門からである。事前に授業で「Garment Girls」の映画を見て女性ばかりの職場をイメージしていた私は大変驚いた。勤務して

いるのは男性しかいなかったからである。女性の姿は数人どころか一人も見つけることはできなかった。聞けばこの sample 部門は最低でも 5 年から 15 年繊維工業に携わったことのある熟練工のみ勤務することができる部署であり、また夜中などにも勤務しなければならない急な仕事も多く取り扱っているため女性を守るという意味から女性の従業員が 0 人なのだそうだ。またこの部門のすぐ横には CAT を使用しデザイン画を作る部門も併設されていた。工場内はこのような sample 作り部門の他に裁断、縫製、品種管理、Packing、Cleaning、Iron、Final Check(値札等も付ける) という部門に分かれている。裁断の部門では何十枚にも重ねられたジーンズの生地記された下書き通りに機械で丁寧にカッティングしている様子を見学することができた。縫製部門では従業員がラインに合わせて一列に並び黙々と作業していた。こんなにも文字通りだと感じることはないくらい「流れ作業」という言葉があてはまっている光景で、前の人が作業を終えその製品が自分の手元に回ってきて作業をし、後ろに流すという合理的で無駄のない作業を行っていた。いくつかの作業の中間地点には製品の各項目を厳しくチェックする箇所が設けられており品質管理の徹底さを垣間見ることができたように思えた。また最終部門のチェックでは針を検知する機械に通し検査する。その機械の向こう側へは限られた従業員しか行くことはでき

ずまた全面ガラス張りで手の届かない高い場所でさえ厚い網戸で仕切れ厳重な管理が行われていた。日本においてはより精密な検査が行われており特別にPQCという日本の会社が入り検査しているとのことである。工場内では赤い丸が記されている柱をいくつも見かけた、柱が白かったためまるで日の丸があちらこちらに記されているように思えたが、これは緊急を知らせるブザーの設置場所を表しているようだ。このように緊急時に備えたセクションを多く見る事ができた。例えば各フロアごとに Fire equipment Box が設置されていること。放水用のホースは数えきれないほど発見した。また火災などの際、従業員全員が安全に避難できるような幅の広い階段が何か所も設けられているのにも気がついた。階段の壁にはどこにどのような緊急対策用の設備があるかを示す図も確認できた。これらの緊急対策への設備をはじめとする従業員の安全や生活、権利を保証するための設備



工場内の託児所

や環境などは全て International Standard と呼ばれる審査の対象でありこの International Standard を満たしていることが世界の buyer 達の要求でもあり第一条件でもあるのだ。この審査は工場創設時は毎週一回行われ従業員の安全や権利が守られているか審査される。そのうち15日に一回、一か月に一回、三か月に一回と審査の期間は変容するがその審査内容が厳しいことには変わりはない。これらの他に私が特に感心した点は工場内に託児所が設けられていることや大きな食堂が完備されていることである。中庭にはグラウンドもあり軽い運動もできるようなもなっていた。また医務室もありその他にも工場外で高いレベルの治療が受けられる病院や緊急時の施設、学校や保育所などの近隣の施設の住所と電話番号の一覧表が工場の入り口には示されていた。

また産休も3カ月まで有効で、定年もないため19歳から自分が働きたい年齢まで勤務できるという点も画



工場内の食堂

期的であると感じた。これらの他に文化を大変繊細に扱っていることにも感銘を受けた。イスラム教徒もヒンドゥー教徒も混在していることや、フロア名にはバングラデシュ独立の際に殉職した人々の名前が付けられており入口には写真が掲示され従業員だけでなく上の立場の人々も尊敬の念を表していることが見て取れた。また言語運動の日である2月21日を示す絵やそのモニュメントも工場内に作られており、綺麗な花が献花されている様子に従業員の文化的思考や行事も大切にしているのだと学ぶことができた。

しかし、このような施設や安全、品質管理など全てにおいて高いレベルの工場や International standard を守っているレベルの工場はバングラデシュ全体でわずか2~300工場しか存在しないのが現実である。その下のレベルの工場は1500~200、その下の劣悪な環境と表現されるような工場は3000~4000工場にも上る。ま



工場内の言語運動を示す記念碑

NARIMATSU SAKI

た繊維工業に携われることのできている女性は500万人と全女性人口の数%であるのも現状である。

私は見学をさせていただいたような高水準の工場が普及することがバングラデシュの女性だけでなく国としての発展へ結びつく大きな可能性を持っていると考える。バングラデシュ人の圧倒的な人件費の安さ、仕事に対する丁寧さや温かさ、特に女性従業員にいたっては仕事ができるということに喜びに近い感情で携わっておりこのような従業員の態度だけでなく、品質の高さからもバングラデシュが今後繊維工業で世界の首位を圧倒的な差で占めるのは目に見えている。この国の主力となる繊維工業を担うのが女性であることに大きな意味を持っていると考える。バングラデシュは大統領が20年間もずっと女性であることやグラミン銀行でユヌス氏の右腕として活躍してきた方が女性であること、SHIZUE小学校で働く教師数も女性の方が多かったりと社会的な女性の地位はある意味日本より高いように思える。しかし、イスラム社会なこともあり大半の女性は仕事を持たず家庭内で家事に専念したり、家業を手伝う程度のことしかできず家庭内での女性の地位は未だ低いままのように感じた。しかし、繊維工場で従業員として働き自身で収入を得て夫とともに経済的に家計を支えることは家庭内での女性の地位の向上に大きく結びつくのではないだろうか。また、完全実力社会である繊維業界で技術

を身につけスキルアップしていくことは女性の大きな自信にもつながると考える。また、工場のレベルのヒエラルヒーはこのままの形態では決してないとA.K.M Jillar Rhaman氏は話す。その理由は下のレベルの工場も働く環境や品質を向上させないとオーダーが来なくなる世界になるからだと言っていた。なぜなら高いレベルの工場でないとbuyerが発注しないからだ。これはBuyerも消費者たちがよりいい環境で従業員が働いている工場で作られた製品でないと求めないことを知っているからではないだろうか。つまり消費者である私たちが工場の従業員の安全や権利、環境が守られることをより強く願えばバングラデシュ国内の未だ低いレベルとされる工場も底上げをせざるを得ないと考える。またバングラデシュが国として大きく飛躍するにはNGOなどの機関に頼る時期ではもうないと思う。これからはいかに企業を誘致するか産業を活性化するかにかかっているのではないだろうか。その先頭を引っ張る繊維工業がInternational Standardに基づく高いレベルで存在し続けることがバングラデシュ国内の他業界への基準となりまた手本となると考える。

以上のようにGarmentがより発達すること。特に上層部のレベルだけでなく業界全体で高レベルに達するよう努力することがバングラデシュ国内の他業界の向上や進出につながり、また家庭内での女性の地位向上にも繋

がるという大きな可能性を持っていると私は考える。

旅のアルバムから



シャムダム織りのおそろいのサリー



気分はファッションモデル



サリーで市場へ繰り出す



ジョソールの村、早朝散歩、ハンモックに揺られてお休み





TUHIN さん家のバラндаでの食事、バングラデシュ風に右手でいただく作法にも慣れて



イリッシュマースを中心に3、4種のおかずが出てくる



ノクシカタ（刺し子布）を自慢気にみせてくれる



民俗芸能パワルのミニコンサート



文化プログラムで踊る少女



世界最大の図書祭りで大道芸人の笛吹きおじさんと

পাটো 2月17(木)、18日(金) **Bangladeshへ、サロワ・カミューズ購入**



2月17日午前8時45分に成田国際空港へ集合。旅行会社の方からチケット等を受け取り、スーツケースを預けた。重さが20kgを超えていないか心配だったが、けれどギリギリセーフ。旅行会社の方の説明を聞いていざ飛行機へ。バンコクで乗り換えをするためまずはタイ国際航空のTG641便でスワンナプーム国際空港へ向かった。飛行機の中では隣の席の方が偶然Bangladeshに行ったことのある方でBangladeshについて話してくれた。バンコクに着いたときはとても暑くて驚いた。外は32度もあったようだ。スワンナプーム国際空港に着いてからまず、宿泊先のルイスターバンデイルームトランジットホテルへ。ホテルで少し休憩してから集合し、ホテル内のラウンジでパイやフルーツを食べた。その後、先生から日程説明を受けて歌の練習をした。曲は「上を向いて歩こう」「会いたかった」「Best Friend」の3曲。「会いたかった」は振りも練習した。練習の後はフルーツバスケットをして親睦を深め、タイ料理のお店へ晩ご飯を食べに行った。ホテルへ戻って就寝。

2月18日午前7時半頃起床。朝ご飯をホテルのラウンジで食べた。その時偶然、先生が昔のネパール人の友人に遭遇。とても嬉しそうだった。

いよいよタイ国際航空のTG321便でBangladeshのダッカへ。空港の中は閑散としていて、空港の外に出るととてもたくさんの人がいた。あの人たちは海外へ出

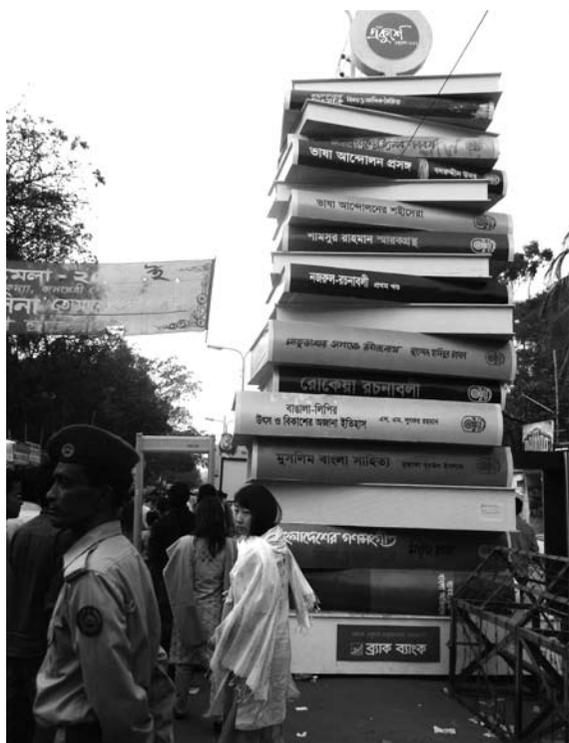
稼ぎに行っている人の家族や親せきと聞いた。そしてガイドのアラムさん、とルベルさんと合流。バスの中で一人ずつ自己紹介をして、宿泊先のHotel de Crystal Crownへ移動。道路にはたくさんの人がいて、ちょうどBangladeshでクリケットのワールドカップが開催されており、飾り付けがとてもきれいだった。ホテルに着いたら休憩をして、その後まずは100ドル分のお金をタカにかえてもらった。バスで移動してAarongというお店でサロワ・カミューズを購入。かわいい物がたくさん売っていてどれを買おうか迷ってしまった。次はmeena bazarというスーパーマーケットに行った。日本の油が売られているのがとても驚いた。その後、芸術大学の学生が作ったものを売っているJATRAというお店でサロワ・カミューズを購入。それから晩ご飯を食べにベンガル料理のお店へ。ルベルさんを待っていたらなんと直美さんのお誕生のお祝いのケーキとお花を買ってきてくれた。みんなでお祝いした。ベンガル料理は辛かったけれど、とても美味しかった。ホテルに戻って就寝。

タイの空港にいた人々よりもBangladeshの人は声をたくさんかけてくれてとても温かく感じた。

前埜孝枝

2月19日(土)

コモラプール駅前の青空教室、 オポロジェヨ・バンングラデシュを訪問 オールドダッカ、図書祭り、ダッカ大学



朝ロビーに集合してから、急遽アラームさんのバンングラデシュに関するお話を聞く。もともとバンングラデシュはジャングルで、そのジャングルも自然の力によって作られることや、現在では国民90%がイスラム教であることや、自然災害も多いなどを教わる。

その後、バスに乗りコモラプール駅前の青空教室に向かうが途中斉藤さんの具合が悪くなりアラームさんの自宅に寄る。ルベルさんと残り11人で待っていると、車外から中を見ていた女性達2人が何か言っていたのでルベルさんが通訳すると、Facebookに載せるから一緒に写真を撮ってほしいとのことだったので、車内で一緒に写真撮影をする。

青空教室に着いて、子ども達と触れ合う。行くとすぐ、首から下げていた名札の名前を声に出して呼んでくれた。一人一人自己紹介をして、子ども達にも自己紹介をしてもらう。中には、話をできない子どももいた。子ども達の仕事は新聞を配り、荷物を運び、繊維工場など様々だった。2、3人の子が歌を披露してくれて、私達も2曲歌った。

次にオポロジェヨ・バンングラデシュに行った。最初にファリダさんからこのドロップインセンターに関するお話を聞く。この施設の目標は子どもから大人への信用や夢を取り戻すことであり、最終的には学校に通わせること、就職をさせる。たくさんのお話を聞く。その後、子

ども達を見に行くと5、6人で一つのグループとなり、集中して先生の話を聞いていた。隣の教室では、双六みたいなもので遊ぶ子ども達と何人かで踊っている女の子がいた。みんなで自己紹介をしたあと、今度は1曲だけ歌を歌い、お別れした。

昼食は初めてのベンガル料理を、生まれて初めて手でご飯を食べる。辛かったけど美味しかった。

オールドダッカへ行く。最初少し臭いが気になったけど徐々に慣れた。オールドダッカでは古い商店街のようなところをずっと歩いた。その間に香辛料を潰す石を作っているお店があったり、ドーナツのようなお菓子のお店があったり、結婚式で使う物が売られていたり様々なお店があった。川に近付いて行く途中に、足を怪我した男の子に会った。青空教室で見た子ども達みたいに笑顔はなくて、不信任が目に見えてわかった。小舟に乗り、最初はみんな怖くて騒いでいたが慣れるとみんな落ち着いて、町の風景とか走ってくる船とかそれぞれ楽しむことができた。乗り継いだ大きい船が急に動き出すというハプニングが起きたが、無事バスに戻れた。

図書祭りではコーランから絵本までたくさんのお本が売られていた。ここでは、いろんな記者に写真を撮られた。夕食は中華。日本人好みの味で本当においしかった。

風間 美枝

साप

2月20日(日)午前

アムラボ村へ



早朝、私たちはダッカからノルシンディー県ベラボー郡アムラボ村のPAPRIに移動した。移動途中トイレのためにとまったガソリンスタンドでは、村の人々がたくさん集まってきてバスの中の私たちの写メをとったり手を振ってきた。トイレから帰ってきてバスに入れなくなったくらいの人数だった。日本人ってこんなに珍しいんだと改めて実感した。この人だけには男性しかいなかった。女性は村の中から出られないようだ。

村へ着いたのは、予定していた時間より遅れてしまった。申し訳ない。私たちは女性のマイクロクレジットグループ「チョール・ベラボー・モヒラ・ショミティ」これは中州ベラボー郡女性相互扶助グループという意味で

ある。このショミティは12年行われているという。人数は30人ほどである。ショミティをはじめた理由は自分たちを開発するため、みんなまじめに毎回参加するようにしているとのことである。お金を借りる目的にあがったのは夫婦で農業するため。このショミティをはじめてよかったという。なぜならお金を借りる目的だけでなく、衛生教育や子どもを学校に行かせること、予防注射などにおいての知識も得ることができるからである。管理人さんが持っていた黄色い通帳がマイクロクレジットであった。このマイクロクレジットはグラミン銀行が考えた見えないお金であり担保のない人には貸してくれない(注)。資金さえあればということで女性が小さい商いを始めるためにショミティ内でお金を出し合いお金を借りている。この通帳には夫婦二人の写真が載っていた。奥さんがだんさんにお金を貸すからである。これは女性の地位向上にも役立っている。この国では男性より女性のほうが家族の生活向上を考える傾向が強いようだ。

このショミティ参加者のある人は農業のために、始め22500タカ借りて毎週500タカずつ返して45回で返済が終わったという。同時に毎週20タカずつ貯金もして、この貯金をするというのも義務であるという。

2回目は27000タカ借りて毎週600タカずつ返済したという。1回返済が終わると、きちんと返済も貯金もしてきた人は2回目、より大きなお金が借りられる。貯金もはじめは3252タカだったものが2回目返し終わったときには15600タカにまでたまったという。こうして事業が拡大するとともに貯金も増えていくという仕組みである。

わたしはこのショミティの活動について聞き、この国の女性は経済において自立していると感じた。このショミティを見る前は、女性は村から外に出れずに家事と子育てのほかにはすることは無いのだろうかと疑問に思っていたが村の中で活発に活動している女性を見て驚いた。毎日働いてこつこつお金を返済し貯金するというのは私にはできないしストレスになりそうだ。このショミティ見学を通して村の女性の精神的、肉体的強さと責任感を実感することができた。

信濃直美

*注) 正しくは、マイクロクレジットとは、小規模無担保融資のことである。

PAPRIの本部ナラヤンプル、 アムラボ村の少女グループ・PAPRIのゲストハウス



13:00 PAPRIの本部ナラヤンプルに移動して昼食

瓜のカレーや小魚の入ったカレーなどを頂く。しかし、人参は食べる事ができなかった。水が安全か分からないからである。念入りに手を洗って、ウェットティッシュで手を拭いて、日本人はなんて弱いのだろうと思う。

14:00 本部で少女グループの文化プログラムを見学

女の子達は踊りや歌など発表して観客達もとても楽しそうだった。また、全て音源が彼女達の携帯電話であったことに驚かされた。

16:00 アムラボ村の少女グループ(キシリ)との交流

家の中庭にシートをひき、ミーティングを行っていた。このようなミーティングは月に2回行われている。

まず、前回のテーマであるエイズについての振り返りを行い、今回のテーマである早婚について話し合っていた。

また、私達は彼女達と質問しあう事ができた。このような少女グループで活動の良い点を聞いたところ、勉強ができること、権利について学べたこと、自信が持てたことなどが挙がっていた。このような少女グループの活動の必要性を感じさせられた。そして、彼女達は私たちに、社会貢献活動をしているかと聞いてきたが、大変答えに困った。彼女達は地域の人々に目を向け、様々な事を行ったらしい。自分の生活を見直せば、彼女達のように学んだ事を生かすということができていないように思えた。

18:30 PAPRI代表バセットさんとミーティング

PAPRIの始まりやPAPRIの活動についてお話していただいた。PAPRIは元々シャプラニールが支援を行っていた団体が、1999年に新しく独立したものである。活動目的は一生懸命やっても大変な思いをしている、また状況が変わらない、変えようとしにくい人々を開発の中に自然に取り込むことであり、活動内容はマイクロクレジット、衛生に関すること、教育など多岐に渡る。

この日に、PAPRIの支援するマイクロクレジットグループや少女グループの活動を見学してきたところだったので、PAPRIの行ってきた活動が大変意味のあることということを感じさせられ、近年バングラデシュの激変はこのようなNGOの活動の賜物であると考えた。

20:00 PAPRIのゲストハウスで夕食

Bさんが気分が悪くなり、先に休んでしまった。また、停電してしまったため夕食はろうそくで灯しながら頂いた。いつも当たり前で電気がつくことに感謝しつつ、また幻想的な雰囲気でもあった。夕食はベンガルカレーであった。

薬師寺理子

গলা

2月21日(月・祝日)

ベンガル語国語化運動記念日・ WARIBOTESHO遺跡



20日の夜から村には音楽が響き渡っていた。早朝6時にパブリの敷地外から小学生たちの掛け声が多数聞こえてきた。小学生たちはみんな裸足で拡声器の掛け声に合わせてながら真剣に歩いていた。ベンガル語であったため上手くは聞きとれなかったが「エクシェフケブラルオモールフルオモールフル」(2月21日ずっと生き残るように生き残るように)と唱えているようだ。私たちもその列の最後尾に並びその運動に参加した。

2月21日はバングラデシュにとって大変大切な言語運動の日である。当時東パキスタンであったバングラデシュはベンガル語を公用語としていたが、当時の西パキスタンの公用語であるウルドゥー語を強要され母国語を

失いたくない一心で反対運動を1952年の2月21日に起こす。大量の文化人が殺されその数は300万人に及ぶと言われている。彼らのことを忘れないため、また彼らに深い尊敬の意を示すためバングラデシュ人は毎年2月21日にこのような言語運動の活動を行う。私たちも2キロほど村を練り歩いた。最後の100mは私たちも裸足で歩き小学校に建つ記念碑に花を捧げるのを見守った。小学校では共に歩いて小学生が一列に並び先生の言葉を真剣な眼差しで聞いていた。そのあとは二人の方がコーランを読み最後に全員で唱えて式典は終了した。朝ごはんを食べずに頑張った子どもたちにミスティが配られ私たちも一口ずついただき、市場へ向かった。小学校のすぐ裏に市場があり近くの川で採れた魚を売っていた。どこでも量り売りをしていたのが印象的であった。9時から卵カレーの朝食をいただき、10時くらいまで村に散歩に出かけた。村の子たちがとても人懐っこく優しくであったかい気持ちになった。忘れられない時間と思い出になった。

10時頃から全員でアラムさんのガイドのもと「WARIBOTESHO遺跡」を見学しに行った。そこではアビブラ・バタール氏が丁寧に説明をしてくださった。バタール氏によると、この遺跡は2500年も前の遺跡であり、まだ調査中ではあるが3500年前まで遡れるかもしれないという歴史的な大発見である。下に行くほど狭く階段状

で作られた非日常的な形態の遺跡から祭祀関係の遺跡かもしれないと予想されている。また出土物にコインやトルコのネックレスなどがあり、西ヨーロッパからアジアへ交易するための世界的な交易地だったと予想されている。遺跡がある村は授業で習ったままの大変伝統的な村でその村の様子にも目をひかれた。時間がゆっくりと流れており日本では考えられないほど穏やかな気持ちになったのを忘れられない。遺跡はまだ調査中であるとのことだが世界的な大発見の途中作業を見学できたという大変貴重な経験ができて光栄であった。

また言語運動に関しても1年に1度の大切な日に日本人である私たちも参加させていただくことができバングラデシュ人の強さや遅しさを感じることができ大変意味のあるものであったと思う。

成松 咲

চর্নি

2月22日(火) 午前

縫製工場



工場の外観

ダッカ・アショリア地区 縫製工場 ANANTA 午前
10時20分～12時

GAP 担当 MR.JILLUR 氏、副工場長 Humayam 氏のお話、工場見学

工場はこの日までに見てきた街や村の様子とは違い、外観も工場内もかなりモダンなつくりで一気に現代にきた感じがした。工場の所々の窓ガラスがなくなっていたのが気になった。

I 工場について

H&M や GAP などの世界的に伸びてきているブランドの工場。1989年、ダッカの中心に工場が建てられる。その後2006年に二つに別れ、プラス3つの工場を設立。

最初は国民から認められず、デモや放火もあった。工場の窓ガラスが所々ないのはそのたである。

今回見学した ANANTA が最大の規模である。工場内には40ラインあり、1日4万個のボトム製品を制作。子どもから大人までの製品を扱っている。子ども用は日本で約2400円～で販売される。

経営・作成・検査・人事・広告の5つの部門から成り立つ。

II 商品が出来るまで

- ①オーダー、材料集め ②サンプル作り ベテランの仕事(5～10年勤務) ③細かい部分の作成 ④パッキング、アイロンがけ ⑤ファイナルチェック ⑥値段決定、パッケージ
- オーダーから販売まで約120日、早くても90日。またファイナルチェックで引っかかる製品はわずか。

III 従業員について

従業員数約8,000人 70%以上が女性、20%弱が男性

男女の接触を避けるためエレベーターの立ち位置が指定されていた。

- i 待遇 週6日、1日8時間勤務、土曜日休み。残業あり。子持ちの女性には難しいため、残業のほとんどは男性従業員の仕事。女性は3カ月の産休+給料を受け取ることができる。
- ii 給料 時給制 政府と決定し、最低賃金は月給3000tk
- iii 管理 工場内に医師が住み込みの病院を管理している。病院やその他の施設の電話番号やマップが工場内に貼られている。
- iv ルール コンプライアンスを重視。綺麗な環境を保つため、定期的な環境チェックを行っている。従業員は健康である権利があり、健康保全にも力をいれている。
- v その他 従業員は基本的に紹介制。最初は簡単な作業からだんだん難しい作業へ。約3カ月で仕事を覚えられる。工場の従業員の専門の大学もあり、学歴制もある。もっと良い条件の職場が見つかった場合や、家の近くに工場が出来た場合転職することもできる。

IV 工場の目標

更なるレベルアップへ。世界へ事業をもっと広げていくこと。

矢澤みづき

グラミン銀行訪問、スリナガル村宿泊



たった数円の物を買ってくれ、とバスの窓を叩いて必死に訴える少年がいた。私たちはカーテンを閉めて拒むことしかできなかった。何も出来ない自分が、こんなにも貧しい子どもがいることが…悲しくてもどかしくて、私はただ涙を流すことしか出来なかった。

私たちと同様に貧困に心を痛めた人物の一人に、グラミン銀行総裁であるムハマド・ユヌス氏がいる。彼は貧困撲滅のため低所得者を対象としてマイクロクレジットと呼ばれる無担保融資の普及に務め、2006年ノーベル平和賞を受賞した。私たちはグラミン銀行を訪れ、ユヌス氏をよく知る Jannat-E-Quanine さんという女性の方にお話を伺った(写真左)。

グラミン銀行は1976年小さな村で始まった。当時、チッタゴン大学経済教授であったユヌス氏はチッタゴン郊外にあるジョブラ村を訪れ、人々の貧しさに心を痛めた。とくに女性の貧しさに衝撃を受け、女性を支援しよ

うと村に通い始める。彼の献身的な活動に女性次第に心を開くようになり、1983年正式な銀行として政府の許可を受けたのである。たった27ドルを40人の女性に貸したことから始まったグラミン銀行は、今や860万人の借り手を抱え全国全ての村に2565銀行が普及している。

グラミン銀行においては対象者を0.5エーカー未満の人に限り、低所得者向けの融資を行っている。融資に際しては、5名ずつのグループを12～15グループ作り1つのセンターとする。5名の各グループには代表を、そしてセンターにも1名の代表を選出する。5名のグループ内でお金を借りたい人がいる場合、代表者がセンターに申し出てグループリーダー12～15名と相談しセンターの中から1名を選ぶのである。10コのセンターが集まり各センター内で決定した1名を選出、10名の中から誰に融資をするのか話し合う。10名のセンターリーダーを統括するのはセンターマネージャーと呼ばれ、センターマネージャー6～8名をブランチマネージャーとセカンドオフィサーの2名がまとめ、1つの銀行として活動しているのである。この銀行は日本で言う“支店”であり全国各地に2565店舗ある。この支店を10～12グループずつに分けこれをエリアマネージャーが統括、268あるエリアを6～8ずつ分け40ゾーンを作った上にヘッドオフィスが位置している。

このような複雑なシステムの上に成り立つグラミン銀



行は全国から信頼を集め、現在、銀行以外に18の分野において事業展開をしている。このようなシステムにより、多くの人々を貧困の淵から救っているものの、土地のない最貧困層には融資をすることが出来ないという現状がある。

このようなお話を伺った後、私たちはユヌス氏についての展示を見学した。グラミン銀行横のお店でサリーを購入、バスに乗り込みスリナガル村に向けて出発した。バスの中に入ってきた蚊、およそ60匹をみんなで殺し、きれいな星を眺めて笑いあった。

しかし、いまだ貧困から抜け出せない多くの人がいることに、窓の外の子供に…心が痛んだ。自分も彼らから搾取することによって利益を享受している一人であることに、何も出来ない自分に対して…もどかしさを覚え、心のもやもやを払拭できなかった。

渡辺早香

ভাষা 2月23日(水) シズエ・モデル・ジュニア・ハイスクールなど



PANSINAO号

時間	場所	主な出来事
早朝	ガンジス河マワ橋付近	魚市場に行き沢山の魚を見る
9時過ぎ	シズエ・モデル・ジュニア・ハイスクール	Abdul Latif Miah 校長先生の話聞く (設立当時 etc..)
9時30分過ぎ	シズエ・モデル・ジュニア・ハイスクール	教室を見回る (主に低学年)
10時過ぎ	シズエ・モデル・ジュニア・ハイスクール	校庭に出てカメラで撮影 (大縄跳び)
	シズエ・モデル・ジュニア・ハイスクール	学校の先生方と対面 お互いに自己紹介
11時30分過ぎ	シズエ・モデル・ジュニア・ハイスクール	5年生の授業の様子を見る 日本のものを英語で紹介
12時40分過ぎ	シズエ・モデル・ジュニア・ハイスクール	校長先生方にお礼を言う 1年2年にわかれて車に乗る
13時30分過ぎ	ガンジス河	伝統的な船 PANSINAO 号でガンジス河を渡る 昼食をとる、とても美味しい
夜	ジョソール	Mr.TUHIN Miss THITI の家に泊まる 停電の中、夕食をとる

মলো 2月24日(木)午前

ジョソール県 サティアントラ村



朝食時、TUHINさん家族の紹介が行われた。家族はおばあさんのSAKINA BEGAMさんをはじめとして、二男(SINPAとSHOHANの父親)のSALIM HASSANさん、奥さんのKOHINUR SALIMさん、三男(ARINとATISHAの父親)のTUHINさん、奥さんのSUBORNA TUHINさん、亡くなってしまった長男(THITIとONIKUの父親)の奥さんである

SHAHINA SAMIMさん、そして子どもたちTHITI(19歳)、ONIKU(14歳)、SHOHAN(19歳)、SINPA(17歳)、ARIN(9歳)、ATISHA(4歳)がいた。

日本では核家族化が進んでいるが、バングラデシュでは親戚大勢で住み、絆がとても強い。THITIのお父さんは亡くなっているが、残された家族3人を養い、THITI兄弟を学校に行かせたりするお金は親戚が出して助け合っているそうだ。バングラデシュでは、親が一番偉く、年寄りはいくら学問がなくても、宝として大切にされて尊敬されている。私たちと家族同様に接してくれ、温かく迎え入れてくれたとても賑やかで優しい大家族だった。

午前中に村のフィールドワークをおこない、村の人々の生活の工夫について多くの発見があり、特に驚いたのがTUHINさんの家を出てすぐに見つけた豚であった。イスラム教では豚が禁じられているのだが、イスラム教とヒンドゥー教が共存しているこの村だからこそ見ることができた光景である。イスラムの人とヒンドゥーの人と宗教に関係なく、冠婚葬祭では助け合っているそうだ。

村の家の屋根は藁とヤシの葉、壁は竹でできており、とても風通しが良い。そして、牛が生活において食料と

してではなく、とても重要な役割を果たしていた。女性が残飯の管理をしており、牛に糞を混ぜたものを食べさせている。家の屋根や、垣根には牛のフンがたくさん棒状になって乾かしてあった。牛のフンは燃料や肥料になる。それだけではなく、牛のフンで壁や道を塗っている場所があった。これにはひび割れを修復し、バクテリアを殺すという一石二鳥の役割があるそうだ。他人に迷惑をかけることないため、物をとり合うことがない。平和的な文化のシステムはこのような循環サイクルから生まれているのではないだろうかと思った。

調理器具も工夫が施してある、自然の道具が多くあり、ヤシの葉からできた箸や、竹でできている米のみ穀と米を分けるクツラ、スパイスをすりつぶす石でできたシルパタ、使えなくなった器を器置きにしたり、リキシャの壊れたタイヤと針金で家の屋根が飛ばないように留める道具や、灰を歯磨きや食器を洗う石鹸、消毒として使用していた(THITI達は灰で歯磨きをしないらしいが…)。バングラデシュの村の人々はアイデアに富み、ナチュラルな生活を送っていた。

杉本美紀

বধু

2月24日(木) 午前・午後

ジョソール県 サティアントラ村



午前は、THITI の家の周りをフィールドワークした。ここでは、イスラム教とヒンドゥー教の家が隣にいらんでいることなど共存の一字に尽きる村であるということを感じた。まず、バングラディッシュでの伝統的な民家を訪問した。そこでは、生活の知恵と自然と共生しながら生活していく人々の暮らしに触れることができた。牛フンを固めてかまどで焼き、それを干して燃料や肥料にしたり、ヤシの葉の芯で箒を作ったり、割れたり、底が抜けてしまった鍋や皿も工夫して何か再利用に回していた。灰を使って歯を磨いたり、服を洗濯する。決して使い終わった後の物を簡単に捨てることをせず、物を最後まで大事に使う姿勢、アイデアとそのアイデアから工夫して暮らしている姿があった。牛やヤギなどが道を行き交う中で時間がゆったりと過ぎていき、誰も時間に追われることなく自給自足の生活をしていた。各家庭の庭には、マンゴーやジャワ、ライチなどの果物がなり、人々はその果物を神様からの恵みだと思って感謝し、その日食べる分だけとりすぎないように食べるという傾向があった。利益や損得を考えず、自然の恵みに感謝して生活している人々には、争う必要がないと考えているようだった。だから、宗教が違っていてもお互いの宗教を認め合い、冠婚葬祭の時には隣人同士助け合いながら生活していけるのだと思った。環境が人を作りだし、豊かにしていく。電気機器が全くない村での助け合いの精神、

村全体の人々の心の暖かさに触れることができた。

午後にはサリーを着て村のバザールへと出かけた。サロワ・カミューズを着ている時よりも人々が手軽に手を振って来ないのは、サリーを着ると既婚者と見られるからだと知り、未婚者と既婚者で対応の違いにおどろいた。サリーは約7mからなる一枚の大きな布で一人で着るのは困難であり、また着ていると伝統を感じて日本にいたる間に着物を着ているような身の引き締まる感覚を持ち、また物腰も柔らかくなったように思う。村のバザールでは、香辛料やお米など食材を取り扱っているお店が多く存在していた。日本のフリーマーケットのように人々が賑やかに買い物をしている姿が印象的でまた価格もそんなに高くはなく、地域に根付くものを感じた。中でも一番興味深かったのは、薬屋(注)でいろいろな薬草をすり潰して粉にしたものを薬剤師が調合して薬にしているところに関心してしまった。私は、香辛料のスパイスだけだと思っていたので最初見たときは香辛料屋だと勘違いしたのだが、村には大切なお店のひとつであったことを後から知った。バザールでは人々の日常について多くのことを感じられたように思う。

宮田晴菜

注) アーユル・ヴェーダに基づく伝統医療の漢方薬屋さん

মলো

2月25日(金)

ジョソール県レブトラ村へノクシカタを見に、 そしてダッカへ



今日の朝は瞑想の場所に行くため、早めに起床しました。外は昼とうってかわりとても寒く、みんなサロワカミュージズの下に着込みアラムさんの引率の元、ティティ、シンパたちと一緒に昨日行った池に行きました。池につくとみんなで円になって座り瞑想を始めました。瞑想の仕方は深呼吸→アラムさんの言葉に従い目をつぶって想像する。瞑想が終わった後はとてもすがすがしい気持ちになりました。その後各自池の周りを散策し(この時人と話してはいけない)一人ひとりで考える時間を設けられました。瞑想が終わるころには朝日も上がりだんだん気温も上がり、とても気持ちよかったです。瞑想の後昨日散策した村のフィールドワークをしました。そこで村の暮らし、イスラム教とヒンデュー教の共存、ノクシカタについて村の人々にインタビューし昔ながらの文化の



知恵に感動しました。

そのあとティティたちの家について昼食を食べて、そこから1時間ぐらいかけてノクシカタの生産している町へ移動し、たくさんのノクシカタをみました。どのノクシカタもとてもあでやかで繊細な刺繍がこなされており女性の手先の器用さを実感しました。そこのノクシカタの商品も買えるとの事だったのでみんなで譲り合いつつ一人一品～二品、品物を買いました。そのあとティティたちの家に帰り荷物をまとめダッカへ帰りました。お別れはとても悲しく数人の学生は泣いており、ホームステイ先の家族も泣いていました。そのあと数時間車で揺られ、行きに乗った PANSINAO 号に乗りガンジス河をわたりつつ、民俗芸能パウルのミニコンサートを聞きまし。全体的に明るい曲で、楽器は、バイオリンと、バヨ

リン・ドゥオム (ドラム)・ハルモニウム (オルガンぼいの)・モンディーラでした。演奏後ハルモニウムを触らせてもらいましたがピアノのような感触でした。その後みんなで、船の上でご飯を食べ、バスが到着するまで星を見たり雑談し、楽しいひと時を過ごしバスに乗って帰りました。

ホテルに着いたのが深夜で、みんな眠たげにしながらミーティングを行い、各自就寝しました。

長崎彩美

অংক 2月26日(土) 27日(日) 28日(月)

シェアリングのワークショップとお買い物、そして帰国



26日(土)

ホテルでゆっくり起床し、7階でワークショップを行った。子どもと村というテーマに分かれ、曖昧だったことについてシェアリングすることができた。昼食はバスでKFCに行き、食べたい物をそれぞれゆっくり食べた。偶然日本人の大学生に会い、みんなのテンションは跳ね上がった。その後はお土産を買うためにアーロン、クムディニへ行き、みんなそれぞれゆっくり買い物を楽しんだ。そしてアゴラというスーパーマーケットへ行き、各々お菓子などを買って買い物は終了。夕食はシャズナというベンガル料理のレストランへ行った。GAP担当のJillur Rhamanさんが来てくれた。アラムさんからイスラム教とヒン



ドゥー教のお話を詳しく聞くことができ、すごく勉強になった。最後の夕食ということでデザートも食べることができたし、とても楽しい夕食になった。そしてホテルに戻り、バングラデシュでの最後の夜を過ごした。

27日(日)

11時にホテルを出発し空港へ。バスの中でみんなが一言ずつ感想を言い、歌をうたった。東先生やアラムさん、ルバルさんからも言葉をもらって、バングラデシュで過ごした日々を思い出し、涙を流した。もっとバングラデシュにいたかったし、アラムさん達とお別れするのが悲しかった。ぎりぎりながらも13時40分の便でバングラデシュとさよならをした。17時10分バンコクに到着し、



先生から160パーツ分をもらってそれぞれが好きな飲み物などを買った。2時間以上自由行動の時間ができた。そして22時35分、成田行きの便に無事乗ることができた。

28日(月)

6時15分、無事に成田空港に到着した。スーツケースを受け取って解散。バングラデシュでの生活で体調を崩したりする人は多かったが、大きなけがをすることもなくみんなで日本に帰ってくることができて本当に良かったと思う。

一生忘れない、とてもすばらしい体験をすることができた。

齊藤 脩

ほんとうの豊かさと私たち

2011.2.17-2.28 アジアとの出会いと異文化体験 バングラデシュの生活文化とフィールドワーク I

発行——東 宏乃（フェリス女学院大学 文学部コミュニケーション学科 非常勤講師）

発行日——2011年7月6日

編集——designFF+ 福澤郁文 + 高田真貴

印刷——フェリス女学院大学ドキュメントセンター

連絡先——azuma111@mrg.biglobe.ne.jp

